
黄海に消ゆ

俊衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄海に消ゆ

【Nコード】

N9709H

【作者名】

俊衛門

【あらすじ】

石の牙城、乾いた空。汚染物質が満たす大気を、ナノマシンの灰が舞う。享楽と混沌が並存する青島の街、電灰網——網膜の光情報、神経接続に裏打ちされた、仮想現実。そこに、“亡霊”と呼ばれるバグが存在していた。李聖鬼——故郷を棄て、「同胞殺し」と蔑まれ、己のアイデンティティを失った男は、“亡霊”と相見える。

巻：黒灰都市（前書き）

例によって、なんちゃってSF。空想科学祭2009参加作品。

R - 15 作品。暴力表現、性的描写あり。

壱：黒灰都市

血のにおいがする、と呟いていた。

「どうしたの？」

玲花リンファの柳葉めいた指が、首筋をなぞった。李聖鬼イ・スンギはその手を取り、指を絡ませる。

「何でもない、ただの独り言だ」

李聖鬼は少女の首筋に、軽く唇くちづけた。少女が小さく声を洩らす。甘ったるい白梅の香り。芥子の花めいた白く透き通る柔肌は、薄い紫の衣一枚で包まれる。注意深くそれを剥ぎ取ると、控えめな胸乳が晒された。

幼い膨らみを撫でつけた。薄桃の蕾を指で転がし、甘噛みした。少女の膚は、幹細胞から生み出された培養皮膚である。皮膚の下には、カーボンナノチューブの擬似神経が巡り、外部の刺激が電位信号に変換——プログラムが「快楽」を弾きだす。快を得、また快に乱れる少女に、欲を募らせる——セクサロイドとはそのための道具であり、この少女もまた、その中の一つに過ぎない。体を愛めで、精を放つために生み出された存在、ヒトの組織と同じ膚を持つ。それ故に、これを抱くものは少女の体そのものに溺れる。

何も思ふな。

呪文のように、呟いた。右手で玲花の下腹部をまさぐる、秘所を責める——玲花の吐息が荒くなった。氷のように滑らかな膚は赤みを帯び、熱を持った。器の内に滾る血潮と、高まる鼓動と吐息に直に触れる。李聖鬼は少女の腰にのしかかり、重みを加えた。玲花の背筋が弓なりにになった。鋼のような体躯が柔い肉に沈んでゆく。玲花の吐息が喘ぎ声に変わった。

何も感じるな。

少女の体に溺れつつ、少女が乱れる姿を冷静に見つめる自分がいた。性を売り、性の捌け口たるガイノイドが、一人の女の姿に重な

った。一瞬のこと、幻影に捉われそうになる自分に、言い聞かせるように唱えた。

何も見るな――

瞼に蘇る。土の感触。血のにおい。

「水晶……」

弾ける一つの名。精を放つ、同時に胸の内に拡がる虚無。

灰色のうねりに覆われた、青島チンタオの空を見上げる。密集した鉄筋の森が、鬱蒼とした陰を落としていた。

墨の色。空気に含まれる煤けた瘴気が、肺に満ちてゆく。建物の間、千切れて垂れた導電線、吊り縄の様相を呈す。砕けた硝子とプラスチック、有機素材タイルを踏み締めた。

無秩序に建てられた構造物の群は、打ち棄てられた城砦に似る。石と鉄筋がひしめく、鉄筋の森といった風情。スモッグの空、構造物体は砲金灰色。壁は腐食し、水銀が溶けた雨水が染み出している。皮膚病か火傷の痕を連想させた。

李聖鬼は両手にそれぞれ、銃を抜いた。撃鉄を起こす。銃はドイツのヘッケラー&コックのコピーモデル、牙狗ヤコウ四十年式。いずれもケースレス弾使用の三十連発、角ばった箱型の銃身、闇より深い鉄黒に映える。

象牙の銃把に施した彫刻――右には鳳凰、左には玄武。かつては金色に輝いていたそれらも、長い年月を経るうちに褪せた鈍色になり、メッキが剥がれて地金が覗いていた。

右の銃を正面に構え、左の銃は銃口を下に保持する。ビルの入り口に立った。背を壁に預け、暗がりを見据える。闇が口を開け、風の唸りが奥から聞こえた。

網膜の裏に、淡い光を感知した。すぐさま緑の格子線が像を結び、眼前に3Dを現出させた。網膜のスクリーンが映す仮想グラフィック、生体素子がデバイスとなり高分子に反映される。ミクロサイズの有機Eレディスプレイは、あたかも実際にそこにあるかのように

投影させる。

建物は十の階層に分かれていた。小部屋がいくつも隣接し、入り組んだ通路がグラフィックとして再現された。

その中央——城砦の奥深くに、一定のスペースがある。手狭な小部屋よりも幾分大きな部屋がある。そこが目指す場所だ。李聖鬼は一步、踏み入れた。

一瞬、真白い影が目の前をよぎった。光の加減だろうか、視界がぼやけたような感じた。しかし、すぐに持ち直す。

『あまり良い条件とは言えませんがね』

骨伝導の聴覚デバイスから、男の声がした。いつのまにか通信が入っていたようだ。間延びした声に、思わず舌打ちした。

「これから踏み込むというときに、上手い事意思を削いでくれる」
『この程度で削がれることなど？』

顎に内蔵されたスピーカは、耳元で直接囁かれているような錯覚に陥らせる。薄笑いを浮かべている、相棒の顔を想像した。もう建物の中に入ったのであるうか、声が反響していた。

『ちよつとした迷路です、まるで。見通しも悪いですし、わたしの武器も取りまわしづらい』

「仕事だ、文句を言うな」

言うと、相手は押し黙った。

建物の中に入ると、視覚を暗視モードに切り替えた。蛇の組織——暗所であっても赤外線を捉える李聖鬼の目。城砦の内部構造がつぶさに観察できた。毛細血管、あるいは神経組織のごとくに絡み合った配管、染み出す水の色まで。迫りそうな内壁と天井。等しく、箱の中に詰め込まれたような、息苦しさ。

両の銃を交差し、銃身同士軽く打ち鳴らした。

脳内に反響する声があった。もうずっとその声を聞き、呪縛のように李聖鬼の思考に纏わりついていた。故郷を離れてからも、相変わらず縛り付けていた。

侵食し、内側から食い破る蟲をイメージする。

何も思ふな。

レザークロップの下で、掌が汗ばんでいた。銃把を強く握り、細く息を吐いた。もう十五年経っている。幻影にうなされ、重油のよくな罪悪感に浸る必要は、もう無い。余計な事と言ひ聞かせる。

今は――目の前の敵に集中することだ。

扉の向こうにいろであるう、敵の姿を想像した。南京のマフィアが、青島に紛れ込んでいる。分断国家たるもう一つの「中華」、江南国民政府。その後ろ盾を得て、遠く台湾や日本にまで進出している。大抵は異民族――新疆、チベットや、南人と呼ばれる江南政府の人民。夷狄と蔑まれ、漢人に仇なす存在。

李聖鬼自身も夷狄であり、それであるにも関わらず漢人の側に回っている我が身は滑稽とも思えた。北京製の銃を携え、皮膚下に導入したサイバーパーツは、煙台の企業のものだ。流れる血でさえ、生来のものではない。李聖鬼を李聖鬼たらしめるアイデンティティは、殆ど残っていない。漢人達によって生かされているに等しい状態、その事実についても、もはや絶望を抱くこともなくなった。

右の銃を、水平に保持する。左の銃口を上向かせた。

ドアを蹴破った。

室内にいた男たちが浮き足立つ。両手の牙狗を差し出し、発砲した。緑色の発射炎が咲き、熱帯びた鉛の弾丸が切り裂く。手前にいた男の頭蓋を割り、組織をぶちまけた。左の銃を撃つに、別な男が脳漿と黒っぽい血を舞い上げて吹っ飛ぶ。そこでようやくマフィア達は事態を把握した。

サブマシンガンの一斉射撃。炎立ち、乱れた。

李聖鬼は壁伝いに走り、両手の銃を交互に撃った。火線交わり、弾痕が幾つも壁に刻まれた。ソファの綿を巻き散らし、絵画の枠を撃ち抜き、調度品の類を砕く。硝煙が充満し、火薬のにおいが鼻をついた。銃声、怒号、銃弾が跳ねる度、鉄筋が甲高く響く。

李聖鬼は射線に身を置かぬよう、地を転がり、飛び跳ね、障害物に身を隠しながら、正確に男たちを仕留めた。動きながら片手で銃

を繰り、前後左右に差し出して、全包围を射程に捉える。反動を支えるだけの腕と、広い視野を確保する眼、それらが無ければ成し得ない芸当、二挺持ちの射撃というものは。

銃のハンマーが止まった。弾切れ——すぐさま袖口から新たな弾倉を取り出した。プラスチック製の弾倉を指で摘んで銃把に押し込む、再装填。この間二秒。ハンマーが引き戻り、薬室に銃弾が送り込まれた。素早く両手を広げ、一発ずつ撃った。

鳳凰と玄武——緑色の発射炎を纏う。十字型に瞬く火炎、フィリピン人らしき老人を撃ち碎いた。螺旋に劈く弾が眼球を貫き、脳髓を抉り、後頭部に抜けた。乖離した蛋白質と血漿——黒色の人工血球と擬似神経の残滓。骨を押しつぶす衝動がした。

銃声が、止む。火薬と臓物のおいがした。室内を黒い血で染め上げて、流動の組織が溢れさせる。点々と血で汚れて、天井から滴り落ちた。

銃火、止む。一人、佇んでいた

広い室内に血のにおいを満たし、二つ銃を提げて見下ろす。骸が折り重なる光景は、何の感慨も湧かせないものだった。

「生憎だな。少しばかり、遅かった」

背後で高まる殺気に向けて、李聖鬼が言う。そして振向いた。

黒いジャケットを着込んだ男が、右腕を差し向けている。腕は金属の人工操作手だ。手首から、万年筆めいた銃口が突き出ている。ミニコレクタ

サブマシンガンの機構を備えた、戦闘用サイボーグのパーツ、左手には柳葉刀を携えていた。

「武人か、お前の雇い主は、もういない。ここで一戦交える意味などないぞ」

「李聖鬼……」

男の、血色の失せた紫の唇が、名を告げた。かつと見開いた両眼は、義体化された機械の眼。ガラス球の表面に、李聖鬼が映っていた。

「俺の名を知っているか」

「青島じゃ知らないものはいない。二挺拳銃の朝鮮人といえばな。または漢族の狗……」

そう言う男の言語は、朝鮮語だった。この街で耳にしたことは、数えるほどしかない。

「光荣だな。だが狗とは」

「その身に聞け！」

いきなり、男が発砲した。銃口から細かい炎が散り、銃弾が、李聖鬼の肩を貫いた。

不覚――

身を捻りながら、牙狗を二発撃った。男が右手の刀を振り回す。刃が弾き、火を噴いた。

続き、人工操作手の銃口から新たな火線が延びた。フルオートが床に縦列の弾痕を刻みつけ、コンクリと鉄屑を舞い上げた。

李聖鬼は後ろに退き、ソファに隠れて盾とした。そのソファを、柳葉刀が寸断する。スプリングと綿が飛び出、鈍い刃の色を間近に見た。再び刀を振り上げてくるのに、二挺同時に撃った。男は柳葉刀で銃弾を避け、右のギミック銃を発砲させた。

李聖鬼は銃火を避けるべく、左に回りこんで撃った。男は身を翻し、反転させ、銃撃を浴びせる。李聖鬼が距離を取ると、逆に間合いを詰め、柳葉刀で斬りこんだ。水平に振り抜くに、李聖鬼は身を屈めてやりすごす。

左足を軸にして後ろ廻し蹴りを繰り出した。靴底が男の脇腹に刺さる、男の体が傾いた。向き直り、両銃交互に発砲。刀によって、全て叩き落とされる。

男が距離を詰め、間合いが縮まった。およそ一メートル、刀を振りかぶる。刃が李聖鬼の脳天に振り下ろされた。

身を逸らす。皮一枚。刃が鼻先を通り、顔に薄く刻まれる。そのまま倒れこむように右に飛び、間合いの外に逃げた。

男が発砲した。雷管弾け、三点バーストで撃ち出される。弾の唸りを耳元に聞き、重く熱い、鋼の銃撃を太股に受けた。

膝が折れた。神経ごと断ち切られたような感覚。己の意思とは逆に、体は崩れ落ちることを望んでいた。

何も感じるな――

駆ける痛覚を、意識の外に飛ばした。膝をつきながら、左の牙狗を差し出して、人工操作手の銃口に狙いを定めた。

銃弾吐き出る、〇・五秒。一呼吸早く、李聖鬼が撃った。刹那、男の手元で光が爆ぜた。

マシンガンの機構が甲高く哭き、機械義手の回路部分が火を噴いた。撃った弾が、サブマシンガンの銃口に入り、薬室で炸裂した、手応え。内部で銃弾が衝突し、内側から義手を打ち破る――炎が一気に燃え上がり、銀色の人工操作手を食い破る。金属が破裂して、断裂した珪素筋肉とカーボンケーブルを四散させた。

「貴様！」

男は痛みに顔を歪め、やがて憤怒の表情に変えた。ボロボロになった右腕を引きずるようにして、間合いを詰めた。李聖鬼が右の銃を撃つのも構わず、突進し、刀を脇につけ、体ごと刺突してきた。額を貫くよりも早く、李聖鬼が飛んだ。

狭い天井にぶつかりそうになりながらも、李聖鬼の体は空中にあった。手足を撓らせ、跳躍しつつ男の背後に回りこむ。背中側に着地し、男が振向くよりも先に、後頭部に廻し蹴りを放った。

脛が頸椎を捉える。ぐらりと男の体が傾いた。

男が向き直る。刀を振り上げた。

二の太刀はない――

両手の銃を正面に据え、がら空きの胸に銃弾を撃ちこんだ。五発の銃弾が膚を貫き、弾頭が体内をずたずたに引き裂く。臓物、肋骨、千切れた組織の断片と体液――流れ出た。

返り血を浴びる、口の中に苦いものが広がった。唾が鉄に変わった心地――骨を圧し、灼熱に焦げる肉のにおいまで、感じ取れる気がした。

やがて斃れる。仰向けになり、男は血の海に沈んだ。

「李聖鬼……」

朝鮮語で、恨みを込めたように男は唸った。

銃弾を受けた胴は、腸が飛び出ていた。喋るたびに口から血反吐が溢れ、空気が洩れたような呼吸をした。義眼の目をかつと見開き、血走った眼で、李聖鬼を見据えた。

「貴様、何だつて漢人どもに従っている……」

男は使い物にならなくなった下半身を引きずり、左腕だけで這いずった。床に血の跡が尾をひいた。

「俺たちが奴らに何をされたか、忘れたわけではあるまい……漢人どもが、俺達にしたことを」

地の底から湧き上がるような声だった。黒く冷たい、粘性の液体が侵食するように入り込む。そんな風にすら、感じさせた。

脳裏に、また呪文めいた言葉が蘇った。

何も見るな。

「忘れちゃいない」

粟立つ膚に続き、背中がずきりと疼いた。

「ならば何故！」

それ以上のことを言うことは、叶わなかった。牙狗が吼える轟音が、男の声を永遠に掻き消した。脳天に突き立つ銃弾が間脳を破壊した。即死であった。

李聖鬼は銃を納めた。

「あなたらしくもないですね」

背後から声がして、李聖鬼が振向いた。線の細い、少女のような肢体を灰色のコートに身を包んだ男が、壁に寄りかかっていた。橙の髪色、白い膚。異様な風体は、暗い室内には映える。

コン・フェイレン
「孔飛連……」

「いつもならワンマガジン使い切ることなく終らせるのに、無駄な銃撃が多い。一人につき、二発も三発も撃ちこんで」

薄く笑みを浮かべて言う。

「余計なことにだけ、気が回るな貴様。そっちの方は済んだのか」

「一応はね。あなたが無駄な弾、消費している間に」

と、孔飛連は後ろを指差した。隣の部屋には、五人分の骸が転がっていた。喉を挟られ、他に外傷は無い。

牙狗をホルスターに収めた。まだ、血の味が舌に残っている。苦々しく、唾を吐き捨てた。

孔飛連は中央の卓にある、アルミのケースを取った。今回の目当てのもの、電子ドラッグのメモリ。

「これだけの取引に、武人なんて引き連れて……最近はこんな仕事ばかりですね。それでも、あなたが斃したのは両組織の頭です。きつと褒章が出ますよ」

「別に興味ないな」

「でしょうね。あなたは特別、そういうことに疎い。おそらく、人であっても物質であっても同じように撃つのでしょうか」

孔飛連は開いているのか分からない、細い瞼をわずかに緩めた。紺色の瞳が微かに覗いた。

「それでも、今、人に向かって撃ちましたね」

「どういう意味だ？」

「その男。あなたの故郷の人間でしょう？ 同胞を殺すときのあなた、一瞬だけです。躊躇の色が見えました」

本当に余計なところだけ、気がつく。この男、やたら勘だけは鋭い。心の内まで読まれているのではという錯覚に陥らせる。

「つまりんことを」

「故郷のことでも、思い出しましたか」

孔飛連が言うのに、思わず睨みつけていた。多分、相当険しい形相になっていたのだろう。睨まれた孔飛連が後ずさった。

「冗談、ですよ。嫌だなあ」

悪びれも無く笑うに、李聖鬼は溜息を洩らした。

「余計な事、口にするな。俺は老大から貴様と組めと言われたが、貴様をパートナーなどと思っていない」

李聖鬼はそう言って、撃たれた傷口を見た。

傷は血が固まり、すでに修復を行いつつあった。自己組織化を行う有機ナノマシン、DNAボット——人体の補修、強化、それらは本人の意思とは無関係に人体の恒常性を維持しようとする方に働く。ナノマシンが合成する分子により、膚が再生され、白い表皮すら覗かせていた。

「まあ、わたしはそれでも別に構わないんですがね。仕事をこなしていただければ」

李聖鬼は黙って牙狗を収めた。血溜まりに立つ——戦場の空気を感ずる。

声はもう、しない。

式：青島哀愁

青島上空を漂う灰色の雲が白みはじめたころ、ようやく夜明けを知る。スモッグが太陽光を遮る、街の片隅で、李聖鬼は目覚めた。

港湾からそれほど離れていない、北方の居住区。資本家たちが逃げた後の、老朽化した鉄筋の共同住宅。李聖鬼の住いだった。

黴臭いシートから半身を起こして、薄く瞼を開けた。

窓の外を見やる。城砦の構造物体が重なっていた。スラムの共同住宅が濃い霧の中に佇んで、褪せた城壁と剥き出しの鉄骨が天を突き上げる。住宅の屋上には、骨格にも似たアンテナが林立していた。その向こう——港湾部には企業のビルが、黒々とした外壁を伴い密集している。北宋中華随一と呼ばれる商業都市、青島。環境建築の多層型建築物の中で、中央の尖塔が頭一つ飛び出ている。天頂から放たれる、不可視の電波が街を覆う図を想像した。

李聖鬼は飛び起きた。顔を洗い、完全に覚醒した後、剛性繊維の道衣に着替えた。部屋中央に佇む。網膜に、光が差した。

電灰網——この街ではそう呼ばれる。ネットワークであり、またサービスそのものでもある。膚に下に息づく生体素子がネットを捉え、網膜に導入した高分子のミクロのスクリーンに映し出す——現実には仮想が侵襲した、ユビキタステクノロジーの代表格。この国の人間は目覚めとともに、電灰から流れる情報が無造作に網膜に投影され、ビット信号の瞬きを常に瞼に張りつける。ウエブニュース、掲示板——電灰が提供するものは、そうした二次的なものに留まらない。

空中に、いくつものアイコンが並んでいた。これも、そこに実際にあるわけではない、仮想のものである。存在し得ないものを、電灰網は忠実に、視神経に再現する。李聖鬼は、そのうちの一つを指で押さえた。点打する動作も、傍から見れば何も無い空中に指差しているに過ぎない。腕の神経が動きをトレースし、分子コンピュータ

タが処理をする。あたかも、実際に「そう」したかのように、網膜の画面ではウィンドウが開く。

目の前に――正確には電灰上に、男の姿をしたグラフィックが立った。体格は李聖鬼より、やや背が高い。青白いホログラムのそれに、徐々に色がついた。体の色が、褐色を帯びた黄色になり、黒っぽい功夫服が現出される。膚の質感、黒い髪。実物であるかのように細胞から忠実に再現された、グラフィックのドット表面。生身の人間のそれであるかのように生気を帯びてくる。

電灰の見せる仮想現実――擬似人体が、李聖鬼の一手前に立った。

ヒトのDNA情報をトレースしたコピー臓器の技術は、医療からの転用技術だ。塩基コンピュータにデジタル化された遺伝情報を取り込み、DNAの相補性、そこから成る細胞ひとつひとつを構築する。医者達はグラフィックの臓器を用いて、再生医療のシミュレーションを行う――擬似人体は、人の表層部分をコピーしたものだ。

電駆体 はヒトの表皮、筋肉を模した幻影、だがそれで事足りる。電灰網が提供するグラフィックは、実物同様の現実感を持たせる。

男の姿をした 電駆体 が恭しく拝礼し――この動きもまた、いちいち細かい――後ろに一步、退いた。右半身に掌を突き出し、腰を落とした。低い体勢の、八極拳の構え。李聖鬼は左半身に構え、距離を取った。

両者とも対峙したまま動かない。 電駆体 がにじり寄り、李聖鬼は拳を握りこんだ。

動き出しは、同時だった。 電駆体 が低い体勢で突進してくる。李聖鬼は左足を踏み込んだ。廻し蹴り。 電駆体 は右腕で空間を薙ぎ、蹴り足を受け流す。

李聖鬼の体勢が崩れたところへ、右肘を叩きこんだ。体ごと打ち込む、献肘。腹に当たり、途端、電流を浴びせたような痺れが伝播した。 電駆体 は実体を持たないため、打たれたところで何とい

う事は無い。ただし、打撃を受けた、あるいは打撃を浴びせたということが分かるよう、神経組織に対して一定のパルスを送り込む。何かに触れれば、その触れた感覚までリアルに再現され、脳にそこに何かがあると錯覚させる。電灰からダウンロードする遊戯は大した刺激を与えないが、こと訓練用プログラムとなればそれなりのダメージをくれる。

痺れが消えるのを待たずに、体勢を立て直した。間合いを取り、直立に構えた。電駆体が突進してくる。李聖鬼は顔面目がけ、右脚で前蹴りを打った。電駆体は身を屈め蹴りを避ける、と同時に突進し、左拳で突いてきた。

李聖鬼は突きを右手で打ち落とし、中段廻し蹴りを打った。脛に衝撃を感じ、電駆体の顔面が弾け飛んだ。蹴った脚をさらにかい込み、高く振り上げる。天井を突くように、右脚を伸ばした。

相手が身構えるよりも早く、一気に振り下ろした。

電駆体の脳天に、左の踵が突き刺さった。脚に痺れを感じ、それが電駆体の頭を正確に捉えた事を示していた。電駆体のグラフィックが消え、背後の薄汚れた壁が蘇った。そこで李聖鬼はようやく構えを解いた。全身が汗に濡れていたが、疲労は感じない。幻影は実際の人間の動きを模してはいるものの、実際の人間を相手にするのは違う。少なくともグラフィックの人形からは、殺気や気迫というものは発せられない。サンドバッグに打ち込むようなものだ。

道衣を脱ぎ捨て、シャワーを浴びて汗を流した。服を着て、レザーグローブを身につける。壁に掛けた他関節ハーネスを身に纏った。ハーネスには牙狗と、替えの弾倉が各所に取り付けられていた。銃は両脇に位置し、革のベルトで固定されている。ハーネスをタイトに締め付け、コートを羽織った。剛性繊維で編まれたコートは、漆黒に塗られている。コートだけでなく、身につけるもの全てが、深い宵闇の色をしていた。

葬儀屋のようだ——と言われたことがある。葬儀屋、言いえて妙

だ。ただ、自分のすることは死者を生み出すことである。送り出すものの気持ちなど、一生分からないと思われた。

軋む扉を開き、外に出た。

通りに出ると、黒っぽい粉が、空気に混ざって浮遊しているのが見えた。

環境負荷物質を駆逐する有機ナノマシンの残骸——時折降る、黒い灰。「大内乱」の残した爪痕——紛争で使用された化学兵器の残滓が、二十年経った今でも空気中を漂い、健康被害を引き起こす。空気中で化学物質を吸着し、灰となって降る。中原では良く見られる現象だ。ナノマシンの散布状況を電灰のウェブニュースで確認するのも、この街の人々の日課になっていた。

降りしきる残骸に目を眇め、共同住宅の群、建築物を見上げた。切り取られた空に厚い雲が覆い、太陽を完全に隠している。スモッグの層からは、わずかに光が洩れる程度であつた。この街に、まともな日の光が差し込んだところを、李聖鬼は見た事がない。十年前、この国に流れ着いたときからずっとだ。

陽光は閉ざされたまま、それが青島であり、それが街の色である。灰色の空、ナノマシンの残骸。空洞化した都市に鉄の骸が林立する。城砦は、語る事を忘れた墓標のように思えた。

大通りを外れ、入り組んだ路地に入ると、城砦から落ちる影が濃くなった。やがて古ぼけたバーの前で立ち止まった。資本家連中は決して足を運ばない、民工や二等市民を相手にした盛り場。まとまった金は無いが日々の生活費から飲み代くらいは捻出できる、という身分のものが集まる場所。

中に入る。

寂れた雰囲気店内には、誰もいない。まだ開店前だった。カウンター席に、灰色の格好をした男が一人、座っているのみだった。

李聖鬼は男の隣に座った。

「この間はご活躍だったようだな、李聖鬼」
首をもたげず、目だけで隣を見やる。灰色の格好をした男は、つ

ばの広い帽子を目深にかぶっていた。顔は、伺えない。

「そいつはどういう皮肉だ？」

「皮肉ではない。実際、お前が始末した男、薬の元締めとなっていた。老大も喜ぶ」

顔も見た事も無い、命令だけを下す存在——組織の長は、老大と呼ばれる。本名は誰も知らないし、知りたいとも思わない。ただ組織に君臨するものとしての称号として、老大^{ラオダー}という号を用いている。この男は老大の言葉を、正しく伝える、そういう役割を持っている。「紹興酒」

と告げると、仏頂面の主が目の前に、グラスを置いた。褐色の膚には、マザーボードの回路にも似た文様が浮かび上がっている。手の甲には不自然な、四角形の傷痕があった。汚染された血液を清浄に保つ、バイオセンサーとしてのタグが埋め込んでいる。DNAタグを埋め込めるような身分は限られている。二等市民以下は旧型の医療素子で我慢するしかない。それすら手に入らないものは、いずれ化学物質に侵され、死んでゆく。

「それで、俺を呼び出したのは」

男が青島ビールに口をつけたとき、切り出した。

「世間話するために、というわけではなかるうに」

「察しが良いことだな」

男は懷から煙草を取り出し、火をつけた。古い銘柄の“成海”の、強い刺激の香りが漂った。

「何百回と同じ試行を繰り返せば、誰だって慣れる」

一杯目の酒は一息で飲み干すのが、李聖鬼の流儀だった。酒を煽り、グラスを空にした。いくら飲んだところで、酔わない。肝臓のナノマシンがアルコールを瞬時に分解してしまう。

男は紙幣を取り出した。古い元通貨。北宋中華の初代主席の顔が、印刷されている。カウンターに置かれた。李聖鬼は黙って受け取った。

丸められた紙幣の中に、記憶メモリが納まっていた。指の先に乗

るほどのサイズだ。それでも、最新の生体素子に比べれば随分大きな方である。

「マフィアも高度に武装をしてきてな。政府の手にも、段々と余るようになってきた。江南政府の後押しがあるんだろうが……」

男がそう、溜息混じりに言った。

北宋と境を接し、南京を首都とする江南国民政府。大内乱で成立した軍閥政府の中では、特別強力というものではない。ただ、江南の政府はEUとの繋がりを密にしていた。紛争における、武人たちの改造は殆どが欧州の企業によるものとされる。

「”亡霊”の噂を聞いた事あるか？」

男が切り出すのに、李聖鬼は二杯目の紹興酒に口をつけていた。

「”亡霊”？」

「電灰に介在するバグのことだ。数年前に、漢電子が電灰網を構築した時から、仮想現実の中に必要の無いグラフィックが混ざることには良くあった」

男はまた、ビールを口に含んだ。

電灰のシステムを構築した企業——漢電子。青島に居を構える漢電子は、ここ五、六年のうちに世界的企業にまで急成長した。北宋中華独自のネットワークを構築したのも、漢電子である。それが、電灰という呼称で人々の間に定着していた。

「バグなんて、システム管理者が取り除くことだろう」

「”亡霊”は少し違う。確かに、ネットに紛れるバグなんてものは直ぐに取り除ける。信号の受信不良、サーバーの不具合、誰かが残したメッセージ。だが、このバグは違う。最初は小さなものだった。電灰が見せる仮想現実、そこに写りこむノイズのようなもの。ただ、それは徐々に人の姿を帯びた。それだけならば良かったが、それは意思を持っているかのように見る者を惑わすようになった……」

ただのグラフィックの、一体何に脅威を感じているのか。そう、問い詰める。男は答えず、

「詳しい事は、そこにある」

そう言つて、李聖鬼の手にあるメモリを指し示した。

「お前達は、”亡霊”を排除する。それが、与えられた使命だ」

「それはいいが、組織がやることなのか。もっと、設備の整ったところでやれば良いだろう。大体、そういう事はハッカーの仕事であつて、武人のやることでは」

「ハッカーだけではない。北京は、この”亡霊”の出处は南のマフィアだと断定している。発信元を探り、南人たちを一網打尽にする――そういうことだ」

「南人、か」

江南に住むものを、この国の住人は「南人」と呼ぶ。純然たる漢民族に対し、夷狄であることを明らかにするために。漢人や南人の別など無きに等しい。「中華」の名を冠するか否か、それが両者を分けるための唯一のものだ。

「山東には、南からの侵入者が多いからな。組織は、国境を重点的に攻めるつもりだ。南人どもに、好き勝手はさせないという狙いだ」

刺々しい、響きのある声だった。背中がささくれるようだった。砂を食むような不快感。体内に浸されてゆく。こみ上げてくる吐き気を、最後の酒と共に飲み下した。

「李聖鬼」

男が席を立ち、言った。

「まだ、十年前の傷は痛むのか？」

それを聞いた瞬間、李聖鬼の中で何かが弾けた。内なる衝動が突き上げ、反射的に立ち上がった。いまにも、男に掴みかからん勢いで。

「おっと、こいつは失言だったかな」

男は悠然と腰掛けたままだった。この男は分かっているのだ。李聖鬼が、決して手出しが出来無いことを。

――狗

朝鮮人の男が、最後に言ったことが思いだされた。

男が卓のセンサーに、掌を翳した。皮膚の生体素子を照合し、銀

行から振り込まれるシステム——機器に導入されたチップが相互に干渉し合い、情報を交わす。電灰に飛び交うビット信号は人のみならず、人と機器を繋ぐものでもある。

「あまり余計な事を言っなよ」

男が席を立ち、

「まあとにかく、しっかりとやることだな」

そう言い残して、店を出た。

気づけばグラスを強く握り締めていた。硝子が碎け、掌から血が滲んだ。

席を立った。

参：煙色昂龍

「“亡霊”といえばここ数年、北京や煙台で起こっている現象ね」
端末のキーを叩く手を止め、毛蘭マオランが言った。見た目は二十代半ばといったところだが、年齢は四十歳を越えている。若く見えるのはアンチエイジング——ドラッグデリバリーマシンのホルモン操作の賜物。カモシカめいた脚を組んで、白衣のほつれを弄び、艶っぽい視線を浴びせる。

「目撃情報も結構ある」

「そんなに頻繁にか？」

「知らぬは武人ばかりなり、ね」

皮肉っぽく言って、嘆息した。

オフィスの一角だった。南方の、企業家たちが集うビル街に、組織の拠点があった。城砦よりは清潔で、港湾の環境建築から見れば相応の安普請。土を塗り固めたような構え。都市でも中流より下の人間が使う、この街では一般的なオフィスだった。

毛蘭が端末に記憶メモリを挿しこんだ。キーを押して、液晶を李聖鬼に向けてみせた。液晶には白い背景に、金色の格子が縦横に走っている。液晶に、無秩序な視覚情報が瞬き、やがて3Dの像を結んだ。

「数年前、電灰に現れたのはアニメーションと変わらない、ただのドット絵に過ぎなかったんだけど、それがはつきりと人の姿を——
今では、見た目は殆ど生身の人間と変わらない」

3Dは、灰色の布切れを纏った人間だった。顔を覆っているが、体の線からして女の姿をしている。

「それが、“亡霊”か？」

「目撃情報を元に再現したもの、だって。あたしも見た事はないから、これが真実の姿なのか否か分からないけど」

「あんたでも、見ない物があるんだな。それだけ生きていて」

果たして毛蘭は、苦い物を噛み下したような顔になった。

「女に年齢のことを言うものじゃないわよ」

「殆ど年なんて、あつて無いようなものだろう」

プラスチックのカップに手を伸ばした。冷め切ったコーヒーは、槽培養の豆を挽いている。クローン食品というものは、オリジナルのものに比べて、酷く味気ない。苦味と糖の甘みが舌に残り、口腔に留まる感じがした。

「“亡霊”が人の姿をしていて、それがどうしたんだ」

「この“亡霊”、最近では企業や官公庁のメインコンピュータにも見られるようになったのよ。防壁を掻い潜り、しかも破った形跡もない。侵入して、データだけ掠め取る」

防壁を破る。それがどれほどのものか、李聖鬼には計りかねた。

「漢電子は“亡霊”の駆逐に乗り出している。電灰の管理者としては、そんな存在を放置しておくわけにはいかないからって、組織に依頼してみた。サイバー化された者からすれば、電灰が見せる虚像は現実の環境に埋め込まれた形として見える。“亡霊”がもし、人の姿をしているならば、確かに問題かもしれないわね」

「どんな風に」

「車に乗っていて、急に飛び出されでもしたら危ないでしょ？」

冗談めかして言う。

何の益も害ももたらさないグラフィックを、何故血眼になって探さなければならぬのか——疑問をぶつける。

「それも、システムエンジニアやクワッカーのみならず、俺たち武人を使ってまで。南のマフィアを警戒しているような言い草だったが」

「上の連中は、“亡霊”が進化した過程を恐れているのよ」

「進化？」

そう訊くのへ、毛蘭は端末のキーを叩いた。

「ただのビット信号が、今ではバーチャル3・0の世界で現実の人間と変わらぬ姿にまでなったのよ。この一、二年で。生物が環境に

適応し、その形態を変えるように、”亡霊”もまた、姿形を変えている……それを脅威と捉えるか否か。上の連中はきつと、この件には他の軍閥政府が関わっていると踏んでいる。南人や回族みたいな異民族が――」

言ってから、毛蘭ははつとして口をとぎした。

「あ、ごめ……」

ばつが悪そうに言う。

「別にいい」

李聖鬼は飲む気が失せたコーヒーを、卓の脇へ押しやった。

「それより、進化などと言ったが」

「……進化というのは喻えだけど、でも確実に精度が上がっている」毛蘭は申し訳なさそうに、俯いていた。だが改めて言われなくとも、自分が異民族であることなど自覚している。己の血について、思い悩んだことなどない。逆に、同情めいた反応を返されると、やりきれない思いに駆られる。同情を買った時点で、ちっけな自尊心や虚勢まで根こそぎ持っていかれそうな気がするのだ。

かといって蔑まれることに慣れているわけではない。結局、どこへ行っても李聖鬼は流浪の民でしかない。

「北京が望んでいるのは捕獲じゃなくて殲滅、”亡霊”の出处と南のマフィアを一齐に潰すということか」

「まだ、この街に潜んでいるとも限らないんだけどね。一応、やってみるわ」

毛蘭、端末のキーを叩き出す。E.L.のディスプレイに、青島の見取り図が三次元構造で表示された。

「分かっているだけでも、南のマフィア、チベット、満蒙系の黒社会が、この街には存在するわ。これほどの技術力を要する組織となれば――」

そこで毛蘭は思い出したように、部屋の隅で端末を弄っている青年に、声をかけた。

「阿宮」

声に応じて、阿宮と呼ばれた青年が顔を上げた。瘦身の、線の細い頼りなげな風体をしていた。短く揃ったような髪は、寝癖みたいにところどころ跳ねている。男は寝ぼけたような返事をした。

「なんですか？」

ずり下がった眼鏡を押し戻して、その奥に潜む一重の瞳は死んだ魚のように生気がない。

「青島の事なら、彼が詳しいわよ。阿宮敬二、ハッカーとしての腕も保証するわ」

毛蘭が言うのへ、

「日本人か」

我知らず、口調に棘を含んだ。

「あまり怖がらせない。彼は青島生まれなのよ。まあ、いわゆる残留孤児。ここの地理には詳しい」

阿宮敬二なる青年は李聖鬼を見ると、愛想笑いを浮かべた。日本人というのは、表面は大人しく振舞うものだ。

「よろしくです、李大人」

「気安く呼ぶな」

握手を求めてくる手を、振り払った。阿宮が戸惑いの表情を見せ、毛蘭が溜息を洩らした。

「何を喧嘩売っているの。変わらないわね、その日本人嫌い」

「日本人嫌い……」

阿宮がうなされるような声で呟いた。ぼそぼそと蚊の鳴くような声で、まことにはつきりしない。

「こいつと組めと？」

「一応、チームには加えろって老大が。あと、二人ほど追加するか」

「二人？」

「あなたと孔飛連と、もう一人。組織が任命しているのよ」
液晶に記されている名前を見ると、李聖鬼はますます渋面を濃くした。

「こいつと組め、というのか」

「そういうことみたい」

「何故」

「知らないわよ。彼らは政府の意向を、正しく反映させることしか考えていないんだから。末端のことに気を配るなんて、器用な真似が出来ると思う？」

無理だろう、と思った。道具の選択に気を使うものはいても、道具のことを思う者はいない。

オフィスを出て、エレベータに乗り込んだ。一世代まえの電動式——ワイヤーとモーターで動く昇降機。港湾では電磁誘導タイプが主流とか聞くが、そんな気の利いたものはない。

阿宮敬二がついて来ようとするのをひと睨みただけで追い返し、ボタンを押した。

「あまり邪険にするものじゃないですよ」

いきなり背後から声がするのにな、飛び退いた。いつの間にか孔飛連が後ろに立っていた。

「いたのかよ……」

「先刻からね」

細い瞼の端を緩めて言う。相変わらず、見ているのかいないのか分からないような目つきだと思った。橙の髪、右手で弄っている。

「彼も我々の仲間ですよ。いくら日本人とはいえ彼があなたに何かをしたわけじゃないでしょう」

「日本人は皆、信用ならない」

「そうですね。まあ、わたしとしてはどうでもいいんですが」

孔飛連は、そう言ってくつくと喉を鳴らした。これが、この男の笑い声ということになっている。

「で、残るもう一人を、ということですか」

「よりによって、一番厄介な」

階数表示が1と刻み、B3まで下ったところでエレベーターが止

まった。

地下は昏かった。廊下を照らすものは、三メートルおきに裸電球が据えつけてあるのみだった。

「LEDつけるとは言わないけど、もう少しなんとかありませんかね」

苦笑しつつ、孔飛連が言った。今にも消えそうに明滅する電球、その一点だけは同意だった。

廊下の突き当たりまで行くと、目の前に重い金属の扉が現れた。李聖鬼が先行し、扉を開ける。

湿った空気が、塊を成して流れ込んだ。部屋の中は更に暗く、洞窟の中にいるかのように音が反響した。埃っぽい部屋の中、足を踏み入れると粉塵が宙に舞った。

腐臭がする。孔飛連の顔から、初めて笑みが消えた。それはおそらく、李聖鬼も同じだった。暗闇に目が慣れると、地面に乾いた血の跡が筋を作る。部屋の奥で、蠢く影があり、血はそこに向かって伸びていた。

影は二人分。一つは壁に張りつけられて、もう一つは刃物を携えていた。大柄な体をしている。

ウェン・ダオロン
「温道龍」

李聖鬼が呼びかけると、刃物を持った方が振向いた。禿頭の男。一重瞼を睨め、やぶ睨みに李聖鬼を見た。

「何の用だ」

温道龍がぶつきらぼうに応えた。手には大型の蛮刀——まだ乾ききらない血が、切っ先から滴り落ちていた。

血は、壁に張りつけられた人物のものであることは間違い無かった。温道龍の後ろ——鎖で手と首を繋がれて呻いている男がいた。素裸に剥かれているが、男の下半身は赤黒く染まっている。腹が裂かれ、鼻と手指を削ぎ落とされ、皮膚が剥がれて筋繊維が露出していた。

それでも、男はまだ生きていた。意識を失いながらも、くぐもつ

た声で啼いている。

「お楽しみですか、温大人」

孔飛連が言うのに、温道龍は刀を地面に突き刺して、のっそりと歩み寄った。明かりの元、温道龍の体躯が露になる。

ステロイドで強化された、不自然に発達した筋肉の塊——腕は女の腰周りほどもある。大樹の幹を髣髴とさせる胴に、防具替わりの鉄線を巻いた風体。仕留めた敵の体から抉り出した、金属部品を錆潰して作っただけらしい。根を張る太股は、熊の脚よりも隆々として、衣服の上からでも血管が浮き出ているのが見て取れる。

不恰好な、肉の鎧を纏っているようだった。肥大した筋肉は、力の伝達を遅くする。

「温道龍、あんたと組むことになった」

李聖鬼が言うと、温道龍が嘲るように鼻を鳴らした。

「貴様と組むだと、大層な冗談を」

「俺じゃない、上が組めと言っているんだ。老大がな」

「老大が……」

温道龍は椅子を引き寄せて腰かけた。

「敵は」

「"亡霊"と、それを裏で操っている輩です。南のマフィアが背後にいるんじゃないかと踏んで、百戦錬磨の温大人が選ばれたのか」と、孔飛連。さりげなく、温道龍を持ち上げた。温道龍は組織の中でもかなり古株だった。かつての大内乱で、北京軍閥の急先鋒として戦地に赴いたことがあると、いつぞや聞いた。

「"亡霊"を狩るなら良い、南人と構えるのも良い。だが解せねえ。何故俺が、その朝鮮人と組まなければならない」

「まあ、わたしが赴くとなれば、自然と李大人も同行することになるのでは……」

「老大が言うなら従うが」

温道龍がぎろりと目を剥いた。瞳孔が異常に拡大し、黒目は朱に濁っていた。環境負荷物質による、視神経障害の痕だった。温道龍

は、内乱で生物兵器の二次被害を受け、放っておけば失明する運命だったという。そのとき組織に救われ、ナノマシン治療を受けた。そのため、この男の組織に対する忠誠は並大抵のものではない。

「貴様、この間朝鮮族の武人と、一戦構えたんだってな」

「それがどうした」

温道龍がいうのに、李聖鬼は義眼の男が最後に洩らしたことを思い出していた。

狗、と。

「少しばかり、図に乗った朝鮮人が、武人ひとり潰したぐらいで俺と同格になったつもりか」

「過去にすぎる古兵より、マシな働きをする自信はあるが？」

「抜かせ、小僧」

いきなり、温道龍が立ち上がった。山が迫るような圧力——頭二つ分高い位置から、温道龍の赤い瞳が見下ろしてくる。

「もし、俺の足を——いやそれどころか、俺の視界をうるちよろしたら」

「どうだというのだ」

さりげなく腰に手を伸ばした。伸縮式の単分子ナイフに指を沿え、温道龍が微かでも動けば抜けるように——温道龍が左拳を握る。

「はいはい、そこまでですよ」

孔飛連が、強引に二人の間に割って入った。

「そんなことに、余計な労力を裂かないで下さい」

言いながら孔飛連の手は、李聖鬼の腕を掴んでいた。やんわりと握りこむ——真綿で包まれたような、しかし抵抗した途端に骨をも砕く万力となりそうな——得体の知れない、懼れを感じる。

李聖鬼、ナイフから手を離れた。

「とりあえず、向かうべきは南のマフィア。我々のすべきことは、仲間割れじゃないでしょう」

「どっちも同じだ、南人も、朝鮮人も」

温道龍が吐き捨てた。その科白は、そのまま返してやりたかった。

李聖鬼から見れば漢人も南人も変わらない。

「それで、今後の方針を――」

孔飛連が言うのへ、李聖鬼は背中を向けた。

「どこへ？」

「そっちは適当にやれ。俺は情報さえあれば良い。そいつと行動を伴にするのは御免だ」

後ろから孔飛連が何かを言ってくるが、部屋から出たいという願望が勝った。

肆：深藍薄暮

環境負荷物質による、内陸アジアの汚染——影響は沿岸部にまで及ぶ。重金属と化学兵器——被害報告が成されるようになり、政府は汚染物質を取り除くことに心血を注ぐようになった。微小なナノマシンを散布——汚染物を空気中で吸着し、複数の粒子が集積して結晶となる。ナノマシンの残骸は、環境修復の一環。視神経に投影されるディスプレイには、汚染物質の情報が流入してきた。ご丁寧に、成分まで表示されている。

肩に落ちる塵、軽く払った。役目を成したナノマシンは、乾燥して灰のようになる。歩くたび、地面に落ちたナノマシンの残骸が枯葉を踏むように鳴る。

道の途中、共同住宅群の中に、ぽっかりと開いた隙間のような広場があった。屋台が並び、民工たちが群がっている。背中を丸めて、腕を抱え込むようにして食しているが、何も奪られることを心配しているわけではない。灰が、腕の中に入らないようにしているだけである。卓には灰よけの傘がさしてあるが、横から吹き込む灰に対しては無防備に過ぎる。

李聖鬼は適当な屋台を選び、腰掛けた。

「ご一緒しても良いでしょうか？」

そう告げる声があるのに、李聖鬼は早々に席を立とうとした。が、肩を掴まれて引き止められる。

「何だ、貴様」

うんざりしつつ嘆息した。孔飛連は相も変わらず薄い笑みを浮かべて、向かい合う形で座り

「温大人にも困ったものです。あの男は尋問の対象だったのに、あれではただの遊戯だ」

丁度、李聖鬼の目の前に湯麺が置かれた。周りの労働者と同じように、背中を風上に向けて自らを灰よけとする。孔飛連も同じもの

を注文していた。

「まあ、温大人はああいう人ですけど、上があの人を組み入れた理由も分かりますよ。南人相手となれば、異様に執念を燃やす人ですから」

「あの男は典型的な中華思想だ。夷狄を蔑んでいる。異民族が嫌いなんだろう」

湯麵を啜りながら言った。

「少し、違うと思いますよ。異民族が嫌いというのであれば、わたしだって漢民族ではありませんし」

「どういうことだ」

「わたしの生まれは吉林省でしてね。母親は満州人でした」

吉林省——朝鮮半島の直ぐ上に位置する。漢民族の他に、回族や満州族が多く住む地だ。

「辮髪^{べんぱつ}じゃあないのか」

「今どきあんな髪型の人はいませんよ。漢民族との同化が進んで、今では純粋な満族など数えるほどしかいませんね。わたしも、満州人とは言い切れないかもしれません。けれど、完全な漢民族とも言えない。内モンゴルや、回族だって、北宋中華の中に組み込まれていますし。けれど、南人は北宋となんら変わらない漢民族であるにも関わらず、あたかも異民族であるかのような扱いを受けている」

舞い落ちる灰が、一層数を増した。煤の塊が、降ってくるようだった。北東から吹く風に煽られ、中空で渦を巻いている。民工たちは寒さに背中を丸めて、じっと耐えていた。生物であることを捨て、無機物になろうとしているかのように身を縮めている。黙々と手を動かしている動作も、機械めいていた。

「南人というものは、結局華夷秩序からあふれたもののことですよ。北宋は、漢人であるという地位をこの国の民に与え、中華思想に与しなかったものを”夷狄”と呼んでいるに過ぎない。チベットやウイグルといった分かりやすい異民族ではなく、単純に概念の問題として、南人、あるいは江南政府がある……」

電灰がもたらす視覚情報が、瞼の裏でちかちかと明滅した。薄桃に縁取られた、銀色を帯びたウィンドウ——寂れた街に上書きされる。有機ナノマシンの散布の終了を告げる、ウェブニュース。いつの間にか、灰は降り止んでいた。

李聖鬼は箸を置いた。

「これから搜索を開始しますが、あなたは」

「寄るところがある」

李聖鬼はそう告げるに、

「市北に、行くのですか？」

孔飛連が言った。

「あのガイノイドのところへ」

玲花のことは、李聖鬼から話をしたことはない。ただ、特に隠す必要もないので、市北の売春窟に足を運んでいることを、以前言った事がある。そこにいる娼婦の殆どがガイノイドであること、孔飛連も知っている筈だった。

「セクサロイドというものは、わたしは駄目ですね。生身の女を抱いているような感覚を覚えるように造ってあるのが、逆に苦手です。どうして、機械を抱く気になるのかが気になったもので」

皮肉のつもりか、孔飛連は本当に疑問に思っているのか。薄ら笑いを浮かべた表情からは、真意は読み取れなかった。

「それとも、そのガイノイドに誰かを重ねているとか？」

「何？」

「よくいるでしょう。昔の恋人と同じ姿形のガイノイドを造って、それを愛でる資本家が。そういうことですか？」

李聖鬼は黙して卓を立ち、踵を返した。

「あ、ちよつと怒ったのですか？ 待つてくださいよ」

後ろから孔飛連が追いかけてくる。そんなこともお構いなしに、

李聖鬼は城砦を後にした。

黒い薨^{いづか}の構造物、旧時代の遺物が並ぶ。市北は特に開発の遅れた

地域でもあった。

そこに李聖鬼が足を踏み入れたときには、すでに薄暗くなっていた。群青の靄が空を包んでゆく。光が当たれば、諸々のことが思い出される。闇は、全てを包み隠す——故に、何も考えない。夕刻から夜、李聖鬼にとって一番安らげる時間となる。

宿の前についた。微かに、香のにおいがした。本物ではない、化学物質の合成香料。この街では、どこからでも香ってくる。

門番が立っていた。六尺以上ある背丈、隆々と盛り上がった筋肉、山が聳えているような印象を受ける。門番は李聖鬼の顔を一瞥すると、一言も発することなく入り口を顎でしゃくった。顔を覚えられている——どれほどここに通ったのか、覚えてはいない。

店内は薄暗かった。石の壁が、むき出しとなっている。造りは、城砦とさほど変わらない。とはいえ、居住のための空間が残る分、城砦よりもいくらか恵まれている。スラムの構造物は、廃墟と同値に思える。

香のにおい——噓せ返りそうな、濃度の中を進む。

部屋を取る。二階の、一番奥だ。

李聖鬼が来た事は、他の者にも知れ渡っているようだった。色好きの朝鮮人、として。だが、色を好んで通っているわけではない。

麒麟の彫刻を設えた扉だった。戸を開ける、部屋の中央に寝台が備え付けてある。その中央に、玲花の体が横たわっていた。李聖鬼が入ってくるのを認め、玲花が半身を起こした。

「来てくれたんだ」

薄紫の絹の衣に身を包んでいる。華奢な体にゆったりとした漢服——幾分アンバランスに見えた。

李聖鬼は寝台に腰を掛けて、玲花の衣服を剥いだ。裸身が露になる。乳房に触れ、なだらかな稜線をなぞった。

玲花の膚に指を沿わせる。下腹を弄り、柔らかな繊毛が触れる——絡みつく。玲花が軽く喘ぎ、腰を仰け反らせる——愛撫し、舌を這わせ、唇を吸った。

玲花の瞳と向き合った。左の眼球は翡翠色——澄んだ虹彩に李聖鬼の姿が写る。鮮やかな虹彩に、息が詰まりそうになる。脳裏に突き刺さるフラッシュバック——玲花の像が歪む、一人の女に重なる幻影を抑え込んだ。

愛撫は激しさを増す。呼応して、玲花の息が荒くなる。細い腰を抱え、貫き、膚と溶けあうような高揚と奮えが神経を駆けた。

灼熱に、うなされた。わだかまる熱、少女の肢体ごと抱く——熱が、手に残る。

「ねえ、何を思っていたの」

腕の中で、玲花が訊いた。

「何を、とは」

おかしなことを言うと思った。ガイノイドは、基本的に質問などしない。プログラムの通りの行動、プログラム通りの言葉を紡ぎ、その言動は従順であり続ける。抱く者にしてみれば、セクサロイドは性欲を満たすだけの道具ではない。それが、まるで意思ある固体であるかのように振舞う。

「あたしを抱いているとき、あなたはいつも他の事、考えている」

「例えそうだとしてもお前には関係のないことだ」

本来ならばあり得ない会話——

玲花は、最初に抱いたときは本当にただの人形のようにだった。あらゆる遊戲に、あらゆる要求に、応じるように彼女らは造られている。ただ受容し、要求のままに行く。それだけのことに、この街の住人は価値を見出している。

玲花は、他のセクサロイドとは違うものがあるように思えた。抱くほどにこの少女は、単なる器ではなくなるような気がしていた。膚も、その下に息づく擬似神経、そして片方の目だけが染め上げたような色をしている。その全てが、一つの因子——細胞から成っている。たった一人の女の、遺伝情報を元に。

「余計な事を言うな。お前は、与えられる全てに従順でありさえすれば良い」

どんな快楽も、どんな苦痛も、疑問に思わず呑み込み、受け入れる。少女の象はそのためにあり、有機の体には肉欲としての——乾きを潤すためだけの理由しかない。

ふいに李聖鬼が首を傾けたとき、玲花の吐息が瞼に触れた。

次いで、柔らかい唇の感触が額に灯った。

玲花が発した言葉が、曖昧な輪郭を以って響き、その声ごと空間に溶け消えそうな気がした。ガラスの縁をなぞる指、もっとも壊れ易いものに触れる。

やがて、果てた。手の中で玲花の体温が、収束してゆく。熱を帯びた膚が、冷たい氷塊のごとくに。灼けそうな、うなされるほどの体温が、鼓動の高鳴りが、平らかになり——

気づけば、少女は眠っていた。

「お前に、何も分かりはしない」

それが、玲花にはないものに投げかけていることを、自覚していた。

「分かることなどない……」

少女が脱ぎ棄てた着物が、まだ香っていた。その残り香に、しばし酔っていた。

そして夢を見ていた。

草原があり、空があった。灰色に塗られた青島からは、あまりに遠すぎる故郷の風景だった。彼方には山脈が連なり、乾いた風が冷気を運んでいた。恵まれた生活とはいえない、けれどそこには少なくとも、温かみがあった。独りではなく、誰かがいた。

少女が、草原の中に佇んでいた。水晶、と呼んでいた。水晶の黒く艶めいた髪がなびき、振り向いた。少女が微かに笑い、蒼い瞳が、李聖鬼を見つめて——

やがて、李聖鬼は一人となった。

目覚めとともに、波のように押し寄せる感情の奔流があった。数千の針が弾け、胸の内一杯に痛みが広がった。痛みは一瞬のことで、次には虚ろな意志が満たした。耳鳴りのようなざわめきの後、ただ

静寂のみがあつた。

何も思つな。

思えば、痛みしか残らない。目を閉じ、耳を塞げ。そう言い聞かせる。感じることを棄てれば、それで幾分楽になれる――

十年前から変わらないルーティン。繰り返すことで、保つ。途絶えた瞬間に、壊れる。

脅迫めいた、声。

李聖鬼は身を起こした。衣服を着る――白梅の香を脱ぎ捨て、硝煙の気配を纏つ。振り向かず、部屋の戸を閉めた。

伍：橙光虚像

”亡霊”のパターンは変化しつつある。そう毛蘭が告げた。

「電灰の映すグラフィックは、コンピュータの電子演算が見せる虚像。そしてもう一つ、医療用シミュレータである 電駆体。しかしいずれも、メインとなるマザーコンピュータがあつてこそ機能するものであつて、勝手に動き回することはまずないわ」

ビルに集まっていた。毛蘭が端末の液晶を叩いて、画面を映し出す。空中に、3D映像として具現化した。金色の格子が像を結び、それが徐々に容作る。女の姿を、現した。

「それは”亡霊”、ですか」

孔飛連はコーヒーにクリームをたっぷり注ぎ込み、砂糖を二杯も三杯も投入していた。豆の本来の味など、この男には何の意味も無いようだ。砂糖水みたいに甘くして、一口含む。

「断片的な情報から構築した、このコンピュータの中だけの”亡霊”よ」

仮想の”亡霊”を見た。東洋人らしい黒い髪、線の細さが伺えた。女というより、少女。まだほんの子供、といった様子だった。

「これが正解じゃないけど。けれど、もしこれが 電駆体 であるならば、特定の材料はあるわ」

「どのような」

李聖鬼は壁に寄りかかりながら、3D映像を見つめていた。椅子に座ることは殆どなく、立っていることの方が多い。武人としての本能か、いつでも動ける体勢を、気づけばつくっている。

「電駆体 は生体をシミュレートしたもの。こいつを造るには、ヒト由来の細胞が必要となるわ。遺伝子の塩基を、電灰上に展開すれば、自ずと本人と同じ容姿、背格好のグラフィックが出来る」

「つまりはクローン、というわけですね」

孔飛連は既に、二杯目のコーヒーに手を伸ばしていた。

イン・ビトロ

「生体外の試験管の中で臓器を再生するように、コンピュータで塩基を読み取って臓器を再現する。それを応用したのが 電駆体。ただ、クローンといっても本人そのものを具現化させるわけじゃないのですが」

「と、言っと」

「クローン人間も、環境によってその貌容を変化させる、とともに電駆体 もまたその貌容まで正確にトレースするわけじゃないです。飽くまでも、遺伝的特徴を共有するというだけでして」

孔飛連が言う事も、李聖鬼にはまるで及びもつかない世界だった。クローン、という言葉も馴染みがない。そもそも、クローンなどが造られることも、今の世は少ない。せいぜい食肉用として生産される、槽培養肉ぐらいのものだ。

「“亡霊”が、そういう細胞を用いた医療シミュレータなのか、あるいはプログラムが見せる幻なのか……いずれにせよ、ただのグラフィックにしては不可解よね。一体、開発者には何の意図があるのか」

李聖鬼はくしゃくしゃになった“金鷄”の箱を取り出した。古い日本の煙草——あの国に関して言えば、少なくとも煙草だけは評価してもいい、と思っている。啞えこんで火をつけて、燻る煙を吸い込む。

「発信元などは分らないのか」

「阿宮と、今探しているけどね。皆目、見当がつかないわ」

「その気になれば」

と孔飛連が口を挟んだ。

「青島中のコンピュータに侵入出来る——毛蘭とはそういう人間だと聞いていますが」

「それをやるのはあたしじゃなくて、この端末がね」

毛蘭、懷から掌大のDNAベースの生体端末を取り出した。小さなボデイの中で、三次元に配列された分子が毎秒六六〇兆回の計算を行う。ミクロサイズのナノチューブ燃料電池で稼動し、基本的に

所有者のチップを用いるのでバイオセンサも兼ねている。血流や脳内の分泌物を監視し、恒常性を保つ仕組み。

「けれど”亡霊”のような生体由来のグラフィックは、どこでも造られているからね。李聖鬼、あんたも利用しているでしょう。電

駆体」

「……覗き見とは趣味が悪い」

「あなたの部屋に、気配を感じたからね」

電灰は神経とリンクさせる。電駆体がどこかに降り立てば、その情報もリアルタイムで神経組織を刺激する。その信号がビット化されて、端末あるいは膚の下に導入された生体素子に報せる。この街のネットワークは、全て個人に帰結し、あるいはその個人がネットの総体を為しているもの。

「ただし、”亡霊”らしき気配はまるで感じられない。本当に、霞みを掴むようだわ」

「案外、本物の幽霊なのかもしれませんね」

孔飛連はカップを置いた。薄茶色の液体が、まだ半分ほど残っている。

「死者の霊が、彷徨っているのかも」

「馬鹿な事を」

李聖鬼は吐き捨てた。

「真面目にやれよ、孔飛連」

「案外真面目です。骸が蘇る、わたしの故郷ではよく聞く話です」

どこが真面目だと言ってやりたかった。からかつて、李聖鬼の反応を見、楽しんでいるようにも写る。言葉の端々に、そのような意図が見え隠れしている。

「あるいは」

毛蘭は端末の画像を消した。

「なにかしらの自律プログラムを持った、全く別の物かもしれない。自ら学習し、行動するというね」

「電駆体が、勝手に動くのか？」

「ニューラルネットワーク、あるいは遺伝的アルゴリズムというように、本来生物が持つ自己組織化のパラダイムを持っているからね。競争や改善のシミュレーションを繰り返し、そのプロセスの中で自然に解答を浮かび上がらせる……このDNAコンピュータも、生物のパラダイムを用いているわけだから」

李聖鬼は煙草を灰皿に押しつけた。「金鶏」の残り香が鼻をつく、煙が潰える。

「“亡霊”が、そういうパラダイム——自己組織化するのならば。学習する存在なら、進化という形容もあながち間違いじゃないかもね」

「グラフィックが進化だと」

「生物ベースのプログラム——ボトムアップによる自己学習を、そう形容するならば」

毛蘭は窓の外に目を移した。港湾を臨み、黒々とした企業の構造物群が連なるを眺めた。そこに、漢電子の本社がある。

「それで、どうするんだ」

と李聖鬼が訊くのへ、向き直り

「まず、正体を探る必要があるわね」

毛蘭は端末を繰り、再びグラフィックを浮かび上がらせた。今度は青島の全体図が、格子線で構築された。

「漢電子の本社に侵入する可能性が高い、とにかく”亡霊”を暴く。そのためのシステムを、本社に仕掛ける」

「わたしたちは、何をすれば」

孔飛連が言うと、毛蘭は二人に、黒い箱を差し出した。手のひらにすっぽり納まる立方体——銀色に縁取られ、それが唯一の装飾アクセサリであるかのように存在を主張していた。それ以外は、何の変哲もない箱であった。

双方、受け取り蓋を開けた。

箱は二重構造となっている。開けるとさらに透明なケースが納まっていた。ケースの中にあっただのは、コンタクトレンズだった。柔

らかい有機素材のレンズが、透明な液に浸っている。

「映写ナノマシンを導入した、視覚デバイスよ」

毛蘭が言う。視覚デバイスは、総じて小型の監視カメラに喩えられる。指の先ほどの小さなレンズが、一つのカメラとなっている。スマートダスト賢い塵などと呼ばれる自律型ナノボット——微小な分子機械が像を捉え、映像は数里離れた端末に送信される。構造自体はシンプルなものだ。

「電灰上のグラフィックに、ある一定の信号を送り込む。DNAの配列を特定するわ」

李聖鬼はコンタクトケースを照明に翳した。小さなレンズに、数千億の分子がひしめいている——不合理なほど変化の少ないプラスチック面に。

「そのレンズは電灰の、電駆体の構成分子を解析するようになっている。パルスを送り込み、塩基情報を走査するものよ」

「これって、違法じゃありませんか？ 何年か前国連で」

孔飛連はじつとレンズを見つめていた。

「北京が国際法を遵守などするか。まして、存在しない組織など」

李聖鬼はレンズを眼球に被せ、二、三度瞬きをした。

「着けないのか」

孔飛連が箱を仕舞うのに、李聖鬼が訊いた。

「わたしは後で。目に異物を入れる、というのはどうも……それより、温大人は」

「もう渡したよ」

と毛蘭は言っ、

「あなたと同じこと言っただけだね、何なんだか」

「一度、目潰しかけたから神経質になっているんだろう。でかい図体で、小さい男だ」

環境負荷物質を浴びた目には、非侵襲のサイバーウェアでさえ脅威なのかもしれない。

「あなた達が見ている映像は、現実と電灰にリンクした虚像、その

両方が送信されるからね。変なもの、見るんじゃないわよ。見てはいけないもの、とかさ」

何やら、意味深なことを言う。李聖鬼は何気なく、窓の外を見た。港湾の環境建築型のビル群を捉え、それがそのまま毛蘭の端末に映し出された。灰色の空間、ナノマシンの残骸が風に煽られ斜めに走っている。

「温道龍には伝えたのか」

「一応、ね。ま、あの人が策を巡らせることを考えるわけがないけど。あたしが報せれば、根こそぎ全てを持っていくような人だから骨も残さないし」

「違ういな」

”金鷄”の空箱を、握りつぶした。

夕刻になり、砲金灰色の空間が群青に染められた。黒く沈黙を貫く城砦は、さらに深い闇へ呑み込まれ、対比して港湾部の企業ビルにLEDの照明が灯り始める。

レーザーの閃光が切裂き、空中に像を結んだ。広告めいた文句を描き、映像を映し出す。紫のホログラムが幾何学の模様を象り、立体を生み出した。浮遊する宝石——オクロック青い光が橙を帯び、虚像が変化した。空に描かれるアナログの文字盤——短針と長針が、零を指した。港湾と城砦、実と虚の境。同時展開する、光明と陰が生み出す、非線形の昴星——毒々しい光芸術たちの面影がある。

華美なる街——犠牲に成り立つ繁栄、青島——飛行する紫水晶の玩具、遠大に広がりを見せるネオン帯。見せかけの栄華が点在していた。

城砦の狭間から眺めた。同じ都市であっても、市北や他の地区とはまるつきり別の世界に感じられた。急速に発展したナノバイオ企業の多くは港湾に集中し、旧時代の象徴的な構造物並ぶ市内は開発もされずに放置され、今に至る。

李聖鬼がこの街に来たときも、同じく無秩序なスラム——土の壁

ばかりの構造物から港灣を臨んだ。その時も、中央のビル群はどこか霞んで見えた。五年経つが、それは今でも変わらない。

通りから裏路地に抜けると、遊技場からアーケードゲームの電子音が聞こえた。白色の騒音、子供達が戦車ゲームに興じている。電子結線で脳神経と接続し、思考とリンクさせるインターフェイス型のゲームが主流となっている。合成音に混じって、子供達がはしゃぐ声——中国語と英語に混じって、日本語が少しばかり聞き取れた。李聖鬼の故郷の言葉はどこにもなく、それがこの街では自然なことなのだ。青島に朝鮮からの入植者は少なく、それも半島の紛争以来、急激に数を減らしている。

李聖鬼はやがて、目的の建物に至った。木戸を押す。かたり、と戸が鳴った。

建物に入ると、暗がりを迎えた。埃っぽい空気が口腔を満たし、饅えたにおいが鼻を刺激する。戸を閉めると、完全に闇が支配した。

「いるのか、黄昌日」
ファン・チャニル

そう、朝鮮語で呼びかけた。奥の暗がりでのっそりと巨体が立ち上がり、よろよろと歩み電灯を点けた。ぼうつと淡い、橙の光の下に晒される。

「李聖鬼か」

しわがれた声を発した。皺の刻まれた瞼の奥より、じつと刺すような視線で見据えてくる。黄昌日は李聖鬼の姿を認めると、椅子を引き寄せて座った。

「相変わらず暗がりについでいるのだな」

「特に動き回ることもないからな。ここにいれば、噂だけは入ってくる。」

黄昌日——この街の情報屋といった位置づけだ。情報など、電灰を通じていくらでも入ってくるが、この男のもたらす情報とは、ある一定の分野において突出していた。

黒社会、という存在。青島のみならず、この国の闇が黄昌日の下に集まるようになっていく。独自のネットワークを持っている、と

いうことだ。ただし、この大男が最初から情報屋などをやっていたとは、李聖鬼は露ほども思っていない。それは、黄昌日自身が纏う雰囲気から、そう思った。空気が塊を成しているかのような圧力を全身から放ち、それでいて拳動は酷く柔らかい。戦場そのものを引き連れているような佇まいが、かつては李聖鬼と生業を同じくしていたであろうことを、予感させる。さらに言うならば、黄昌日の両腕は人工操作手。旧式の、戦闘用アームの特徴を帯びている。突き出した指先は先端が刃めいて鋭く、稼動部は擦れて銀色の地金が覗いていた。どれほど油を差したのか分からないが、全体に黒ずんでいるにも関わらず。左手には電気銃、右手にも何か武器を仕込んであるようだ。ただ、それが何なのかは分からない。

「今月の分だ」

李聖鬼は古い紙幣を五枚差し出すのへ、黄昌日は黙って緑色のプラスチックケースを取り出した。ケースを開けると、ピンクがかった錠剤が手のひらに転がり出てくる。口の中に放り込んだ。噛み砕き、細かくなった粒子が唾液と溶け、じんわりと苦味が口腔に広がった。ゆっくりと嚥下すると、氷の塊が喉に引っかかるような感じがして、膚の下の神経が鎮静してゆく。

「まだフラッシュバックは続くのか」

李聖鬼は応じず、プラスチックの塊を懷に仕舞いこむ。

「蝙蝠病というのは、ずっと続くものなんだな。現代の病、ナノマシンによるサイバー化の弊害か……」

蝙蝠病。心身の乖離とアイデンティティ・クライシス——今の所、この病を完全に治療する方法は見つかっていない。カウンセリングを受けるか、あるいは向心剤で症状を抑えるしかない。だがこの手の薬を作るのに、この国の医療技術は追いついていなかった。従って、李聖鬼は日本から流れて来る錠剤を、黄昌日のネットワークを通じて仕入れている。

「煙草と薬剤だけは一級と言える。倭奴^{ウェノム}どもの国は」
皮肉っぽく言うと、黄昌日は肩を竦めた。

「貴様の日本嫌いも変わらないか」

「あんたは嫌いじゃないのか？」

「日本人に友を殺された。だが、日本人を友としたこともある。恨みごとを言う事で、何の解決にもならない」

黄昌日は水差しを傾けた。機械式な唸りが、鉄の義手から洩れた。赤紫の液体が注がれたグラスが、李聖鬼の方に差し出される。人工的に合成されたミネラル水、鉄分を含んだ赤い色。李聖鬼、グラスを取り、口に含んだ。錠剤の苦味を洗い流して、飲み下す。何の変哲もない水だが、少しだけ舌に痺れる感がある。

グラスを置いた。

「連中、大層慌てているようだ……」亡霊”について。騒ぎが大きくなる前に、北京が動くとは」

「もう掴んであるのか。相変わらず耳聡い」

「この仕事をやっていけばな、耳に入る」

黄昌日は煙草に火をつけた。銘柄は、李聖鬼のものと同じ銘柄――¥¥¥¥”金鷄”。元々は黄昌日が、好んで吸っていたものだ。

李聖鬼は自分の煙草を、専らこの男から買っている。

「北京が、どれほど”亡霊”を恐れているのか知らんが」

李聖鬼は黄昌日から煙草を一本、受け取った。チベットの建築様式を真似たような、凝った作りの椅子に腰掛けた。

「漢電子は、この国の通信の大部分を担っているからな。江南から流れる電子ドラッグ、通信システムがやられれば更に数を増す」

電子ドラッグは主に、ネットワークを通じて供給される。幻覚剤、多幸剤と同じ作用を与えるプログラム。江南や台湾から、流れることが多い。警察の取り締まりも及ばない深い所で取引されるので、北京はもつとも深い所まで潜ることが出来る組織を作った。

「貴様が押し入った連中も、その利権に集まるものだろう。ドラッグを売り捌いているのは、朝鮮系だったようだな」

ふと、朝鮮人の武人が、思い出された。同胞を殺すことに、何のためらいなど無かったはずだが、何故今想起されたのか。

「貴様の評判は良くないぞ、李聖鬼。同胞殺しを何よりも嫌う、連中は」

「珍しい事ではない。半島の混乱以来、ずっとそんな調子だ。感傷に浸る人間が生き残れるほど、この世界は甘くない」

「だが、貴様もその感傷に浸っているのではないか？」

黄昌日が言うのに、ふいに鼓動が高く鳴った。

「貴様が通い詰めている、あの有機ガイノイドのこと、調べたのは俺だ。忘れてはいまいな」

「今更、それを言うのか」

「だからどう、ということはない。ただあのガイノイドに固執するお前は、感傷に浸っていないというのか」

紺色の瞳が、見つめた。黄昌日はときおり、穏やかな目をする。事実を伝えるときはまた別な、李聖鬼という個人に語りかけるときに。

「いくら細胞を共にしていても、唯の機械に過ぎない。有機物が無機物かの違いしかない、そんなものに過去を重ねる貴様が、同胞を殺されたものを詰ることなど出来るのか」

責めるようではなく、しかし確実に李聖鬼の胸を抉る言葉だった。核心を突いた言葉が、これほど重いものなのかと思わせるほどに。事実を述べ、論理的に導かれた言葉だからこそ、余計に響く。

「セクサロイドなんてものは」

と黄昌日が言って

「顔の無い、肉体を抱くものだ。相手に人型を求め、鼓動と温もりを感じる。唯それだけで、情欲の捌け口とするだけのものだ。なのに、お前はそれ以上の物を求めようとしているように見える」

「どうしようと、俺の勝手だろう」

李聖鬼はまともに黄昌日の顔を見ず、揺らめく液面を眺めていた。ランプの光が反射して、迷光を放つ。

「所詮、機械。それを分かっているのだろう？」

「黙りなよ、黄昌日」

ぴしゃりと、言い放った。

「俺のやる事成す事、いちいち監視しているのか貴様。干涉するなよ、ここじゃ知りたがりは嫌われるものだ」

それより、と李聖鬼はドアの方を向く。ぴりぴりと、膚が刺激されるような殺気を感じていた。ここに入るころから、ずつとだ。

尾けられている、という感覚はあった。殺意が膨れ上がる様子も、如実に感じられる。向こうが手を出して来ないのはこの界限が青島の中でも、中立地帯にあることに起因しているだろう。李聖鬼がここを出たら、仕掛けてくるかもしれない。

「裏口から行きな」

黄昌日が指し示すのに、素直に従うことにする。無用な衝突は、避けたい。

「李聖鬼、抛り所は一つじゃない」

立ち去る李聖鬼に、黄昌日が言った。

「何にも頼らない、そういう生きかたもまた良し。だが、俺はそうやって生きた奴がどういう末路を辿ったかを見ている」

空虚なものに話しかけているようだった。相手からの反応などまるで期待しない、というように。独り言であればまだ、言い聞かせる対象は自分自身に帰結される。それすらも無い、ただ言葉を空間に棄て去るような、無気力な声。

「抛り所など、求めない」

自分でも、ぞつとするほど響く、低い声だった。それを聞いて黄昌日が、どんな顔をしたのか分からなかった。振り向くことなく、李聖鬼は木戸を引いて外に出た。

陸：鉄黒血漿

路地を抜け、通りに出た。まだ、着いてくる。足を速めた。どうやら敵は複数、だが乾いた街路を叩く靴は一人分。李聖鬼は足を止めた。

「そろそろ、姿を見せたらどうだ」

後方で、ナノマシンの残骸を踏みしめるときの、乾燥した音がした。かさり、と。その足音からさらに周囲、半径三メートル以内。複数人が、潜んでいる。

「俺に用があるんだろう」

少し首を傾けて、男の姿を見やる。濃い闇に溶けそうな黒いスーツを纏い、七歩先に佇んでいた。

細身である。一見すると、貧弱な体。しかし、スーツの下に発達した筋肉が息づくのを感じ取る。明らかにストリートの暗殺者の気配を帯びて、丸腰であるにもかかわらず尋常でない気を放っていた。「李聖鬼、貴様が殺した男のことを伝えに来た。貴様と郷里を同じくし、同じ血が通う男だ」

低い声。激高し、揺らぎそうな感情を、理性がどうにか抑えつけているような――弾け、いきり立つのを、堪えている。これだけ殺気を剥き出しにしても尚、対話を試みる――それが甘さだ、と李聖鬼は思う。

「どうして、殺した」

周囲から洩れる殺気。八方、棘が刺さる気分。銃口が向けられる気配がした。

「敵だからな」

それでも、撃たない。撃たない時点で、負けているのだ、彼らは。

「何故、同胞を討つ」

「仕事だろう、俺たち武人はそうやって生きているんだ。割り切れ

よ」

「同胞を殺してでも、生き残ると？」

問いかけというよりも、ただこの男は己の正当性を示したいだけのようにも見えた。間違っているのは自分、同胞を討つ李聖鬼自身と認めさせたいのだろうか——どのように答えたとしても理解は求めない。論理立たない、バグのようなもの。

「国を追われ、大陸に落延びてまでしがみつく。俺も貴様らも、同じようなもの。同胞などと、下らぬ感傷を引きずって——」

そこまでだった。誰かが発砲した。銃弾が李聖鬼の肩を掠め、鉛が肉を抉る。焦熱が神経を灼いた。

幾重もの発射炎——橙に映える炎、同心円状の華が、生み出された。街路に銃痕が突き立ち、コンクリートの破片と、ナノマシンの灰が舞い上がる。李聖鬼、跳躍——地面を転がり、牙狗を抜き、銃火の先に照準を合わせる。

引き金を絞り、銃身が跳ね上がった。鋼の弾丸が闇に吸い込まれ、数瞬遅れて悲鳴が響いた。確認することも無く、路地に隠れる。

目を凝らした。李聖鬼の眼は蛇の感覚細胞を備えている。赤外線を知り、映像として視覚する。武人として、人工的に与えられた異能。

息を潜める——熱源。最初の男を含め、周囲に七人、潜んでいる。牙狗の銃把を握り込み、銃身を軽く打ち鳴らした。合図。

右方に動きを知り、城砦の狭間、影が横切るのを、視界の端に捉える。降り向き、発砲した。相手もまた発砲、銃火が交わる。空間で衝突し、火花が爆ぜ、閃光が弾けた。鳳凰の銃把を握り、一歩踏み込み三連発撃った。灼熱のブリットが空を切り、男の喉を貫いた。ぱつと血の煙が昇る——骨潰す手応え。

続いて左に、白い影を捉えた。身を捻り、撃った。これは外す。長い黒髪を翻し、人影は遮蔽物へ隠れた。白い布切れを掠め、絹糸めいた繊維を散らす。

細かい銃声が、城砦の屋上から響いた。切り返し、左の銃で背後

に発砲する。横に走り、遮蔽物に身を隠した。左右の銃を、四方に差し向け感覚を頼りに駆逐し、それでも尚銃声は止む気配が無い。

間断なく続く銃火の雨——秩序だった弾痕を蛋白汚れの壁と六価クロムの浸みた路に刻み付けた。李聖鬼は遮蔽物から飛び出し、射線を避けつつ城砦の中に駆け込んだ。銃声は、止まない。

どれか一つでも、銃弾が届けば良い、と思った。並み居る朝鮮人の殺し屋たちの、誰かが李聖鬼を仕留めても良いと。

決して在り得ないとは、知っていた。自分が死を望んだとしても、身体はそれを避けたがる。神経組織を強化され、十メートル先にいる敵の挙動すら感覚する膚。金属原子を導入した、電気駆動の分子筋肉。疲労を忘れさせる、人工血球。レスピロサイトそして蛇の両眼。闘争と強制的な生存のためだけに造られた肉体、武人としての本能——ひたすらに生を求め、そのために敵を殲滅するために得られた身体。

何も思ふな——

内なる声を聞いた。黙れ、と恫喝する。今この身体を駆っているのは、紛れも無く自分なのだ。己の意思と裏腹に、誰かに動かされているのではない。

俺が、俺自身が決めることだ！

壁伝いに、建物の裏手に回りこんだ。狭い路地、道の幅は大人二人分ほどしかない。

跳躍した。左右の壁に、交互に足をかける。突き出た石、ひび割れ、でこぼことした面を足がかりにして、壁を駆け上がった。五階層ほど昇った後、さらに跳ぶ。

視界が開けた。灰色の壁が切れ、屋上に踊り出た。突撃銃を手にした殺し屋たちが三人、下界に向けて発砲している。

一人が李聖鬼の存在に気づいた。振り向いて、何事か叫んだ。残りの二人も降り向く。皆一様に、信じられないという表情。城砦の壁を駆け上がる者など——。

三人一斉に銃口を向ける。それより早く、李聖鬼が撃つ——走りながら引き金を引き絞り、両の銃が火を噴いた。銃弾は狙い通り、

男たちの額に吸い込まれてゆく。弾が頭皮を引き剥がし、頭蓋を削り後頭部へ抜け、有機ナノマシンの血漿を噴出させた。脳髄の白を溢れさせ、三人、崩れた。

銃火裂いた。二筋の射線。一つが足元に突き刺さり、コンクリを砕く。もう一つは耳元を掠めた。弾の唸りと衝撃波が、鼓膜を直に震わせた。隣の建物から、二人がロシア製の騎兵銃を撃ってくる。李聖鬼は身を低く保ち、走り、間を潰した。ビルからビルへ飛び、構えた。

射撃——銃弾が手前の男の眼球を抉る。刃の弾は脳髄に至り、後頭部に抜けた。

射撃——胴体を貫き、脂肪の層を突き抜け、引き裂いた。先端が膚にめりこみ、骨と肉とを分離させ、引き剥がす。生体素子集積体バイオチップクラスタの人工臓器——金属を含んだ腸が、生物特有のぬめりを帯びて照り映える。破け、飛び散った。

頽れる瞬間、殺し屋の男と目が合った。恨みをこめた視線、直ぐに光を失う。動力の切れた人型機械のように、呆気なく斃れた。

硝煙の中に、一人佇んでいた。

ビルの縁に、男が立っているのを認める。構える事無く、弛緩した体勢であった。

「そいつが鋼刃弾というものか」

男が呻く。その名の通り、弾頭は鋼でできている。弾頭に植え付けられた、金剛石の微小刃。体を貫くとき、内臓をずたずたに引き裂く。

弾頭にはナノスケールの毒囊。アンチナノボットの集積体が詰め込まれている。体内のナノマシンを破壊し、ドラッグデリバリーやレスピロサイト人工血球による傷口の修復を遅くするという代物だ。傷を受けた瞬間から、マシンの自己組織化を停止させる——細胞破壊、出血、死に至らしめる。「人は銃弾で死ぬ」という、至極当たり前な事実を体現した兵器。

「だが銃自体はそれほどではない。貴様の身体能力が、奴らのそれ

を凌駕しているというわけだ」

「お前も、喰われないか」

「ぬかせ」

男が斜に構えた。右半身を取り、両腕を前に突き出す。徒手空拳で対峙——体術の構え。

両者、同時に仕掛けた。男が前に飛び込むのに合わせ、李聖鬼は二度、発砲した。照準は脳髄、水月。確実に急所を狙う。

男の姿が、視界から消えた。

上を見る。銃弾が届くより先に、男は跳躍していた。

脚が空を薙いだ。右手に衝撃を得、銃が弾き飛ばされる。男が着地すると同時に左の銃を向けた。

貫手——男が攻撃を加える。空気を裂く、衝撃が耳元で起こった。こめかみに鋭い痛みを感じる。異質な切創が刻まれる。

後退、間合いを切った。

目にしたのは、金属だった。レーザーグローブを突き破り、男の指から、鋭角な”爪”が生えていた。珪素^{シリコン}の磨かれた白銀に輝く。

「移植爪か」

血を舐めた。男は爪を擦り合わせるに、きりきりと不快な音を立てる。五指を窄める^{すぼ}、嘴^{くちばし}を思わせた。

男が間合いを詰めた。一足飛びで。束ねた指を突き出す、李聖鬼の喉に伸びた。指先は鎌の軌道を描き、肉を削らんと唸りを上げた。右手で捌き、李聖鬼は左の銃を発砲した。男は首をわずかに傾け、火線から逃れた。

男の脚が、水平に振り抜かれる。中段蹴り、右の脛が腹を穿った。胃がせり上がり、体を折る。男が更に打ち下ろし、鉄爪が眼前に迫った。身を逸らしてやり過ぎすに、左の爪が伸びた。李聖鬼は後退するが、避け切れず、脇腹に刃を受けた。

牙狗の三連発。男は避けることなく、逆に身を寄せ懐に入り込んだ。銃の間合いを潰し、右の鉄爪も突き出す。

李聖鬼の膝蹴りが阻んだ。男の水月を突き上げるように、左膝を

叩きつける。内蔵が潰れた感触を得るに、男が呻いて体を折った。そこへ、後ろ廻し蹴り。男の顎を蹴り上げた。

男が喚き、爪を振りまわした。後方に捌き、一発撃った。

ガキン。音がした。ハンマーが引き戻り、弾切れを伝える。

男の指先が開かれた。虎爪——指を開いた手の形。振り上げ、斜めより引つ掻いた。

刃が首筋を裂いた。頸動脈まで、皮一枚。わずかに、逸れる。男の手が流れるのへ、李聖鬼が蹴り込む、中段。男の体勢が崩れたところへ、さらに前蹴りで顔面を蹴り上げた。それと同時に牙狗に新たな弾倉を番えた。

薬室に銃弾が送られる、手応え。狙いをつけ、二発、撃った。鋼の銃弾が男の胸に突き刺さり、背中側に抜けた。左右の肺を貫かれ、男は仰向けに斃れた。地に伏した男を見下ろす格好で、李聖鬼は銃口をつけた。

「貴様も武人か」

男は何かを言いたげに口を動かすが、喋る事が出来ない。空気の洩れる音が、口元からこぼれた。

「そうやって、刹那の命しか与えられない俺たちが同胞などと、滑稽だろう」

同意を求める口調。それが、自分への諦観を物語るものであることも知っている。

「貴様が殺した男は……」

男が唸り声を上げた。低く、地の底から湧き上がるような、怨念の籠った声。

「俺の弟、だった……」

仇——憎悪の目を向ける。

「貴様につ、貴様になどっ」

最後、男が声を張り上げる。そして発砲。頭蓋を、撃ち抜いた。男の体が跳ね上がり、そして動かなくなった。

死体を見下ろした。果てしない虚無が拡がる気分。銃を納めた。

脇腹が、疼く。人工血球の導き。レスピロサイト ナノマシンが傷口を修復しているときの、電気で痺れたような感触が駆けた。

どれほど手を尽くしても——この身体は傷つくことはあっても、死に至らしめるほどの傷を負わせる事は少ない。脳髄を破壊するか、あるいは鋼刃弾、特殊弾頭を用いる他は。

傷口から流れる血が、止まった。既に過去となった男の死体に背を向ける。

電灰が告げる。ミクロのスクリーン、デジタル表示。深夜二時を示している。

漆：暗灰港灣

都市を南に下る。黒灰色の街並み。前時代の鉄骨で組まれた、電波受信の尖塔が切り立つ。錆びついた骨格と廃墟の群。スモッグの霧の中にひっそりと、朽ちる残骸が滲む。違法建築、多層型のスラム。化学兵器で溶けた壁。その合間を、毛蘭を乗せた車は走っていた。日本製の燃料電池式自動車、液化ガスで電気を生み出し、且つガスの燃焼で駆動する。電気とLPガスのハイブリット。

アクセルを踏み込んだ。

ライトの光芒がナイフの刃を連想させた。靄の中。ブラウン運動の浮遊する粒子に似て、光の当たる灰だけが際立つ、直線の軌跡。

「大分、降ってきましたね」

助手席の阿宮が言った。この青年は近年珍しく、サイバー化を全く施さない生身である。網膜に電灰の像を結びつけることも無いため、灰が降る時間帯も予測できない。

人通りはまばらだった。道端で阿片の煙管を吸う老人と、子供の姿が確認できる程度。閑散とした街並み、それでも北宋中華では上級都市に指定されている。

「どこも同じようなものね」

白い衣を纏った女の子が、表通りから裏路地に駆けて行くのを横目に、ひとりごちた。

「毛蘭さん、以前は煙台にいたんでしたっけ」

阿宮が訊いた。アメリカ勢の携帯端末に打ち込み、これから向かう先と連絡を取っている。サイバー化を施さない者は、五年前まで主流だった小型通信機を用いることが多い。

「煙台にいたのは十年前、その前は威海。山東半島から出た事は、ないね。ここ二十年は」

「しかし、かつては北京政府の、サイバーチームにいたと聞きました。が。どうして、こんな仕事を？」

「こんな仕事、ってあんたねえ」

日本人の阿宮にしてみれば、そんな意識なのだろう。汚れ仕事は武人、あるいは異民族のやる事と、この国ではそうなっている。漢人にとって有益でも、それ以外の民族が国家の恩恵にあずかることは少ない。

「あなただつたら、中央の軍でもやっていけたでしょうに。何故、ここに留まっているのですか」

殆ど問い詰めるような口調だった。

「別にいいだろう、そんなのあたしの勝手だ」

不愉快さに眉をひそめると、いつの間にか車外の光景が変わっているのに気づいた。城砦の灰色から、鉄黒の多層型建築物が目立つようになる。港湾に近づいている証だ。

靄が切れた。

岸壁めいたビル。沿岸部の企業の構造物が、見下ろしていた。ナノバイオ、あるいは外資系の企業ビルは、刃の鋭さを以て聳えていた。平面のパネル群、ツインタワーと科学プラントのモスク——城砦ばかりの青島の街並みからは抜きん出ていた。湾を背にして、圧倒的な質量を誇る。

車は港湾へと滑りこんだ。AIが示す、道筋をたどる。城砦間の荒れた道とは違う。整然としたアスファルトの道沿いに、流線型のLEDの照明塔が等間隔で備え付けられる。

都市の二面性。生産機能を港湾の一部分に残し、富裕層は郊外に逃げ、後に残ったのは城砦化した構造物群。古きものと新しきが並立する街の性格は、今に始まったことではない。

車が停まった。AIが、目的地に着いたことを告げる。

「行くよ」

毛蘭が声をかける。

アイコロシ

漢電子の本社——環境建築としては大型の部類に入る建築物。異彩を放つ尖塔——電波塔。天空を貫く槍の先端、電灰網を統べる、青島のランドマークと言えた。正面の壁面に、悪趣味な鳳のロゴ——

―時間ごとに色が変わる。カオス理論を体現したように、斑な模様社内へ。吹き抜けになったロビーで待つ。目の前に噴水、虹色の光を帯びていた。

やがて、黒いスーツの女が歩いてきた。

「あんたかい、依頼したのは」

毛蘭が言うのに、女は微笑みかけた。二十代に見えたが、せいぜい三十代だろうと推測した。実年齢は首の皺に現れる。そればかりは、ホルモン治療でも遺伝子療法でも、消すことは出来ない。

「月慈^{ユエジ}と申します」

女は握手を求めてきた。きれいな、手をしている。まるで苦労を知らない、どこか人工物みたいな感じがする。

「それで、どこに行けばいい？」

毛蘭にその気がない、とわかれると月慈は手を引つ込めた。特に気分を害したようでもなく、微笑を絶やさない。

「創始者は留守？ 自分で呼び出しておいて、代理の者寄越すなんてね」

「実務的なことは、わたしが統括しております故」

毛蘭の物言いに、月慈の顔が少しばかりひきつった。それでも笑みを崩さない辺り、大企業の幹部というものの見本ですらある。感情を表に出さない、機械的でかつドライなコミュニケーション。通信機器のやりとりのような対人関係が理想とされる。

「それで、メインコンピュータは」

月慈は、二人を先導すべく先頭に立った。

螺旋状にもつれ合う巨大なオブジェを過ぎ去って、月慈はエレベーターに二人を導いた。乗り込むと、月慈は地下への階数表示を押した。電磁誘導式の昇降機特有の制動音が響き、落下する感覚を得た。「地下にあるのですか」

阿宮が訊くと、月慈はにっこりと微笑みかけた。毛蘭に対するものよりも、幾分表情は和らいでいる。

「ここが核で攻撃されても耐えられるよう、シエルター内で運用し

ていますので」

核攻撃など、殆どあり得ない話だった。国家間の戦争で、核兵器など用いようものならたちまち国際世論の非難に晒される。使えない兵器の代表格——半世紀前とは違う。だからこそ、内乱で主流だったのは生物、化学兵器だった。中原を汚染し、今も蝕むもの。地下十二階に着いた。

隔壁の前に、月慈は立った。

手をかざす。重そうな隔壁が開いた。コンピュータがお目見えする、かと思いきやそこにはもう一つ、小さな小部屋があった。

「何、これ」

毛蘭が訊くに、

「一応、セキュリティ上の問題で、身体検査を受けていただきます。そこに立っていただければ、AIが自動識別いたします」

「随分とまた」

慎重だ、と思った。臆病なほど。当然のこと、と言えば当然。臆病なものほど、身を守るものだ。

最初に阿宮が立った。レーザー光が四方から照射され、スキャンング。二十秒経ったところで、ブザーが鳴った。

「失礼」

月慈が阿宮の胸ポケットをまさぐった。手つきが、慣れている。取り出された物体——万年筆。随分と、古びている。持ち手の金具部分が反応したようだ。

「これはお預かりします」

「いいですけど、万年筆ですよ。そんなに用心深くしなくても」

「用心深いことに、越したことはありません。最近も」

と月慈は、ちらりと毛蘭の方を見た。

「在留の南人が、いつ間者を送り込むかわかりませんから」

どこことなく冷ややかな目線である。相手をしては無駄、と毛蘭は知らぬ顔をした。

二人して検査をうけて、ようやく通された。隔壁の一部に、月慈

が手をかざす。と、壁が駆動音を立て、開いた。

だだっ広い空間が広がった。簡素なパネル、強化プラスチックの壁面をした室内——中央に、棺桶を縦にしたような黒い箱が七台、備えつけられている。すぐに、メインコンピュータであるとわかった。

中へ足を踏み入れた。

電灰網の全システムを統括するというコンピュータは、意外なほど小さかった。広い空間に、黒い箱が七台。人の背丈よりは幾分高く、それでも仰々しさは感じられない。棺桶を並べたような、異様な光景。

「ここが、メインです」

黒い箱——おそらくはDNA演算機。指さして月慈が言った。

「七つのインテリジェントマシンによって運用されています。日に四度、自らを認識するプログラムによってシステムの改善を図り、システムを変化させています」

「プログラムは随時更新されているということね。電灰にバグが介入することは、あり得ないわけだ。理論的には」

しかし、侵入された。”亡霊”に。

官庁や、企業の防壁は遺伝的アルゴリズム——生命の自己組織化を模倣した自律プログラムで成る。巨大な樹形図に例えられる、ボトムアップ型の思考回路、生体を模した人工知能。過去の経験、また新たにインプットされた情報を元に、ロジックを組み立て、学習する——人が解答を直接打ち込むのではなく、競争や改善のシミュレーションを繰り返し返して自ら解答を浮かび上がらせるものだ。人間の思考回路に酷似した試行。

一度、何らかの意志が侵入しようとも、防衛のためのパラダイムを組み込む。そして同じ論理式を組み立てることはない。

「電灰は、三十重の防壁によって守られています。最初に侵入した”亡霊”は最初の段階で食い潰されました。けれど、二度目に侵入した時は、第一の防壁を破って侵入しました。三度目には、更に奥

深くに入り込んで」

「侵入した”亡霊”は？」

「いずれも深部の最終防壁で食い止めました。再度の侵入に備え、現在”亡霊”を構成するプログラムを解析しています」

「しかし、実際に潜られているということは、あっちも何か、生物的なプログラムを組んでいるかもしれないわね」

「この防壁を破るほどのことは……」

「時代は進化しているんだよ、お嬢ちゃん」

月慈の目が、一瞬敵を増した。瞳の奥に火が灯ったような、剣呑な空気が滲む。ひどく侮辱を受けたというように、人形のように澄ました顔が強張った。

「……あなた方に依頼したいのは、ここのシステムに侵入する前に、自滅させることです」

何とか激情を抑えたらしく、月慈が静かに言った。それでも、声が震えていたが。毛蘭は気にせず、端末を操作した。レーザー光が放たれて、空中に像を浮かべた。”亡霊”の、3D映像だった。

「”亡霊”を構成すると思われる、DNAコードを特定出来れば不可能じゃないけど……いつ、どのタイミングで”亡霊”が現れるか見当もつかないから。うちの人間に、探索させてはいるけど」

「あなたの組織の、武人ですか？ 先日も、抗争がありましたね」
何か引つかかる言い方だ。毛蘭は顔を上げた。

「何よ、それ」

「わたくしどもは、あなたの腕を見込んで依頼をしたのですが、よりによって武人を使うというのですか」

「悪い？ この街に一番詳しいのは彼らよ。第一、”亡霊”の背後にある連中を潰せっていうのが、北京からの指令だし」

「そうなのですか。わたしには分かりかねますけどね、荒事に関しては」

まるで自分たちは汚れていない、とでも言いたげな口調だった。生っ白い手をしたエンジニアには、一生分からないと思われた。

「あなたのところの……双銃使い。彼も搜索に？」

「だったら何だったの？」

我知らず、声に棘を含んでいた。おそらく目つきも相当悪くなっているのだろうと思われた。隣で阿宮が狼狽している。

「昨日も、市北で衝突した、と聞きました。他の武人たちと？」

「李聖鬼のこと？ そりゃ、売られた喧嘩は看過できないだろう。」

あんな、あいつのことを何一つ知らないのに、憶測で物を語るの？
「そういうことはありません。わたしは、あくまで可能性の問題として指摘しているのです。問題のある人物を、関与らせることで新たな問題を誘発する可能性も否めないでしょう」

「言つとくけど」

毛蘭は端末の映像を消した。

「あたし達、別に依頼を受けなくてもいいんだ。ただ、あんなたちの手に余るといふから派遣された。これがあたしらのやり方だ、文句は挟ませないよ。それに、あんなだって組織を敵に回したくないだろう」

組織が、北京の意志で動いているということは、誰も知らない。表向きは民間の警備会社ということになっている。ただ街の人間は、組織の背後に何かしらの大きな力を見ていた。武人を多く抱えているため、闇の社会とつながっているとされている。半分虚妄であり、大半は真実である。

「長生きしたいでしょう、ご立派なチップ備えているんだから。余計なことしなきゃ、あと一世紀は保つ命だし」

脅迫というわけでも無い。ただ、起こりうる未来を匂わせる。それだけで、大抵の人間は黙るのだ。月慈も、言葉を返せないように見えた。

「あいつのこと、悪くいうなよ。所詮、箱入りのエンジニアには分からないものだよ。お嬢ちゃん」

淡々とした声で言う。恫喝は意味がないものだ。少なくとも、ここで生きてゆくには。

今日のところは状況説明だけで終わった。後日、漢電子の開発部隊とともにシステムの構築を行う約束をし、この日は社を後にした。「びつくりしました」

車に乗り込みながら、阿宮が言った。

「何が？」

「あんな風に挑発するなんて、こっちは依頼される立場なのに」

「あんなもんよ。あんたも、そろそろこの街に馴染んだ方が良い」

事なかれ主義なのは民族性なのか分からないが、阿宮は少しばかりおとなしすぎる、とも思えた。

「それに、挑発じゃなくてうちに対する明らかな侮辱。ナメられてまで下手に出ることはないわよ」

「というより、毛蘭さん。うちに対するといふより、李さんに対する、ではないですか？ だから噛みついたんでしょう？」

「そう見えた？ ならそうかもね」

車はメインストリートをはずれ、港湾から徐々に遠ざかってゆく。見慣れた城砦の群が、前方に霞んでいた。

「毛蘭さん、李さんのことをどう思っているのですか？」

いきなり、阿宮が訊いてきた。

「何よ、出し抜けに」

「さっき、李さんのこと言われたとき、ずいぶんとムキになっていたじゃないですか。やっぱり、特別な感情があるのですか」

「あんたって、もう少しこう、デリカシーってもんはないのかねえ」「そうですか？」

まったく悪びれる様子もない。息を、漏らした。

「それで、本当のところどうなのですか？」

「どうもないよ。あんたが何を勘違いしているかわからないけど、あいつはそういうんじゃない」

スーツ姿の男を乗せた、車とすれ違った。自動操縦の全自動車、漢電子の社員だろうと知れた。助手席には、アンドロイドの護衛が納まる。社員たちの皮下にはすべからず、磁性バクテリアの微細回

キック

路を導入している。二等以下の市民にとってすれば、生体素子の類は口に糊をするよりもずっと確実な収入になるものだ。襲われることも珍しくない。彼らの「筋肉」として選ばれるもの——有機性の戦闘用アンドロイドが主流となっている。

「でも、特別気にかけているように、見えますが」

「一番、つきあいが長いのは確かね。あんたや温道龍、孔飛連よりもね。朝鮮の紛争があつてから、この街に流れてきたときからのつきあいだし」

五年になる、と思い出していた。組織から「供給」された、鉄火場専門の相棒であり、そのとき初めて組織の方針を知った。移民と、それに準ずる下等市民。武人たちの中でも、特に下の人間を使いたがる。それはいつでも切り離せる、ということでもあった。政府は未だに、軍閥のつもりでいる。

「あんたはどうなんだよ、阿宮。李聖鬼とうまくいつてないみたいだけど」

「僕は別に構いませんよ。嫌われているのだとしても、宿命だと思つています」

阿宮は、ぽつりと言った。それ以上は立ち入れない雰囲気、しみ出していた。

「苦労するよ、敵が多いと」

車を走らせる。前方に、城砦の群があつた。

捌：濃緑墨城

死体が転がっていた。

噎せ返るような鉄のにおいとともに、李聖鬼はいた。

華奢な裸身——胸が血で染まっていた。土に汚れたか細い手が、天を掴んだまま硬直していた。見開かれた目は怯えを表し、表情は強張っている。少女の骸、その幼い相貌。白い膚と黒髪の対比が、にわかに際だって見えた。

翡翠色——少女の左目。見つめてくる。ふいに、一つの名が脳裏で爆ぜた。

朴水晶。故郷に置き去りにした、名。フラッシュバックの奔流が蝕む。焦がす炎、鈍い刃、華人たちが乗り回す、奇妙な形の戦車——瞼に焼きつく。蝙蝠病、いつものことだ、与李聖鬼は錠剤を飲み下した。

ビジョンが消えた。目の前にあるのは、電灰の見せるバーチャルでも、過去の記憶でもない。現実の——ウイグル人の少年の骸があった。今、自分がしていること——なけなしの賃金、殺しの依頼、仕事——過去ではない今。

「このところ、多いですね」

孔飛連は血にまみれた刃を拭った。黒色の、粘性の血が零れ落ち、地面を濡らした。孔飛連の武器——高振動の剣。超音波振動で分子を切り開き、臓器を貫く。対武人用の白兵武器——最も古典的な型の。

李聖鬼は死体をのぞき込んだ。あどけない顔を、している。年の頃は十六、七といったところだろうか。苦痛に悶えたようでもなく、むしろその目は見開かれ、驚愕しているような表情だった。抵抗する間もなく、突き殺されている。

「ほかの連中は？」

「始末しましたよ」

孔飛連は全く表情を変えず、後ろを指さした。全員、喉を一突きにされていた。レスピロサイト人工血球特有の、鉛と鉄の焼けたにおいが漂った。

報せを受けたのは一時間前のことだ。北京から、掃討しろとの命令がくだされ、彼らの拠点を強襲した。その際、李聖鬼は脚に弾を受けた。毒囊を仕込んだ弾頭、神経薬を打ち込まれた。

「あなたらしくもないですね。傷を受けたからといって、それで止まるような人ではないはずだ」

孔飛連は呆れとも困惑ともつかないことを言った。ため息をついて。血を完全に拭くと、剣を納めた。鞘の装飾、金箔で象った天馬が、黒塗りの地金に駆けている。

「もつとも、問題なのはこれでしょうか」

孔飛連は少年が持っていた銃をひつつかみ、弾倉を抜き取った。銀色の無薬莖弾。

「チベットや、辺境の民族の動きが活発になっていくようです。南人の組織だけでも、厄介なのに。この上、ウイグルからも武装勢力が流れてしかもこんな物まで装備されるようになるのでは」

孔飛連は小さく息を洩らして、神経薬の銃弾を摘み上げた。

”亡霊”の探索と平行しての任務——北京から下される指令は、主に周辺国の武装組織を叩く。そのための武人であるわけで、”亡霊”にばかり気を取られてはいられない。

「民族の小競り合いなど、昔からのことだろう」

感覚を失った脚——鉛のようになっていく。引きずり、立ち上がった。

「台湾、ロシア、周辺にきな臭い国は山とある。そこから武器が流れていてもおかしくない」

鋼刃弾だけでなく、対武人の兵器は常日頃生み出されている。人々がナノバイオの恩恵を受ける度ごとに。

「それで、温大人」

孔飛連が振り返った。壁に亀裂が走り、砕ける。温道龍の巨体が、割れた壁から現れた。硬化した拳。遺伝子導入とドラッグデリバリー

ーによって作られた、生体組織の鈍器。馬鹿でかい筋肉にチタンの骨、血管が浮き出ている。

「他愛もない」

続いて温道龍は、およそ道徳的とは言えない民族差別的な罵声を浴びせ、死体を蹴飛ばした。温道龍の背後には、顔をつぶされたウイグル人たちが転がっていた。

「こんな奴らに手こずってちゃあ、所詮、蛮族同士が」

蛮族、と聞いて孔飛連の顔が心なしこわばった。李聖鬼はそこについて、なにかしらの言及もする気はなかった。きびすを返す。大分毒は引いた。痺れがまだ、残ってはいるが。

やおら、温道龍が肩をつかんだ

「すかした顔してんな、おい」

出鱈目な握力だ。李聖鬼の、金属導入した骨まで握りつぶせそうなほどの。骨が軋んでいた。

「温大人、今は」

孔飛連が宥める。調停者、仲介人——チームが機能するために、彼が演じる立場。対立するもの同士、うまく衝突させずに立ち回ること。それが、孔飛連の役割。

「どきな、孔飛連。こいつには一度、言っておかなきゃならねえ」

「わたしから言っておきますから、それより」

と、前置き。

「警察が来ました」

すぐさま、温道龍が反応した「何だつて？」

「武装警察が、あと三百秒もすればここに踏み込んできます」

唐突に、李聖鬼は解放された。窓の外を見た。

墨緑に染め抜かれた制服が、城砦を固めていた。無関心の中に最大限の殺意を灯した、突撃員達の目。クローム仕立ての軍刀を提げていた。鉞刃のような重厚な直刀。北宋中華の、五星の徽章が胸に輝いていた。

孔飛連が見据えてくる。選択を迫るように。選ぶまでも無い、組

織の存在が秘匿されている以上、とるべき道は一つしかない。

李聖鬼、銃を収めて右側へ。

温道龍、忌々しげに拳を引っ込めて左へ。最後に吐き捨てる。

孔飛連、開いた穴から窓の外へ。溜息が聞こえた。最近、多い。

回廊に出ると、靴音が複数昇ってくるのが聞こえた。突き出た遮蔽物、柱の陰に身を潜める。武装警察が件の部屋に踏み入った。

警官たちが現場を保存——テロリストに人権は無い——ウイグル人の死体を面白半分に、蹴り飛ばし、踏みつけて、笑っている。この国の病巣、権力を使いたがる欲求。軍刀がワームで満たされた脳髓を切り開く前に、城砦を出た。

コンクリートの空間が、圧迫する。入り組んだ通路、天空に掛かる鉄線。電波塔の骨組みが、城砦の屋上から突き出で、空を侵食している。天蓋を遮るが如く——亡者の手をイメージした。

温道龍は追ってくるだろうか——そんな懸念が頭をよぎる。気に入らなければ排除して、それが当然の権利と思っている男だ。だからどうということはない、そんなことを気にしている自分が酷く滑稽に見えた。

何も思っな——

呪文、幻覚、フラッシュバックが脳髓を浸す。蝙蝠病、心身の乖離——身体の物質化がもたらした精神の病。肉体を完全に統制するとともに、心の暴走を許してしまう。武人、サイバー化した者が陥り易い、アイデンティティ・クライシス。危うい硝子の器のようなものだ、壊れないように包み込む。均衡を保ちながら、どうにか生きている——この街の者は皆、多かれ少なかれ危ういバランスの中で生きている。

「上手く撒きましたか」

孔飛連が背後にいた。何の気配も感じさせない。この男はいつもそう——存在ごと消せるかのよう。

「このところ、武装警察の動きが活発ですね。我々への要請が増えるごとに、彼らと遭遇することも多くなりました。他の都市でも同

様に、警察が動きはじめています。特に国境で」

国境警備——南から流れる電子ドラッグの、防波堤。暴動を鎮圧すると共に、鬱憤晴らしの虐待を繰り返す。

「他の都市で、警察に遭遇する仲間も増えてきたようです。彼らの中にも、我々の存在に気づきはじめた者もいることでしょうね」

「気づいたところでどうなる。武人狩りに、政府が武人を使っている。そのことが秘匿されている以上、そんな者は粛清される筈」

「夷狄ですからね。わたしもあなたも」

柔らかな物腰、からかいを含んだ物言いを——いずれにしろ全く悪びれない様子で、孔飛連が言った。

灰が、目の前をよぎった。構造物に切り取られた曇天が、俄かに群青を帯びはじめ。港湾からのレーザー光。一筋、切り裂いた。

「日が暮れる、ようですね」

孔飛連は肩にかかった灰を振り払った。今気づいた、というように。

「あまり、温大人を刺激するような言動は謹んで下さいね。この国では、漢人以外の人間に対しては寛容には出来ていませんから」

「そんなのは昔からだろう」

「とにかく、気をつけてくださいよ。わたし達はチームです、和を乱すような行動は謹んで」

「チームなど」

と、吐き捨てた。

「一度も思った事は無い。ここでは個人が物を言うのだろう」

北京が組織に期待する事——結果のみであり、チームワークではないスタンドプレーによる鎮圧。纏まりを欠く人員構成——異民族同士を組ませるのも、政府が最も恐れている叛乱を防ぐため。本当にチームとして結集すれば、軍閥の一つや二つは転覆できる——故に、武人の心を一つにしてはならない。

纏まらないままでいい、自分は独りで構わない——そう思えばこそ、孔飛連の言葉が、虚しく響いた。見せ掛けのチーム。

橙のオクロツクがゆつくりと、雲の谷間に蠢いた。孔飛連が見上げる、横顔に悲哀じみたものを垣間見た気がした。感情の見えない細い目、表情は殆ど変わらないというのに。

「では、わたしが個人として忠告します。李大人、あまり異民族に共感すること無きよう」

今度はしっかりと見据えた。李聖鬼は背を向けたまま、視線だけ動かした。

「何と？」

「あのウイグル人に、己の境遇を重ねましたか？ それとも同情でしょうか。いずれにせよ、任務には私情を持ちこむことは、いずれ破滅を呼びます」

「余計な事を」

吐き捨てる。昂ぶる感情をぶつけるように。

「飽くまで、わたし個人が言う事ですから」

孔飛連の笑み。困惑気味な雰囲気。

「個人的な感想です。最近のあなたは、どこか危うさが滲むようです」

丁度、電灰の文字情報が瞼の裏にちらついた。北京政府の伝達——未成年の夜間外出禁止令。

「さて、警察が動き出さないうちに退散しましょう。我々の存在が知れる前に、闇の存在が表に触れる事は許されないのですね」

孔飛連、機械的な微笑み。

「組織のことは明るみにはならない——国家によって秘匿されている以上。それ故、確実を求められます。同情や共鳴はそれだけ確実さを削ぐ」

「分かっている」

誰かに言われるまでもない——牙狗の重みを懷に感じる。

玖：乳白幻影

繁華街を下っていた。道に散乱した、デモ隊の旗。異民族の市民権確保——それに対する弾圧。警官隊との衝突の痕が、アスファルトの道沿いに点々と残っていた。殴られ飛ばされた歯や、こびりついた血痕。人通りはない。破壊された屋台や放置されたガス車など、どれも城砦を飾る小道具にしかない。

スキャン
走査した。

電灰のくびき、並列して表示されるバックグラウンドにニュース映像が張り付けられる。一部の異民族による、漢人を狙った暴動——世間では、そういうことになっているらしい。

頬を、雨粒がなぞる。霧雨、汚染物質を多分に含んだ粘性の水滴が、じつとりと膚を濡らした。まるで培養槽に浸かっているような心地にさせる。視界はフィルターがかった白。構造物の輪郭を曖昧なものとしていた。境界を失った、曖昧なイメージを投影して、佇んでいた。

ふと、視界の端に白い人影を認めた。向き直る。

往来の真ん中に、子供が立っていた。少女の姿。襷褌たすきふんどしを巻き付けた、衣服とも呼べない布を纏っている。痩せた骨格、筋張った手足が延びていた。白い膚は土に汚れている。所々擦り傷さえある。うなだれていて、顔は伺えない。それでも少女と思ったのは、布地をわずかに押し上げる胸の膨らみと、みすばらしい格好とは不釣り合いなほど艶やかな黒髪から判断した。

「未成年の夜間外出は禁じられているぞ」

話しかける。無反応。立ちすくんだまま。息を吐いた。

戒厳令下、夜間外出の規制——外出したものは警察に保護される。大半はそのまま帰ってこない、ことが多い。

少女が何か呟いた。雨音にかき消され、良く聞き取れない。

何を――

問い返そうとしたとき、少女が急に間を詰めた。五メートルほどの距離を、一足飛びで。気づいたときには、間合いの内に入っていた。

少女の腕が横薙ぎに降り抜かれた。

咄嗟に仰け反る。殆ど反射運動だった。次いで、顎先を刃がかすめ、膚を削り取った。

少女の手に握られているもの——雁翅刀^{がびゅうとう}。細身の片手刀、刀身はサーベルに似る。

どこの刺客か——考えるよりも体が動いた。

刃が降りおろされた。反射的に牙狗を抜いた。二発、撃つ。

奇妙なことが起こった。銃弾が、少女の体をすり抜けたのだ。霞を撃つような、手応えを得た。

雁翅刀が唸る——撫で切り、李聖鬼の首をかすめた。皮一枚、刃が切り開く。紙一重で交わし、銃を向けた。照準あわせ、そのとき奇妙な感覚に陥った。

フラッシュバックが、揺さぶった。幻覚か、あるいはそれこそが現実だったのか。瞼に鮮烈な像、故郷の香り。断片的な情報が油膜のように広がる。

何も感じるな。

引き金を三連発、左右の銃を交互に撃つ。

果たして、銃弾は空を穿った。的を捉えず、城砦の壁に着弾する。少女が跳躍した。

縦横に斬ってくる。李聖鬼は飛び退いてこれを避けた。こめかみに、刃を受けた。

間合いの外へ逃れる。少女は剣先を下げて、誘うような構えを見せる。

瞬時に、これは現実ではないと思った。現実のものならば、銃弾がすり抜けることなどありえない。電灰が見せる虚像、あるいは「亡霊」か、貴様」

少女は答えない。ただ、そこに立っていた。幽玄ともいえる佇ま

いで。

これが”亡霊”ならば——どうして、攻撃することが出来るのか。そんな疑問が持ち上がった。電駆体が干渉するのは、神経までなぜ、傷をつけることが可能なのか——

剣先が額を掠めた。前髪が散る。身をそらし、その反動でまわし蹴りを放った。少女のこめかみを捉える——やはり、手応えは皆無。脚が、空を流れた。

一気に引き離す——間合いの外へ。無駄とわかりつつも銃口を据えたまま。少女は、追ってこない。

「”亡霊”なら、ただのグラフィックだろう、それが」

明らかに、異質なものだ。背後の雨が透けて見えるほど、脆弱なホログラムであるにも関わらず、少女の刀は現実以上の存在感を保つ。

走査した。毛蘭から受け取ったレンズ——信号を読みとるという機械。眼球にかぶせたミクロのスクリーンで、磁性細菌が泳動する。電灰上のデータを、読みとるのだ。

少女が執拗に、刀を浴びせた。体の捌きで斬撃をかわしながら、DNA情報を取得する。

斬撃そのものは、大したことはなかった。太刀筋は、ただ振り回すだけという印象を受けた。それこそ、少女は刀を扱いきれず刀に振り回される格好であった。

”亡霊”ならば、必ずしも打ち倒す必要はないのだ。毛蘭が解析し、正体を掴むことが出来れば——

少女の足が止まった。

「終わりか」

牙狗を差し向けつつ、後ずさった。

銃身を、雨が濡らす。鉄に滴る水が、手首を伝い、酷くどろどろとした液体が膚に滲み入ってゆく感覚があった。

一步、少女がにじりよった。実体を持たない故に、詰めようと思えばいくらでも間合いを狭めることができる。そうしないのは、何

故か。”亡霊”は、こちらの出方を伺っているようにも見える。

何のために。

少女が顔を上げた。髪に隠れた表情がさらされる。

レンズ裏で、走査完了を報せる表示。

少女の顔が、明らかとなる。橙を含んだ唇と、白い膚がぞつとずるほど映える。

両眼が、こちらを向いた。右目は漆黒、左の目は、翡翠色に澄んでいた。

その色だけが、李聖鬼を見据えているように見えた。何か異質なものをみているような。それが、李聖鬼の中にあるビジョンに重なった。

「水晶……か？」

置いてきた筈の記憶。少女の姿は、かつて失ったイメージをそのままなぞっているかのように在った。朴水晶——いるはずのない偶像、在るはずの無い名。

朴水晶の姿——記憶の中の少女。具現化された、写し身がある。

「水晶！」

少女が間を詰めた。反応する、間もなく。刀が、斜めに切り上げられた。

顔面に刃を受けた。膚が灼熱感を得、神経が刻まれる。

斬られた、と悟ったときには二の太刀が襲ってきた。水平切り——咄嗟に銃身で受け止めようとした。

信じ難いことが起こった。刃は銃をすり抜けて、李聖鬼の肉を切り裂いたのだ。驚愕する、という感覚も失ってただ呆然として刃を見送った。遅れて吹き出た血しぶきにより、我に返った。

血の狼煙。水溜まりに転々と、飛び散った。ナノマシンの血漿が洗い流されて、墨を流したような筋をつくった。

どこまでが本来のものか否か、判別し難い。電灰とリアル境界が曖昧になる——溶けあう感覚。

「そっというカラクリか」

傷口をなぞる。”亡霊”に攻撃を加えることは出来ない。>電駆体くとは基本的に、バーチャルな存在だ。シミュレーションされた物体。しかし、向こうからは攻撃を加えることが可能なのだ。物理的干渉を受けず、ただ肉体のみ傷を受ける。

「この痛みは、お前が受けた傷とでも言いたいのか、水晶」

少女はやはり、返さない。雨音だけが、響いていた。

「俺を恨んでいるのだろうな。だから、俺の前に立つのか……」

答えることはないと解つていても、独りよがりな質問を繰り返す。自問に、等しかった。いるはずのない少女、あるはずのない答え、空転する思いを一人呟く。

「お前は、俺を」

そこまでだった。少女が飛び込み、雁翅刀で脚を払った。片足を上げてやり過ごす、重心が左足にかかった。

刀は軌道を変えた。少女が腰ために、突く。避けきれず、肩に刺し込まれた。

バランスを崩した。神経が麻痺したように、力が抜けた。水溜りの中に頽れ、膝をつく。刀が突きつけられた。

濡れた剣が、銀色に照り映える。翡翠色の瞳が、見下ろしていた。獣の牙じみた刃——粘性の有機マシ^{レスピロサイト}ン、人工血球が滴る様——唾を呑む。舌なめずり、血潮に飢えた刃。ナノマシンが結集しても、何故傷が塞がらないのか。

刀が振り下ろされた。

「李大人」

声が出た。刀が李聖鬼の首筋を斬る、手前で止まった。

その瞬間、”亡霊”を映すビジョンが歪んだ。不定型の物体が型から流れ出すように、背景にとけ込んでゆく。イメージが半透明になり、光学粒子がさらさらと溶けて、やがて電灰から、”亡霊”の姿が、消失した。

何も無い空間が残った。

孔飛連が駆け寄ってきた。いつのまにか雨はやんでいた。路上に

流れた血も、消えている。よく見れば、どこも流血などしていない。ただ、斬られた箇所が熱を持ったように、疼いていた。

「“亡霊”が、現れましたか」

孔飛連が差し出す手を無視して、李聖鬼は立ち上がった。

「女のようにでしたね、やはり証言は正しかったようだ」

「ああ……だが」

攻撃を加える、などと聞いたことはない。せいぜい、電灰の管理者に侵入する程度——そういうこと、ではなかったのか。

「雁翅刀なんて、あんなものを使うとは。しかも、その傷」

自分の顔が、水たまりに写った。刀で切られた己の顔、斜めに傷が走る——肉が盛り上がり、蚯蚓腫れを生じさせていた。鞭で打ちつけた痕のよう。

「あの刀が、こうさせたのか」

「斬撃そのものは素人のそれでしたがね……神経に直接作用させるものなのでしょう。あまりに強烈で、身体が過剰に反応してしまっただけです」

「催眠効果、ということか？」

「意識が電灰に浸かると、ね。電子ドラッグを濫用した時に似ている。神経に干渉させる、パルスを送り込まれ、そこで痛み感覚を送り込まれたのかと」

「電灰のサーバーに侵入した奴が、俺の膚に入り込んだというのか？」

「サイバー化を施した我々の膚は、高機能の分子コンピュータと代わりありません。皮膚そのものが三次元構造の端末であり、“亡霊”にとっては電灰上に点在する寄る辺に過ぎない」

人体に対してクラッキングを仕掛けるようなものだ。まるで意図しないイメージが、膚を侵す——傷つける。

「とにかく、オフィスに戻りましょう。データは？」

「嫌と言うほど」

李聖鬼はレンズを取り出した。

「見てはいけないもの、
” 亡霊 ” の一部始終だ」

拾：淡粉思索

送信されたデータを、照合していた。”亡霊”が現れた瞬間から、消える時まで——毛蘭はモニターに映し出される映像を目で追った。「変わった、幽霊ね。刀で切りかかる、なんて事例は初めてだわ」「しかし、電駆体が神経に干渉することはあるでしょう？ バイチャルリアリティは、あらゆる感覚を再現できますからね。当然、触覚も。己の駆体を操り、遠くの商品を手にとって物色することも出来るのですから」

孔飛連。冷静に応じる。

「触覚はあくまで、本人の身の安全を保証する範囲で感覚されるものよ。身体が誤認するほどの痛覚は、与えられない」

阿宮の手が止まったのを受けて、毛蘭は端末を覗き込んだ。

「終わった？」

「DNAの相補性、コードの読み取りだけならば。ただ、どこから発信されているのかは」

画面上に、塩基コードが並ぶ。四文字の分子が交互に絡み合い、並列し、一つの情報を作り出す。生物を構成する、もっとも基本的な単位。

「基となった細胞が、どこから流れたものなのかを特定する必要があるわね。国の遺伝子バンクに問い合わせるか……」

「あるいは、海外から流れたものかもしれません」

阿宮の口調。特別な事を口にはしない。

「祖国では普通だって聞きましたよ。北宋の仲買人が暗躍して、子供を拉致し、細胞を切り出す。ありふれていますから」

「知ったような口聞くわね」

「ですから、普通のことなんですよ。僕みたいな在留邦人が知り得ているわけですから。特に、北宋からの商人が」

「しゃべりすぎだよ阿宮。日本国の事情なんかどうでもいい、結果

だけ教えなさい」

阿宮は憮然としていたが、やがて渋々応じた。

「現在のところ、同一のDNAタグが登録されているところはありません。やはり、海外から流れてきた公算が高いです」

「だけど、”亡霊”の身体的特徴は明らかに東洋人ですね。外国であつても、周辺国から来た可能性は高い」

「そうね、だけど案外すぐに見つかるかもよ。この瞳」

”亡霊”の、翡翠色した目を示した。

「遺伝的特徴、あるいは突然変異。こういう特殊な因子は、存外に早く見つかるものさ。”亡霊”というのはクローンのようなもの、だからね」

「クローン、ですか」

阿宮、呆けたように訊く。

「細胞の塩基を読み取り、トレースする。塩基情報コードのままにグラフィックを再現するからね。細胞を培養するのも、コピーするのも、対して変わらない」

言いながら毛蘭、孔飛連の方を見やった。

孔飛連、なにやら思案顔で端末の映像を見つめていた。普段、笑みを絶やさない臉がほんの少し持ち上がった。何かを思い出そうとしているような面もちであつた。

「孔飛連、どうかしたの？」

「いや、何でもありません」

孔飛連、微笑を取り繕った。毛蘭は深く、ため息をついて言った。「細胞の出元はまた調べる必要があるわね。周辺国も視野に入れて見るわ」

「それで、李大人は」

孔飛連は壁により掛かって、コーヒークップに手を伸ばした。例によって、砂糖を多めに。口をつけるとき、阿宮と視線を合わせた。先に目をそらしたのは、阿宮の方だった。

「あの攻撃は、電子ドラッグ……それも、かなり強烈なものを送り

込まれたような。膚下の分子に痛みだけを認識させる。しばらく神経がまともに機能しないかも」

「それは困りますね、彼にはまだ働いてもらわないと」

少し、引っかかる言い方だ。李聖鬼の腕が欲しいだけで、李聖鬼自身はどうでも良い——言外に、そんな響きがある。元々組織はそういうもの——所属する者の、人格でなく能力を重視する。孔飛連はそれを忠実に守っているに過ぎない。何かにつけて人格を攻撃したがる温道龍の方が、寧ろ特殊なのだ。

「今、李大人は？」

「当分、帰ってはこないでしょうね。市北まで行ったから」

「英雄、色を好むと言いますが。ガイノイドを好んで抱きたがるのはどうしてなのでしょうね、あの人も」

「別に、知らないよ。知りたくもないしね。人の趣味に干渉する気は、ないよ」

「本当に、そう思っているんですか？」

孔飛連がのぞき込んできた。いつもの笑みに、いたずらっぽい表情がにじみ出ている。何かしら含みを持たせているようで、思わず、顔を背けた。

「何よ」

「いえ、別に。あなたが良いなら、それで良いんですが。もしかしたら、不愉快に思っているのかなと」

「馬鹿なことを」

吐き捨てて、隣の阿宮に目を移した。阿宮は、会話など聞いていないらしく無言でキーを叩いている。

皮膚の下に、熱が籠もる感覚。顔面と、胴と、肩。刀を受けた箇所が疼いていた。

「傷になっている」

玲花がそつと、手を差し出した。顔と胸の蚯蚓腫れを指でなぞる。触られた感覚は、ない。

「この間の仕事で、やられた」

”亡霊”が、出たの？」

玲花の言葉に、飛び起きた。玲花は上目遣いに、こちらを見つめてくるばかり。

「どこで、それを知った？」

「あたしの脳は、電灰とリンクしているんだもん。あたしは電灰で、色んなこと、覚えるんだよ？ 言葉も、事件も。どこか遠い国の昔話や子守歌、全部入ってくる」

「その中に、”亡霊”に関する情報があったというのか」

「あなたが、”亡霊”と出会った時、あなたの悲鳴を聞いたの。痛い、っていう声が電灰を通して聞こえた。でも、あたしには何も出ない。あなたが痛いのを、あたしは何も」

ふと玲花の表情が曇ったように見えた。深い淵を臨む、悲哀じみた色。潤んだ瞳に、李聖鬼の姿があった。

ガイノイドの所作——高度にプログラミングされた行動、遺伝的アルゴリズム。男の心理をくすぐる表情を見せるなど、この人形には容易い。あまりに人間じみて、直視することも躊躇われる。

「あなたの意思が流れていた」

「電灰にリンクしているのは感覚だけだ。俺の意識は、どこにも出てはいない」

「でも、あなたが、痛いって」

玲花の言葉は、日に日に種類を増している。身体のみを求める他の客と違い、逢瀬を重ねるたびに李聖鬼は玲花に言葉を教える。玲花の人工知能はそれらの意味をひとつひとつの意味を噛み砕き、解釈し、他の単語との連関を学習してゆく。

「可哀想」

玲花が、傷を撫でた。

「その意味、分かっているのか」

「分かっている。あなたが痛いから、あたしも痛いって、そう思うってことでしょう」

「同時に、それは自分が高次の存在だと示している言葉だ。同情や、哀れみは、相手が自分よりも劣っているという前提の下、はじめて成立する」

「そうなの、でもあたしはそんなつもりじゃないわ」

「つもりもなにも、お前が真に理解しているなどと思っていない。言葉をなぞるだけで、お前は哀れんでいるわけではない」

所詮、機械。黄昌日はそう言っている。分かっている。内なる声。目の前に横たわる裸身は有機物の細胞であるとしても、感情ある機械とはなり得ない——自らの身体が、無機の膚であるとしてもそれが完全な機械とはなり得ないと同じように。機械ならば、最初から何も思うことはない。

玲花の頬に唇よせて、首筋に舌を沿わせた。淫靡な溜息。少女の柔肌は甘く、香のにおいがした。

左眼の翡翠色。朴水晶と同じ——玲花と、”亡霊”。

「ねえ、何を考えているの？」

玲花が不思議そうに見上げた。いつの間にか、考え込んでいたようだった。

「あなたはいつもそうね。あたしを抱きながら、何か他のことに意識が向いている。何となく、そんな気がする」

「どうしてそうだと言える」

「分かるよ。だってここにくるお客、あたしの身体を求めているんだもの。あなたは違う、何か別のものを見ている」

”疑問”を持つということ。問いかけと、それに対する解——自己組織化により知能を拡張させる、ニューラルネット。玲花もまた、そのパラダイムに倣っている。

だがこの問いかけは少し違う気がした。どちらかというと、積極的な興味を以て訊いているような感じだ。必要でもないことを、知ろうと。

「故郷のこと？ いつか話してくれた」

「まあ、そんなところだ」

半分真実であり、半分は嘘だった。故郷そのものではなく、玲花を抱くときはいつも水晶のことがある。

「あなたの故郷って、朝鮮ね」

「何にもないところだ。何にもないから、滅びた」

「でも、忘れたことはないんでしょう？」

「囚われているだけだ」

幻聴、幻覚。蝕むフラッシュバックはいつも、幼い記憶から始まる。美しかった故郷の姿はどこにもなく、血のにおいと排煙に焦げるビジョンしか再現されない。

何も思っな――

ふいに現れた不快な呪縛。歪んだ視覚情報が網膜に投影された。

「ねえ」

玲花の手が、重ねられる。手のひらの温もりを意識するに、熱が引いていくように映像が消えた。

「あたしも行ってみたいな、あなたの故郷」

その言葉に、別の驚きを感じていた。人工知能が”願望”を口にすることなど。

「もうとつくに滅びた国だ」

「その場所が残っているんでしょ？」

「電灰では見れないのか？ その手の情報ならいくらでも。視覚どころか、触覚まで」

「ここにも分らないもん。実際に見ないと」

「おかしいことを言う、お前」

願望、欲求、意志。

それらがプログラムによるものなのか、あるいは。

少女の体を引き寄せた。膚に唇づけて、指を這わせた。

ひとしきり少女の身体に溺れたのち、目を開けた。腕の中で、玲花が眠っていた。正確には、眠るようなポーズだろうか。あるいは脳の構造を模した人工知能にとっては、本当に「眠る」という行為を必要としているかもしれないかった。

玲花を起こさぬように気を使った。本来的な意味で眠っている、
と思ったから。衣服を身につける、硝煙のにおいが染み着いた布地、
精算を済ませて宿の外に出た。

水溜まりが広がっていた。昨日の雨だろう。やけに粘つく雨水が、
舗装されない道で小さな湖面をつくる。濁った水。もしそれが澄み
切った透明であつても、水面には同じく灰色のくすんだ空が映つた
と思われた。

ぴちゃ。音がした。ぴちゃ、ぴちゃと背後で——水面に踏み入つ
て、跳ね上げる無邪気な子供の。

振り向いた。誰一人、存在すること無く、ただ足下の水溜まりが、
かすかに波紋を広げている。

これはリアルか、それとも電灰の虚像か。
灰が舞い降りた。

拾巻：花青胎動

”亡霊”を掴んだ——報せを受けたのは十日後だった。

「DNAの解読は、わりとすぐに出来ただけで、どこから流れたものか分かるのに手間取ってね」

「データベースに侵入したのですか？」

孔飛連が訊くのへ毛蘭、頷いた。こわばった表情。

「公式のものから、政府の機関にまで、ね。北宋の世界一すばらしい、ヤワな防壁に穴あけた」

「どうでもいい、結果だけ言え」

温道龍。サイズが合わない椅子に、どっかりと腰を下ろしている。腕組みしてふんぞり返って、見下ろすような視線をくれる。

「亡霊」そのものはものすごくシンプルな、細胞由来グラフィック。北宋、江南のデータベースではなく、遠く南朝鮮の国連施設にありました」

朝鮮、と言ったところで毛蘭がふと見やる。温道龍は腕を組んで空を睨んでいた。孔飛連は、視線をわずかに動かしただけだった。

李聖鬼は黙っていた。特に、驚くに値しなかった。殆ど、予測の範疇だった。

「驚かないんですね」

阿宮は、李聖鬼が動揺すると思っていたのか、ちよつと意外そうな顔をした。

「驚いたところで」

何になる。そう告げるのへ、阿宮はつまらない、とばかりに鼻を鳴らす。

「もうちよつとリアクション欲しかったな」

「次の言葉で驚いてやる。貴様が自ら銃を執って”亡霊”退治をする、とかならばな」

挑発——細腕で銃は撃てないと言外に含む。察知したのか、阿宮

は眉間に皺寄せた。眼鏡を押さえて端末に向き直る。

「"亡霊"に使われている細胞は」

毛蘭が口を開いた。

「朴水晶——朝鮮の平安北道の出。あんたの故郷ね、李聖鬼」

毛蘭はまるで、詰問するような口調だった。心なしか視線も険しいものとなっている。

「あんた、何か知っている？」

返答次第ではどうにでも変わるといった感じだった。視線が突き刺さる。

「故郷が同じだからといって、知っているわけではないだろう」

李聖鬼が言うのに、毛蘭は不審そうに眺めていた。

「不可解なのは」

毛蘭は視線を逸らした。

「この細胞の元になった少女は、この世のどこにもいない。塩基情報、平安北道での紛争、その死亡者リストの中から見つかったわけだ。孔飛連の姿を視界に捉えた。薄く目を開けて、茫洋として何か考え込んでいる風情。視線は阿宮の端末画面に注がれている。その阿宮も、キーを叩いているばかりで他は反応も示さない。

「問題は、どこにも存在しないはずの細胞が、どこで取引されて保存されているのか。仲買人たちはなるべく新鮮な細胞を欲しがるもの」

十年前——フラッシュバックに揺り動かされる。込み上げてくる衝動を、喉元で押さえ込む。

「死者の細胞、文字通り"亡霊"ってわけだ」

上手いことを言ったつもりなのか、温道龍が含むような笑い声をあげた。

「発信源は分からののか」

「"亡霊"がどこから操られているのか。だいたい、こういうのって海外を経由してくるけど、その痕跡もない。防壁も、未だ崩される気配はないし」

政府へのクラッキング——サイバー攻撃。そのための防壁は生物の非線形なロジカルで構成される。生み出すのは毛蘭のような、電解質をワームで満たした「人工の万能」たちの役割だった。

「逆探知もできねえってか、てめえのキャリアも大したこたねえな」
「簡単に言わないでくれる？ 脳味噌筋肉の武人さんとちがつて、難しい仕事なの」

毛蘭が食ってかかった。サイバー化の極致、武人と人工の万能。筋肉と頭脳、理性と本能。この二人はその典型とも言えた。ことあるごとに、対立する。

「単なるシミュレータかと思ったら、思いの外厄介ね。電子ドラッグとそれを横流ししている連中、洗い流す必要がある」

「一度、南の連中を一掃する必要があるかもしれん。孔飛連」
温道龍が言うのに、孔飛連振り返った。

「老大に指示を仰ぎましょう。」 亡霊”を扱うものが、街のどこかにいるとしたら」

孔飛連、いつものように薄い笑み。容易には垣間見せない心の奥底、カモフラージュめいた表情で。

「十年前の細胞を使う奴が？ そんな奇特な人間」

「十年前、ではなくても。たとえば、有機ロボットなど」

心臓が一つ、高鳴った。平静を装うが、孔飛連がこちらをちらりと見やるのを感じた。

「有機物を材料とし、自律型の人工知能を備えたタンパク質マシン…… 生体素材の人工筋肉、あるいは生体アンドロイド。細胞そのものを手に入れるならば、なにも生身の人間から採取する必要はないどこからでも、手に入ります」

またひとつ、鼓動が早まる。血液が凍るような心地が、した。孔飛連の言葉は、毛蘭に当てたもの。にも関わらず、掻き乱す。

「そんなものを、わざわざ手に入れて、までか」

「そんなものだから、手に入り易いんでしょう。あなたのご執心の有機ガイノイドも例外ではないですよ」

玲花の顔が脳裏に浮かんだ。あどけない笑み、幼い肢体、白い膚の”亡霊”と重なる。

イメージを、頭から追い出した。

「どうするというのだ」

「おそらくは、供給源を断つ方法が手っ取り早いでしょう。電駆体の材料となるものを排除、同時に外から入るドラッグを断つ」

孔飛連の目元が緩んだ。阿宮の指が止まった。端末の文字列が、レンズに投影される。緑色の行列式に、線形のパラダイム。ニユーラルネットの、並列処理の画面。再び阿宮、無機質に指を動かした。機械仕掛けの、オートマータ。金属めいた青白い膚が、黒灰のプラスチックキーを叩く。

「電子ドラッグは、南のマフィアか？」

温道龍。いい加減、退屈そうだった。話についていけないという様子。

「国境で汚染が広がっています。李大人に送り込まれたウイルスは神経を食い破る型、毎度毎度あんなものを打ち出されては堪えます。特に、サイバー化を施された者にとっては。あなたには、危険では？」

「どういうことだ」

孔飛連に代わり、毛蘭が発した。

「あんたは既に、脳が悲鳴を上げるほどのドラッグ浴びている。この先、頭突っ込むと一生分の痛み味わうかもよ？」

暗に、リタイアせよ、と。毛蘭の口調はそれでいて、もつと切実なもののようにも聞こえた。質問に対する解は一つであるべきだと、強硬なものを含んだ響き。経験則、状況を鑑みれば、その解を弾き出すべきであることは、明確だった。だが

「俺は、降りる気は無い」

解を、本心が拒んだ。

毛蘭の表情が少しだけ翳りを帯びたように見える——淡紅の唇から小さく吐息を洩らして。毛蘭はすぐに、顔を背けた。それ以上悟

られるのを、懼れているかのように。

「決まりですね。それでは。我々は細胞の供給源を断つ、毛大人は引き続き搜索をお願いします」

毛蘭が嘆息した。

空の色が変わる。砲金灰色から群青——マリンブルーの深みへと。赤紫のレーザー光を集約し、投影する。

電灰の映像と重なる共同住宅。城砦が連なる——狭間に点在するネオンライト。消え入りそうな光格子が、古びた看板のアラブ文字を縁取っている。

その地下——老人の導きで、李聖鬼は椅子にかけた。

「電子ドラッグにやられたか」

李聖鬼の傷を見るなり、黄昌日がいった。ぼそぼそと口の中だけで発している。

「催眠状態で痛みのプログラムを送り込む。拷問ではよく使う手だ」
「あんたもやったのか？」

「電灰なんてものが出来る前からの常套手段だ。薬で酔わせれば痛みを倍加することなど、容易い。薬の使い道は様々だ」

黄昌日の鋭い目がじろりと睨んで

「大分量、増えたな」

李聖鬼が錠剤を噛み下すのに言った。皮肉めいて、聞こえる。

「あんなものを見れば、量も増える」

「朴水晶をか」

ちくりと突き刺さるものが、あった。

「“亡霊”の細胞、水晶のものであることは間違いない。いくら外観を整えようと、あの左眼の特徴だけは消せない」

胸に刻まれた傷に触れた。雁翅刀を受けた時、吹き出た血は幻だった。しかし、身体に誤認させるには十分だったらしく、斬られた所が青黒く内出血を起こしている。

スーツを羽織った。

「“亡霊”の細胞は水晶のものだとして、それを知っているのは俺とあんただけだ」

「だから俺のところに来たのか？ 俺を疑っていると」

「そういうことではない。”亡霊”を生み出した誰かが、仮に水晶のことを知っていたとしても、何の益もない。おそらくは無作為に選ばれただけ——生きている人間から細胞を掠め取ればどこかで足がつく。その点、すでに死んだ者。物質としての細胞なら、その辺にいくらでもある」

「ならば、より鮮度の良い有機ガイノイドから採取するほうが、シミュレータとしての役割は果たせる、か」

窓の外。緑の輝光が変形し、像が橙のオクロックに転じる。アナログの表示、長針が十の位置にある。網膜スクリーンの時刻表示——22:20。現実に上書きされる疑似空間に、機械言語の詩が流れる。

「老大は審議を行っている」

「審議とは」

「細胞の供給元を絶つための、都市の掃討ということ。市内の遺伝子バンク、細胞溶槽と遺伝子医者——疑わしきもの全てを炙り出す」

「生化学は国策事業なのだろう。わざわざ潰すような真似を」

「その国がやるんだよ、狩り。それに、襲撃するのは非合法なところのみ。国家指定の企業は、対象とされていない」

「不合理だな」

「合理なことなどあるか、この国に」

「違うない」

自嘲するように、黄昌日は鼻を鳴らした。

「なあ、黄昌日よ」

しばらく沈黙した後、李聖鬼が言った。

「あんた、機械が感情を持つことってあると思うか？」

「何を唐突に」

黄昌日が見上げた。驚きと共に。李聖鬼の言葉を呑み込みかねて

いる。

「学習機能を持ったプログラムが、自ら拡張し、新たな知識を持つ。遺伝的アルゴリズムやニューラルネットの特徴だ。断片的な情報をボトムアップで組み上げて、新たな知を生み出す。その知識が知性になり、感情と同義のものを獲得することが」

「あり得ないな」

最後まで言い切るまでもなく、黄昌日の否定の言葉。

「感情と知識は別のものだ。いくらデジタルな情報を組み上げても、決してアナログなものにはならない」

「俺たちとて、元々はデジタルなものだ。細胞は精密な機械のようなもの」

「だがそれは、生命であることが前提だ。生命とは生き、死に、子を成す。DNAを次世に受け継がせてゆく」

「プログラムとて、どこかにデータを移すことは可能だろう」

「端末から端末に記憶媒体を移すということ、話は違う。生命が感情を持つ所以は、死を迎えるからと言われる」

黄昌日が金鷄の煙をくゆらせて言った。紫煙が細く伸びる。

「恐怖とそれに裏打ちされた自己防衛。次世代に血を残すための愛情や肉欲。死が訪れることで持ち得るものだ。死を前提としなければ、いくら知性ばかりの存在となろうとも感情を芽生えさせることはない」

「死を前提か。何となく、俺たちのような人間には当てはまらないような気もする。武人はそもそも、死から遠ざけることに心血を注いで改造された存在。そういうものは、本来的な生命と言えるのか」

黄昌日は答えなかった。

「玲花がな」

と李聖鬼は言っ

「俺の故郷を、見たいと言った。死を持たないものが、望みなど持つことはないだろう」

「プログラムの一つだろう。それこそ知識、情報によるものだ。お

まえが何を言えば喜ぶのかを、学習しているんだよ」

「故郷の話など、俺が喜ぶことではない。あいつもそれを分かっている」

「だから何だと言うのだ。」願望”を口にしたら、それが感情の発露と？」

「それは分からない。ただ、あいつが本当に望んでいるならば……」
その時、網膜の裏側が瞬いた。通信が入る。

「召集か」

李聖鬼が腰を上げるのへ、黄昌日が訊いた。李聖鬼が頷いた。

「まあ、今は忘れてくれ。今日は喋りすぎた」

去り際、黄昌日の背中が蠟燭の炎に揺れた。陰を作っている。

拾式：艶紅血漿

一日目——李聖鬼と孔飛連の掃討。南のストリート、遺伝子治療の闇医者。法外な金と引き替えに遺伝子導入を施すモグリの医者。違法に細胞を横流ししている。本来ならばその手の小悪党は黙殺されるが、今回は事情が違った。細胞を扱う職業——正規の生化学工業を除き——遺伝子導入を行う際の細胞は、大概冷凍保存されている。全て廃棄する。医者が抵抗したが、孔飛連の剣一突きで、事足りた。

二日目——温道龍、李聖鬼による襲撃。マフィアの拠点の一つを叩く。生体素子を回収——処分。マフィアたちは抵抗。ここでも、武人による攻撃を受ける。

鮫の遺伝子を導入した武人。研がれた爪で攻撃を受ける。左腕は高電圧の電気銃——帯電針を飛ばすタイプ。

「手出し無用」——温道龍の言。跳躍し、電気針を掻い潜って縦拳を突き貫いた。鋼鉄にも等しい温道龍の拳——武人は頭蓋骨ごと粉砕され、絶命した。その間、李聖鬼が牙狗で残りを掃討。拠点をつ潰す。ついでに電子ドラッグを押収し、廃棄した。

三日目以降は、市北の掃討だった。

黒の薨が連ねる、旧市街。何度も足を通わせた場所であるが、どこか異質な空気を感ずる。張り詰めた、棘を含んだ殺気が満ちる。

『映像、送ります』

孔飛連の声——骨伝導スピーカから。半径五十キロ四方の立体映像が電灰のバーチャルに描かれる。孔飛連の位置は、立体マップの一番外れにあった。

売春窟——有機ボディのセクサロイドを擁している楼閣が立ち並ぶ。

「さつさと終わらせんぞ」

温道龍は鉈のような環刀を携えていた。クローム加工の単分子刃。

巨大な刀身に関わらず、刃先はわずか一分子程度の厚みしか持たない。

「貴様の通っている所も、この界限かよ李聖鬼」

「だったらどうだと言っんだ」

金鷄を啜えて、紫煙を棚引かせる。短くなつた吸い殻を吐き捨てる、水溜まりに落下した。派手な音を立てて火が消える。

「貴様の手で潰すには忍びねえだろうから、貴様はそこで見ていてもいいぜ」

環刀を担ぎつつ、温道龍が言った。最高に愉快という笑み。配慮、などと毛頭考えない。この男は殺しに飽くということがない。内乱以来、肉を斬り、潰す感覚が忘れられない——中毒ですらある。獣だろうと、人の形をした機械であろうと、変わらないようだった。

どうする、と温道龍が言うにも構わず、牙狗を抜いた。撃鉄起こす、銃弾が送り込まれる。

温道龍、意気揚々として店の一つに踏み込んだ。扉を蹴破る。

甲高い悲鳴。温道龍が刀を振るう、背中越しにぱつと血の狼煙が上がるのを見た。さらに踏みこんで女の首を刎ねた。

黒スーツの男たちが奥から駆けつける——この店の用心棒、といったところか。男たちが銃を構えた、その瞬間温道龍は素早く懐に入り、水平に薙払った。銃を持ったままの手が五人分、切り落とされる。撃つよりも早く斬り伏せる、剣術の基本だ。

李聖鬼、牙狗を向けた。階段を降りてくる黒服に向けて発砲——照準の先で、脳髓と黒い血が、背後のタンパク壁に飛び散った。

さらに三発撃つ。銃火の明るい緑が灯されて、薄暗い室内が照らされる。閃光が弾ける——ゲル化マシン、インプラントの金属部品と混じり血飛沫。赤黒い肉や流動の組織が流れる。

『その先三メートル先』

孔飛連の声。緊迫している。

温道龍の怒号。

「背後に回れ」

言葉通り、黒服たちの後ろに回り込む。

八方、撃ち尽くす。弾倉を換えた。右の鳳凰、左の玄武。それぞれが向けた先で、銃弾は確実に敵を捉え、膚を千切り、喉を喰い破った。

「先に行く」

李聖鬼がいった。

「孔飛連、どこだ」

マイクに向かって言う。すぐに、スピーカーから声が返ってきた。

『今向かっていますよ』

その声。楼閣の裏口。

孔飛連は剣を抜いた。高速の振動が剣身全体に満ちる。剣を水平に保ち、戸口へ侵入。

一人、黒服の喉を貫いた。その背後で銃を向けられる気配がする。剣を抜き、手首を切り替えて新たに突く——そこまで一挙動で為した。

戸口を見やる。男が立っていた。不自然な筋肉——おそらく機械筋肉の類を移植。膚はやけにざらついた感じがした。左腕に鎌のような刃を埋め込み、右腕にショットガン。銃口向け、引き金を引いた。

銃火弾け、散弾がばらまかれた。孔飛連、扉を盾にする。着弾し、木屑を舞上げた。

男が左腕を降りかぶり、刃をたたきつけた。扉が斜めに寸断され、孔飛連の姿が晒される。

「きいいええええ！」

男は図体に似合わない奇声を上げた。刃を斜めに振り降ろし、孔飛連が下がったところへ銃口を突き出した。

剣を、水平に払った。切っ先が閃く。キンツ、と小気味よい金属音とともに、銃身が斬り落された。男が呆けているに、間髪入れずに剣を突き出した。

剣先が等しく、男の喉を貫いた。鰐元まで刃を押し込める。

「あんまり、余計なことはしたくないんですがね。おとなしくしてもらわないと」

孔飛連が男の耳元でささやいた。男は白目を向いて、体を痙攣させている。

「見極めるには、それ相応のリスクが伴う」

その言葉が伝わるはずもなかった。剣を引き抜くと同時に、男の巨体が頽れた。

「さて」

と孔飛連、見上げる。天井が震えている。

「そろそろ実行でしょうか」

その、二階。

牙狗を提げたまま、一番奥の部屋へ歩く。途中の部屋に、一発ずつ銃弾を撃ち込んだ。扉を蹴破り、セクサロイドを破壊した。一体撃つごとに、紅の狼煙が昇った。人工血球ではない、ヒト本来の血の色だった。人ならざるものが、一番人らしい器を保っているという矛盾。

人ではない、と呪文のように思い詰める。そうしなければ自我を保てない気がした。紅の中に沈む骸、人めいた膚ではなく、金属の骨格だけを見る。機械仕掛けの側面だけを目の当たりにして、その血の赤きことを鑑みない。そうしなければならぬ、気がした。

撃つ、撃つ、撃つ——掌に残る反動と共に、鉄の味を呑み込む。

血の溜まりが廊下に広がる。鉄と火薬のにおい。故郷の風景——呪われた虚像。硝煙の中に沈む、顔のない死体。焼けた野に伏す、焦げた骸がよぎった。戦場の空気。亡国の荒れ野を歩く心地。

何も考えるな。言い聞かせる。十年前からそうしてきたことだろう、今更何を思うことがある——まるで自分という器を放り出して、外側から眺めるように。自らのすること、これは自分ではないという感覚。触感だけは同調し、違う自分を共有している。突き放して、

俯瞰して、しかし破壊を行っているのは紛れも無く自分だった。心身が乖離する、蝙蝠病——病のせいばかりではない。

奥の部屋。麒麟のレリーフ、桂の木で作られた扉。蹴破る、白梅が香った。

玲花が、いた。

中央の寝台。白い衣に細い線を包んだ姿。身を丸めて、胎児のように眠っていた。李聖鬼が入ったのを受け、ゆっくりと身を起こし、目を開けた。

「李聖鬼、今日は早いのね」

硬質な、黒い瞳。淡い、翡翠色の眼。見つめる少女の、あどけない視線。これだけの騒ぎでも、まるで意に介さない。いつもどおりの、ルーティンな反応域。

機械——予定されたもの、プログラム。分かっていた筈。少女の肉体、ヒトを象ってはいても、ガイノイドという定義を外れる事は無い。

「顔色悪いよ。あと、何か血が付いている」

血——返り血が付着。頬を拭った。紅の血痕が残る。

李聖鬼、銃を向けた。玲花の額——狙いをつける。

銃口の手で、玲花はきよとした顔をしていた。初めて外の世界に触れた、子供のように。銃すら初めて見たという風情の。

死の観念などない。少女は銃弾を受けても己が壊れるということも認識出来ていない。電灰で得た知識と言えど、所詮は情報。死に対する恐怖など、理性を持った生物にしか芽生え得ない。

指先に力を込める。玲花はやはり、動かない。あと数センチ絞れば、銃弾が吐き出される。それでも、玲花は何らかの反応もない。理解することを放棄した、無垢な笑みを浮かべてまで。

ふいに、ビジョンが来た。

舞降りた炎の欠片。焦熱の中、少女が佇んでいる。願望や、あるかなしかの情念も全てかなぐり棄てた、空虚さを湛えた横顔。翡翠色の灯火が、消えかかっていた。

玲花の姿が、イメージと重なる。朴水晶の目、その願い。

違う。こいつは水晶じゃない。幻だ、消えてしまえ。

声がした。鼓膜ではなく、脳に直接響く。

何も思ふな、何も感じるな。

呪文のような繰り返し。深く入り込み、蝕む不文律の回路。

「どうかした？」

少女の唇が告げた。玲花のものか、水晶のものか、判然としない。フィルターがかった音声が、曖昧な輪郭を持つ。

「聖鬼……」

唐突に名を呼ばれた。その瞬間、雷撃が走ったような気がした。反射的だった。引き金を絞る。乾いた音が、響いた。

裏口。

孔飛連は銃声を聞いていた。外に出る。雨が降っていた。

「やはり、そうなりますか」

自嘲気味。何を期待していたのだろうか、と己を笑う。希望的観測とは真逆に位置する事態——それこそが、予測の範疇だということ。それがひたすらに滑稽でもあった。

水音。路上を叩く、雨粒。空気を汚染する酸性の負荷物質と、バイオレメディエーションのマシンが混ざり、混濁した雨。頬を伝い、顎先に流れ落ちた。

剣を納めた。天を仰ぐ。長くなる、と呟いた。

拾参：紫炎楼上

通りを走った。城砦の群、路地裏の風景。駆け抜けるは、二人。黒い衣、白い漢服。

水溜りが跳ねる音だけが、聞こえていた。玲花の手を引いて、街道を走る。

「どこに行くの？」

玲花の問い——答えない。その問いに対する解答は、李聖鬼自身も知らない。突き上げられたもの、何かに揺り動かされる。今、己の意思ではなく、違う意図の下に走らされている感覚。

合理的ではない。そう感じていた。自分が何をしているのか解かっていた。こんなことをして、何になるのだということも。

今すぐ棄てる——本能が告げる。棄てて、始末する。最適な解は、それ以外にありえないと——

解かっている。だから、何だと言うのだ。俺は俺だ、俺が決めることだ——精一杯の抵抗。叛乱というにはあまりにも小さすぎる反発。

李聖鬼、足を止めた。立ち止まる。前方、膨れ上がる殺気に身構える。温道龍の体躯——雨に晒される。

「何のつもりだ、李聖鬼」

環刀の刃がぎらつくに、李聖鬼は牙狗を抜いた。撃鉄起こす。無薬莖弾の装填。右の銃を向け、左手で玲花を庇った。

「命令違反だ」

「知っている」

「組織への背信が、どういうことか分からないでもねえだろう」

無論、理解していた。愚かしい、と自らを罵ってもいた。今も。

「そういうことかい、李聖鬼。てめえは祖国よりも、人形遊びが望みか。そのために北京を裏切って——」

「祖国など、貴様にとっての祖国だろう。俺の心に、この国は最初

からない。北京に忠義を尽くすことなどありえるか」

「尽くせよ、尽くさなければならねえはずだ。貴様ら朝鮮人は」

じり、と温道龍が歩を詰めた。環刀を下げる。低い構え、獣の気迫。

「下がっている」

玲花に告げた。左右の銃をつける。照準、定め――

温道龍が跳びこんだ。

発砲。左右同時に火を吐いた。

温道龍、腕を上げて銃弾を防いだ。肉に突き立つ熱の弾頭。分厚い筋肉に阻まれる。

再び発砲。緑の発射炎。

温道龍、跳躍し、刀を振り上げた。

「勢！」

叩き斬る。銀光が三日月を描いた。李聖鬼、飛び退いて斬撃をかわず。切っ先が前髪を掠めた。

二の太刀。斜めに切り上げる、温道龍の刀。身を仰け反らせてやり過ぎす。鼻先を刃が通過した。

一旦、間合いの外に逃れる。その間、牙狗を撃つ――四連射。細かい炎が散り、交差する。明滅する銃火の先、温道龍の姿が消えていた。

背後に殺気を受けた。振り向く、余裕すらない。背後に銃を向けて二連発。振り向きざま、廻し蹴りを打つ。踵が、振り上げたばかりの温道龍の手を弾いた。刀を叩き落とす。

好機。

向き直り、連射。反動で銃が暴れた。温道龍、下がり、筋肉の鎧に弾を受ける。最低限急所を護った構え。膚にことごとく、銃弾が突き刺さる。

距離を取った。温道龍、牙狗の射程距離外に逃れる。

「刀はもつないぞ、温道龍」

環刀を踏む――封じ込める。銃をつけた。

「慈悲か？ 卑しい高麗棒子が、似合わない」

温道龍は両腕をだらりと下げて笑っていた。吊り上げた口元から、赤黒い歯が覗く。こちらが何をしようとも、如何ほどの影響も受けない、というような笑い方。戦慄する。

一步繰る、間合いの内側。左右の銃を差し向けた。同時に温道龍が動いた。右腕を真っ直ぐに向け、掌を曝け出す。

温道龍の前腕部が、上下に割れた。

目を睜^{みは}った。二つに分かれた腕の中に、砲身が納まっている。埋め込み銃——その瞬間。

「喰らいな、糞ツタレ」

そう、温道龍が言った、時。砲身が紅く焼けた。

瞬間、拳大の火球が、砲身から放たれた。

咄嗟の事だった。炎が塊を成して、迫る。首を捻って、火炎の衝突を避ける——膚が炎熱に晒されて、髪が溶けた。城砦に着弾し、轟然と火球が爆ぜた。

紫の炎——化学物質の炎色反応。高温の中心部は白く輝く。

「驚いたかよ。内乱の時、こいつで朝鮮人を何人焼いたことか」

温道龍——得意げ。李聖鬼、唇を噛んだ。拳や刀は見せかけの武器、本来の温道龍の武装ではなかった——フェイクか。

「炎掌。かつて、中原に存在したサイバネティック武装だ。目にするのは初めて、って面だな」

「俺は生まれてもいなかったからな、ご老体」

精一杯の憎まれ口。それでもしなければ、平常心を保てそうもない。

「ほざけ、高麗棒子。こいつで豚の骨、溶かしてやるよ」

言った瞬間、炎掌が吼えた。火球を三連発、放つ。横っ飛びで避け、廃墟の中に飛び込んだ。火球が路上で弾け、火柱が立つ。炎は酸素を求めて手を伸ばし、空気ごと呑む込む勢いで拡大した。路面の水溜りが蒸発し、白煙を昇らせた。

「ハッ、どうしたよ。勢いが萎えたか、怖気づいたか！」

炎掌から無秩序に吐き出される、紫色の高熱体。壁にぶち当たり、建物を炎に包ませる。配管の鉄が熱に溶けて、しゅうしゅうと白く縮れ、液状に流れた。蛋白壁に熱が伝導し、背中が焼けるように熱くなる。

壁が割れた。拳が砕き、温道龍の巨軀が飛び込んでくる。炎掌を差し出した。炎放つ、数瞬早く李聖鬼が動いた。頭を低くし、温道龍の腕を掻い潜る。炎が頭上を焦がすのも構わず、懐に入り、銃口を押し当てた。

銃撃——深い肉に埋る感触。骨には至らない。

顔面に拳。温道龍の、硬質化した拳頭を受けた。首ごと持っていかれそうな衝撃を喰らい、吹っ飛んだ。世界が回り、壁に叩きつけられる。

息が出来ない。鼻が折れていた。口で空気を吐き出したところ、温道龍が炎掌を突き出しているのが目に映る。

炎立つ、刹那。飛び込んだ。紙一重、わずかの差。火球が弾けると共に、間合いに踏み込む。李聖鬼がいた箇所に着弾し、炎上した。温道龍が再び炎掌を向けるのに、前蹴りを放ち、砲門を跳ね上げる。から空きの胴に向けて、五発撃った。

鋼刃弾が、防具を貫いた。温道龍は信じられない、というような顔になった。胴を穿ち、そこへもう一度撃つ。

ハンマーが引き戻った。弾切れ。温道龍がほくそ笑む。

拳。温道龍が放った。李聖鬼、左手で受け流し、身を回転させて勢いを殺す。勢いのまま右脚で後ろ廻し蹴りを打った。李聖鬼の靴底が、温道龍の顔面にめり込む。温道龍がバランスを崩した。

去り際、廻し蹴り。軸足で飛び、左脚で首を刈る。当てた衝動で温道龍が倒れる。引き際——背を向けて、階段に駆けた。

「貴様！」

怒号。足元に炎が弾ける。立ち止まらない。階段を駆け上がった。三階。身を潜める。温道龍が昇ってくる気配。銃弾を装填した。電灰が映し出す立体映像。衛星からリアルタイムで、内部構造を

映し出している。李聖鬼や温道龍の位置は光点で示されていて、その距離は狭まりつつある。

駆けだした。廃墟の一室、オフィスだったであろう部屋に入る。天井から垂れ下がる、コードの類。先端のコネクタが、溶けかっている。

壁が崩れる。温道龍が飛び込んだ。すかさず発砲。温道龍はものともせず、突っ込んでくる。

炎掌、構え。

砲身が向く。熱を帯び、炎が生み出される。

射出——轟火が生まれ、撃ち込まれた。

身を逸らした。火球が李聖鬼の左顔面を掠めた。膚が焼け、神経を萎められる。温道龍の間合い、火球の届く範囲から逃れる。去り際に発砲、それがどれほどの効果も生まないと知りつつ。

火球、弾丸。交錯し、あるいは衝突する。壁、天井に飛び火し、弾頭が熱で溶け消える。オフィスを隔てる遮蔽物が燃え、階層が火に包まれた。

「舐めるなよ、高麗棒子！」

怒り狂った温道龍の声。炎の向こうから。

「俺達漢人は、貴様らに自治を与えた！ 文字も、名前も、国号すら！ それ故貴様らは俺達を崇め、忠誠を誓わなければならないはずだ！ そうしなければならぬ、義務がある。何も決められない、隷属の民。それを管理し、教育する。繰り返してきたことだ、貴様ごときにその掟を崩されてたまるか！」

誇りを傷つけられた者の叫び。自分ではなく、民族という括りでの憎悪。温道龍には中華は絶対であるという思い込みがある。その大前提が、温道龍の自己同一性^{アイデンティティ}。

温道龍が近づくのへ、李聖鬼は退いた。逃げていても活路は見いだせない、攻撃の糸口を探る。

だが電灰が映し出すマップは、正確に李聖鬼の現在位置を報せてしまう。

炎が切れた。新たな火球が飛び出す。右に倒れ込んだ、直後。李聖鬼の体があった場所を火球が通過した。外套に飛び火する。

紫の火が、たちまち燃え広がった。叩いて消そうとするがなかなか消えない。それどころか火はますます勢いを増してくる。やむを得ず、外套を脱いだ。床に落ちた外套が、瞬時に炎に包まれた。

この炎は、簡単には消えない。一度食らいついたら、宿主を燃やし尽くすまで炎上するのだ。そうになると、長くは保たない。いずれ限界が来る、この炎の中では。

「どこへ行っても無駄だ！ 来やがれ、炭にしてやる！」
声が近づく。網膜スクリーンに投影した光点が告げる。

追い詰められていた。炎が退路を塞いで、逃げ場が塞がれていた。温道龍の影——熱の揺らめきの中、前方に霞んでいる。時刻表示のクレジットと、立体格子で示された見取り図。

炎が割れた。七尺近い巨体が立ちはだかる。

温道龍、拳打——低い体勢から崩拳を打つ。胸骨に突き刺さる——肋骨がたわむ。心臓に衝撃を受けつつ、踏み堪える。口の中に血反吐溢れさせる——鉄の味。濃縮された人工血球。レスピロサイト珪素を基調とした血漿が、喉を満たした。

膝を落とす。下半身の力が消失する。温道龍の炎掌。差し出す。昏い砲口——虚無が覗く。

吐き出す、呼吸。血と共に。気を込めた。踏み出し、肘打ちを叩きつける。温道龍の胴体——防具の亀裂に向けて。

防具が砕ける——さらに叩きこむ、銃撃。鋼刃弾が膚を貫き、肉を思っ様食い破った。

どす黒い血が滴る。もう一度、狙いをつける。
「小僧」

温道龍——苦悶の表情。拳を放つ。李聖鬼、体を開いて逃れる。左方から、蹴りが飛んできた。死角から温道龍の右脚、まともに喰らう——吹っ飛んだ。壁に追いやられる。

眼前に、炎掌が迫った。砲身が焼ける。咄嗟に回避行動を取る。

瞬間、火炎が爆ぜた。

楼閣——頭一つ飛び出た塔の屋根にいた。赤茶けた瓦の上に立ち、孔飛連は下界を臨んだ。昇る黒煙を確認、火の粉が弾けて、紫の炎色が闇を照らしている。熱を含む風、頬を撫でた。

獣の咆哮めいた銃声——李聖鬼の牙狗。李聖鬼と温道龍——死合、闘う様を想像する。炎掌と銃では、どちらが有利か明らかだった。火力の差——その差を埋めるものを、李聖鬼が持っているというわけでもない。

黒煙の向こう側に在る、宝石を散りばめた港湾のビル。細く青白い光——レーザー光。ホログラムが、電灰網が示す映像と重なった。路地裏に、玲花の姿を見た。大通りを挟み、建物の陰に身を潜め、燃える廃墟を伺う。

李聖鬼が玲花に——ガイノイドに固執する理由。狂気を抱くかのような振る舞い。何が李聖鬼を駆り立てるのか。

推測——ただ色を好むのではなく、翡翠色の瞳をした少女型アンドロイドに、特別な感情を抱いているかのようにも見える。玲花——有機ガイノイド。培養膚で女体を再現することで、リアルに限りなく近づいた駆体。

”亡霊”の細胞——朴水晶。李聖鬼と同郷の少女。十年前の紛争——平安北道にて命を落とした、文字通りの亡霊——幽鬼。
「なるほど」

疑念が確信となる。

薄く目を開けて、睥睨した。昏い瞳が、見据える。炎の先。

電灰の視覚情報、GPSを起動する——エラー。黒煙の向こう側の、都市の電源——LEDの灯が、順番に潰えてゆく。ひとつひとつ、蝟燭の火を吹き消すような儚さを以って。

停電。都市が衰弱し、死にゆくように、灯した明かりが明滅し、消えた。

「電灰が消えるか」

空を睨んで呟く。

膚が爛れていた。火炎を浴びた右半面が焼け、ケロイド状になっている。溶けた組織は、城砦の壁を思わせた。人工血球が傷から浸み出して修復する——血液が蠢く、蟲が這い回るように。

息を吐く——吸い込む。濃縮された人工血球でも間に合わない酸素循環。もっとも、濃縮された血液でなければ、酸素を失って斃れていたと思われる。

室内を覗きこんだ。

炎の中——温道龍が徘徊する。李聖鬼を探していた。GPSで位置を割り出せば済む話だ——常に繋がり、管理するシステム——偏在する情報。その偏在が、機能していなかった。

電灰が、停止していた。

視神経に写る電灰の視覚情報——GPS、格子状の立体構造、3D画面。バーチャルな組織、情報投入。当たり前に存在する情報が、網膜に写らないという、異常事態。半強制的に流入される情報の渦が、このとき既に消えていた。供給多寡によるパンク、あるいは故障——何ものかの侵入？

「糞ッ」

温道龍——悪態をつく。苛立っているようにも見えた。情報に頼って、自らの感覚を磨くことを怠ったつけ。

電灰が何故停まったのか、今はそのことを考えるべきではない。電灰が潰えたということは、李聖鬼を縛るものが無くなったということ。ユビキタスは個人を束縛するものでもある。

壁伝いに、走った。温道龍から遠ざかりつつ、背後に回った。

「どこにいる、糞野郎……」

温道龍、悪態をつく。李聖鬼の位置を特定できないようだった。階段の陰に隠れた。左の銃の、弾倉をつがえる。身を乗り出して様子をうかがう、温道龍の背中が見えた。ここから先は各々の技術が物を言う。テクノロジーを脱ぎ捨てた、生身の人間としての立ち

合いだ。

炎掌は構えてから撃つまで、時間差がある。おそらくは燃烧体に一度点火する必要があるのか、あるいは銃身を冷却するためかもしれない。いずれにしても、撃ち出しは牙狗の方が早い。

息を吐いた。体内から、空気を絞り出す。下腹に力が満ちた。意を決して、飛び出した。

まっすぐ、温道龍のもとへ。

「そこか！」

温道龍、振り向く。炎掌を構えた。

牙狗をつける。筋肉ではない、脳髓を狙う。

銃声が響いた。一拍置いて、炎が生み出された。

照準の先、鋼刃弾が温道龍の額と口腔に吸い込まれるのを確認した。温道龍の禿頭が弾け、殴られたように仰け反った。

次の瞬間、感じたのは灼熱だった。左手の先、火球が触れる。たちまち手が火焰を纏う。牙狗を溶かし、膚を焼いた。

炎が駆け上がる。李聖鬼は右の銃を捨て、ナイフを抜いた。単分子のダガーナイフ、左肩に当て、腕を切り落とした。炎が体を包むよりも先に。

果たして李聖鬼の左腕は、金属と蛋白の塊——廃棄物と化した。

床に落ちた腕、銃身とチタンの骨が熱で溶けて半液状になっていた。鉄が溶解するように。

切断面から血が吹き出していた。右手で圧迫する。しばらくしたら、血が凝固し、流血は止まった。痛みは感じたが、炎の熱さの方が勝った。ナイフを納め、銃を拾う。そして温道龍を見た。

温道龍の額に弾痕が刻まれている。口から入った弾は後頭部に貫通していた。即死、だったのだろう。目を見開いたまま死んでいた。天井の一部が崩れた。炎は、建物全体を包んでいた。銃を納め、李聖鬼は窓から飛び降りた。その直後、背後で天井が崩れ落ちるのを聞いた。温道龍の骸も押し潰す。

三階から地面に着地。雨は止んでいた。代わりに風が吹いている。

おそろしく冷たい。全身に浮き出た冷や汗と脂汗が、そう感じさせるのだろうか。

通りが騒がしいのに気づいた。黒山の人だかりができている。警官隊と、チベット人らしき異民族の集団がぶつかっていた。

「暴動か？」

唐突に光が弾ける——建物の向こう側。騒擾と共に投げ込まれる火炎瓶。地面に当たり、炎上する。狂ったように躍る光の渦に、機銃掃射の断続的な銃声が重なった。

デモ隊の一人が手提げ鞆を投げた。警官たちの中にとびこんだ、途端。爆発した。本格的な暴動、ふと見れば都市のあちこちに火の手が上がっていた。黒煙が立ち上っている。

喧噪、怒号、掠奪、爆音——飛び交う火炎瓶と銃弾。電化製品を抱えた男が、通りを駆けて行くのが見えた。

「玲花！」

叫んだ。唯一の存在意義。通りを下り、探す。

玲花は路地裏にいた。膝を抱えて、座り込んでいる。

「玲花」

呼びかけると、顔を上げた。瞠目し、李聖鬼の左腕を見ている。

「聖鬼、どうしたのその腕」

「何でもない、行くぞ」

「何でもないなんてこと……」

玲花は戸惑っているようだった。李聖鬼が傷ついた理由を知りたがっていた。説明する、つもりはない。李聖鬼は、玲花の手を引いた。

暴動はまだ、続いている。

拾肆：翠緑追憶

「システムに侵入されたわ」

毛蘭は端末の液晶を見て言った。

「それは昨日の？」

「漢電子のサーバと、発電所のシステムに干渉。都市機能を一時的に麻痺させた。三時間後に復旧したけど、システムダウンに乗じて暴動があちこちで起きた。障壁をすり抜けられるなんて」

自嘲して、毛蘭は端末を閉じた。

「それにしても、何で暴動なんか」

毛蘭、呟く。孔飛連が答えた。

「二等以下の市民には、DNAタグがインプラントされていてしまっ
ね。暴動などすれば、たちまち当局に特定されてしまう。電灰のシ
ステムが落ちたとなれば、その心配もないというので」

「なるほどね」

毛蘭、吐き捨てた。暴動が不快なのではない、侵入を許した自分
自身に怒りを感じていた。それと、もう一つ。

「で、李聖鬼の行方は知れないと」

今度は孔飛連が、深く嘆息する。

「市北で温大人と交戦した後は、分かりません。遺体は発見できま
せんでした。電灰のシステムが切れ、その混乱に乗じて逃げたと思
われます」

「システムはもう、復旧しているけど？」

「現場から李大人の左腕だけ、見つけました。炎掌にやられて、原
型は留めていませんでしたが。李大人のタグは左腕に埋め込まれて
いる、追跡は不可能ですね」

「炎掌って何よ」

「温大人の武装ですよ。ナトリウムの炎を打ち出すものですが、暗
殺には向かないので組織に入ってから一度も使っていません。わ

たしも昔一度、見たきりです」

孔飛連は肩を竦めた。戯れとも諦めともつかない微笑で。ただ温道龍の死をそれほど大事と考えていないようだった。

「ああ、そう。でかい口叩いても腕の一本ね、あの男。図体の割には可愛い炎だこと」

毛蘭も、それほど関心は無い。自然、温道龍のことは、そこで終わりになった。

「侵入したのは”亡霊”としても……」

「非合法の細胞供給源は粗方断ちました。これで”亡霊”が現れるとなると、まだ非認可の細胞が市内に存在するということになりますね」

「それを断たなければ意味がない、か」

窓の外に、生体エンジン式の空中艦艇が流れていた。武装警察の軍事ヘリ、装甲者車両。都市は今、厳戒態勢にある。

「警察より先に見つけないね。漢電子も煩いし」

「先に見つけない、のは別の理由じゃないですか？」

阿宮がからかうように言った。睨みつけておいて、続けた。

「それで、一緒に逃げたってガイノイドは」

「玲花、と呼ばれていたそうですが。件の売春宿でも、人気は高かったみたいです。李大人が鼻屑にしていた」

ちくりと胸が痛んだ。小さな棘が引つかかった感じ。李聖鬼が執着していたセクサロイド——玲花、という名前が胸の内に響いた。

「案外、そのガイノイドじゃないですか？」 亡霊の基となった細胞」

と阿宮。

「もしそうなら、玲花とやらの細胞を調べてみましょうよ。」 亡霊の——朴水晶の塩基と一致すれば、クロでしょう」

「何がよ」

「ですか、李大人がそのまま、”亡霊”の操り主ということです。宿に問い合わせて、セクサロイドの細胞を手に入れましょう。それ

と、”亡霊”のパターンを照合すれば――」

だん、と音がした。机が揺れて、卓上のカップが倒れた。何事かと思ったが、それが自分の拳によるものだ気づいた。我知らず、叩きつけていた。

しん、と静まり返った。毛蘭は咳払いをして

「とにかく、孔飛連。あんたは李聖鬼の搜索をして。あたしは”亡霊”の発信源を特定するから」

「特定って、どうやって？」

阿宮が不思議そうに見上げる。不安な色が目に浮かんでいた。

「神経を接続して、あたしが電灰上で直接”亡霊”と接触する」

「神経ならいつも繋いでいるじゃないですか、サイバー化ってそういうことじゃないんですか？」

「そうね。ただ、より深く潜るには軽い昏睡状態になる必要があるわ。”亡霊”と直接触れることで、元となる端末につながる」

「危険じゃありません？ 神経の接続を、より深くするということでしょう」

孔飛連。口で言うほど心配そうではない。

「どうってことないよ、北京では何度もやってきたことだし。孔飛連はその玲花という娘の細胞、採取して」

「いやでも、現場に残っているか」

「毛髪とかならあるでしょう。宿に言つて、北京の名を出せばすぐに差し出すわよ。阿宮はそれを解析して。あたしは準備をするから」
それだけ言つと、毛蘭は席を立った。

「あとお願い」

阿宮が後ろから何か言ってくるのも答えず、毛蘭はオフィスを出た。しばらく一人になりたかった。エレベータに乗り込み、地下駐車場に降りる。

車に乗り込んだ。

ハンドルを握ったまま、視線を空に漂わせていた。胸の内に去来する、いくつもの単語――”亡霊”の細胞、朴水晶。李聖鬼の同郷。

玲花。セクサロイド、李聖鬼が執心。温道龍を倒し、逃亡。ガイノイドを連れて。

事実の一つ一つが小さな針のように、ちくちくと突き刺さってゆく

マニピレータ
人工操作手の金属指を動かす。

握り、手を開き、また握る。繰り返した。失った左腕に代わり、機械性の義手を移植してみたものの、違和感は拭えなかった。動きがやけに、角張っている。生物独特のなめらかさは無い。多関節の機能、有配線の原始的な構造。

「ちゃんと動くか」

黄昌日が入ってきた。手に、茶色い古紙の包みを抱えている。

「急だったから、それしか用意できなかった。生物由来のバイオニック部品ではない、完全な電気式のロボットアーム。骨董品みたいなものだな」

「さしあたって、動けば良い」

李聖鬼は新たな手にグローブをはめた。コートを羽織ると、機械部分が完全に隠れた。

続いて黄昌日は、茶色い包みを卓に置いた。差し出す。李聖鬼は包みを解いた。

黒光りする、自動拳銃——ベルギー製FNブローニングハイパワー。牙狗がケースレス弾使用なのに対し、カートリッジに火薬を詰め込んだ薬夾式の弾を用いる。一世代前の銃。

「こいつはたまたまここにあったものだ。型は古いが、十分動く。本当は牙狗を手に入れたかったが、どこも警察の息がかかっていて動けない」

「使用弾は？」

「ちゃんと鋼刃弾が使える。ただし、薬夾式のな。装弾数はその分、劣る」

「贅沢は言ってられないか」

ブローニング拳銃の銃把を握った。

「骨董商になったつもりはないが」

カートリッジ弾の特性が、いくぶん重く感じた。スライドを引き、弾を装填する。撃鉄を下ろし、ホルスターに納めた。予備の弾倉は腰のベルトに。

「炎掌か」

李聖鬼が銃を仕舞うのへ、黄昌日が言った。

「埋め込み武装としては、かなり破壊的なものだ。あんなものを食らっておいで、腕の一本で済むとは」

「いくら武器が一級でも、使い手がダメなら効果は出ない」

「内乱を生き残った、武人が相手だった。使い手も一流だろう。そうまでして、なぜあの娘を守ろうとする」

「玲花は」

言いかけて、隣の部屋を見やった。寝台の上、玲花が眠っていた。人工知能の機能を保つため、度々休息をとる。機械でありながら、およそ機械らしくない行為。

「あのガイノイドに水晶を重ねること、そのこと自体は責められるものではない。きれいごとでは乗り切れないだろうからな。だが所詮、彼女は消耗される有機体だ。命をかける、必要などあるのか？ 人ならざるものは、決して人とはなり得ない」

ぐさりと突き刺さる言葉。沈黙した。

「それとも、お前の都合か。鎖を切って、自由になりたいお前の」
黄昌日の問いかけ。答えない。

「どうするつもりだ、李聖鬼」

「どのみち、戻ることはない」

漸く、李聖鬼は口を開いた。

「裏切り者は死あるのみだ。戻っても無意味、ならばこの街を出て、二度と戻らない」

「逃げられるというのか、ここから。お前のいる場所、お前の立場、タグを切り離れたとしても、一時しのぎに過ぎない。たとえ逃げたとして、その後どうするというのだ」

「後のことなど」

李聖鬼は立ち上がった。去り際に言った。

「ひとつ、頼みがある」

「お前の頼みなら、これまでいくらかでも聞いてきたがな」

「これが最後だ。船を用意してほしい」

フードの奥で光る、瞳。黄昌日は李聖鬼を見上げた。

「正気か」

「それ以外に選択肢は無い」

李聖鬼は懷から、札束を取り出した。

「口座が凍結されているから、現金で悪いがな。船は、それほど大
がかりなものでなくとも、黄海を渡ることができればよい」

「黄海か」

李聖鬼が首肯する。山東半島から黄海を横切れば、朝鮮半島に至る。

「朝鮮に行ったところで、お前が求める故郷はどこにもない」

「俺が求めなくともよい。ただ、あいつがな……」

言って、振り向く。李聖鬼は隣の部屋に。

玲花が横たわっていた。青い漢服に着替えた少女、体を胎児のよ
うに背を丸めて眠っていた。何かを生み出し、また何かに生まれ変
わろうとしている——そんな錯覚を抱かせる。

屈み込んで玲花の髪に触れた。絹糸めいたエナメル質が絡みつく。
玲花がちよつとだけ身じろぎした。

「起きろ、出かけるぞ」

耳元で呼びかけた。玲花の長い睫が持ち上がり、目を開けた。

「もう、行くの？」

「長居は無用だ」

「お店には？」

「出る必要はない」

「でもマスターや、他の娘たちが」

胸の内が疼いた。紅の血に沈むガイノイドたちの顔が、目に浮か

ぶ。

「もう、ここには戻らない」

「どうして？ あたしは戻っちゃいけないの？」

「そうじゃない、戻ることは出来ないんだ」

玲花の背中に手を伸ばした。抱き寄せる。いつも抱いているはずの躰、なのにいつもよりも脆く、か細いものに思えた。

「俺の故郷へ」

玲花の手が、李聖鬼の背中にふれた。柔い体温。機械の廃熱であるとしても、体温だと思った。

「この街を出る」

きつく抱きしめた。折れてしまいそうな、柳の腰を。

「俺と来てくれるか」

玲花は答えなかった。それを是と捉えた。

戸口に黄が立っていた。

「そのの、裏だ」

黄昌日が指さす先。隠し扉のある場所。

「船は手配する。港にたどり着いたら、連絡しろ。電灰は検閲をかけられるから、これで」

言つと、黄昌日は携帯端末を差し出した。

「専用回線だ。電灰を介さない、原始的な無線。それでも、十分届く」

「すまん」

端末を受け取る。李聖鬼は玲花の手を取った。

すぐに背を向けたので、黄昌日がどんな顔をしているのかわからなかった。諦めているのか、それとも予測していたのか——黄昌日は何も言わなかった。

隠し通路——下水道につながっていた。廃棄物の臭気、汚水の湿気。まるで電灰の海のごとき混沌があった。そして暗闇。玲花の手を引き、フラッシュライトの光を頼りに進む。

二時間ほど歩いた。足が、鉛のように重くなっていた。温道龍と

交戦した際、血を失いすぎた。疲労が全身をむしばんで行く。

「李聖鬼、平気？」

玲花がのぞき込んでくる。誰かを「気にかける」という行為——最初からプログラムされない、疑似的なもの。人工知能の学習プログラムか、あるいは。

「何でもない」

「何でもなくない。あなた、疲れている」

セクサロイドの機能——疲労物質の計量。誰かの膚に触れ、健康状態を推し量る。バイオセンサの機能。

「お前に誤魔化しは効かないか」

息を吐きつつ、座れる場所を探した。階段を登り、なるべく水から遠いところに腰を降ろす。

「聖鬼、あんまり無理しないで」

「俺を心配しているのか？」

「心配って何のこと？」

「今のお前が抱いている気持ちだ。氣遣うこと、相手を考えるってこのことをいう」

「気持ちって、良くわからない。でも、あなたが疲れていることはわかる」

玲花は李聖鬼の隣に座り、身を寄せた。薄い肩と無骨な肩が触れあう。触れた膚から、こそばゆいような微熱。冷たい壁や地面と相殺する。

「李聖鬼、あたしは何をしたらいい？」

玲花が訊くのへ、

「何をってどういうことだ？」

「あなたの疲れをとるのに、あたしに何ができる？」

少しだけ驚いた。与えること、与えられることを当然とし、自らは常に受け身となる——優秀な姓玩人形は、常にそのようにプログラムされている。積極的に意志を示すなど——

「どうする？ いつもみたいにすればいい？」

「遠慮しておこう。ますます体力を消耗してしまう」

言いながら、自分が笑っているのに気づいた。ここ十年、笑ったことなどなかった。おかしいともうれしいとも、そんな感覚すら捨て去った気でいたのに。

「玲花、お前は電灰で歌を覚えたと言ったな」

ふと、思い出す。玲花が小首を傾げ、訊いた。

「歌が御所望？」

「いや、訊いてみただけだ」

襟元を立てた。首筋に入り込む冷気を防ぐ。

「歌えば疲れは取れるの？ 良く、眠れる？」

「そういう効果はあるとは聞いた事があるが、お前が果たして歌うという行為を理解しているかどうか」

「出来るよ」

玲花が唇を開いた。息を吸い込むのに、小さな胸が上下した。まるで息を吸い込むように。

水音に、玲花の声が重ねられた。

異国の歌だった。ゆるやかな、流れるような旋律。子守歌のようだった。

儚げで、紡がれた空間に溶けてしまいそうで——しかして揺るがず、か細い中にも力強い軸を据えていた。これが、玲花の歌なのだと思うた。

歌声に抱かれ、暫し眠りに就いた。

初めに抱いた虚像——故郷の残像、そこに李聖鬼がいた。

生まれたのは朝鮮の平安北道。鉄山群チヨルサングンにある名も無き山村——独

裁国家の下、貧しい家に生まれ育った。農民として生きて、土に帰る運命。幼い頃から、それを疑問に思ったことはなかった。

朴水晶は、村長の一人娘だった。李聖鬼とは幼なじみで、物心ついたときから一緒にいた。李聖鬼より、四歳年上で、李聖鬼は朴水晶を姉のように慕っていた。

水晶には、異邦人の血が流れていた。膚は真珠めいて白く、透き通っていた。そして、左目——翡翠色に輝く目は、明らかに異人の特徴を帯びていた。それ故に言い寄る男も多く、また反面言われなき中傷に晒されることも多かった。水晶はそのことを苦にしていた。だろつが、李聖鬼の前ではそれを出さなかった。本人はそれほど苦にしていない、と幼い頃の李聖鬼は思っていた。

気づいたのは、李聖鬼が七つの頃だった。

人知れず、泣いている水晶を見た。村のはずれで、水晶は声を殺して、木に顔を押しつけて肩を奮わせてていた。

理解が及ばないことは無い、わからないはずが無い——この世の理など知らないといえ、童子に過ぎない水晶が耐えられることではないと。水晶は年上として、弟のような李聖鬼に涙を見せまいと、気丈に振る舞っていた——そう悟ったときに、己の無力を感じた。水晶の感じている重荷を見ることができない、自分を恥じた。

それから李聖鬼は、武術を志した。村はずれの大木を相手に突き、蹴り、拳や足刀を鍛えた。山河を駆け、岩石を投げ、思いつく限りのことはすべてやった。何が何でも、水晶を守りたい。その一心で、蹴り続けた。

思えば、恋慕だったのかもしれない。

水晶は常に、李聖鬼のことを「年の近い弟」として見ていた節がある。

水晶は李聖鬼を、道の外側に歩かせたことがなかった。車の通る側にいたのは、いつも水晶だった。自分が外側を歩く、と言うのに水晶は笑って、もう少し大きくなったらね、と言った。その「もう少し」が、ひどく先のことに思えた。いつになったら、そのもう少しが来るのか。背丈を追い抜いたら、声変わりをしたら、それとも一人で大人をやっつけることが出来るようになったら——

もう少しでも、待つてはいられなかった。精一杯背伸びをして、早く水晶を守ることが出来るように。弟から、一人の男になろうとしていたのかも、しれなかった。

だが、その日を迎えることは、無かった。

気づいたら目が覚めた。まどろみの中に見たもの。幼い頃、遠い記憶——夢にみた光景が、まだぼんやりとイメージとして残っている。

膝の上で、玲花が眠っていた。基本的に、外界からの刺激がなければセクサロイドは休止モードをとる。だが李聖鬼は、眠っているのだと思った。

あの日から、李聖鬼の道は途絶えた。抛り所とする、目的も失われた。水晶を守ることは叶わず、水晶の言う「もう少し」は、永久に訪れない。

俺はもう、守ることはできない——絶望にも等しい事実。玲花を守ったつもり、そのことで、折れかかった心を支えている。水晶と同じ瞳、同じ膚、同じ遺伝子——たったそれだけの共通項。水晶を守れなかったことに対する、埋め合わせ。

そうではない、と言い聞かせる。足りないものを補完しているのではない、と。一方で、玲花を水晶の代わりとしているだけなのかもしれない、という思いもまた在った。結局自己の充足を得たいだけなのだ——玲花に水晶を重ねて。

あるいは、ここからただ逃れたいという一心で、玲花はただの言い訳に過ぎないのかもしれない。黄昌日の言うとおり、ただ組織から——この街から出たいがために、玲花を言い訳に使っているだけなのかもしれないと。

眠る玲花に触れた。

どこまでが真実で、どこまでが虚か。ヒト由来の蛋白質は、少女の軀の六割を占める。培養膚、疑似神経、人工脳すらも生体素子で成る。金属錯体、超分子のサイバー部品が大半を占める李聖鬼の身体とは違う。故郷では二人、李聖鬼と朴水晶——生身の間人同士として存在していた。人以外——不純な物体、武人としての身体は、紛争の後に手にしたものだ。生まれ持った身体を捨て、ナノマシン

による金属導入。生体素子で電灰とつながり、拡張する感覚を、現実と虚像の狭間に置く。人というよりも、一個のコンピュータになった気分晒されている。

ならば玲花はどうなのか。ヒト由来の生体、ほとんど人と変わらない。本当にただの機械であるならば、李聖鬼につき従うことなどあるだろうか。願望を、口にするだろうか。それらも、全て予定されたプログラムに過ぎないのか。

答えのない、ルーティンな問いを続ける。空転する思いを抱いて網膜の裏が瞬いた。電灰の情報が拡がる、配列式と相補性の曼陀羅。李聖鬼は目を閉じた。グラフィックの海に浸る。

拾伍：雪灰想飛

膚を刺激する、神経接続。ささくれだった、信号の波。間断なく飛び交って、弾け、消滅する、小衛星群の如く——情報の爆発を観測する。油膜状の視覚情報。意識の周縁から、高圧的な何かが押し寄せてくる。紡錘体、緑色のマトリックス——毛蘭は小さく、悲鳴を上げそうになった。

ヘッドセットを外して、身を起こした。

汗に、濡れていた。冷たい汗——ある種の、命の危機を感じたときのものだ。全回転の、吐き気を催すような浮遊感に浸され、喉が干からびて張り付いていた。

「少し、休んだらどうですか」

阿宮が電気を点けた。暗室は、分子演算の装置で埋め尽くされたコンピュータルーム。無配線のDNA装置は、黒っぽい棺桶のような外観をしている。そこから唯一延びるケーブルに繋がり、電灰に意識を投じる。そんな作業を、もう三日、繰り返していた。温道龍の死、李聖鬼の逃亡、“亡霊”の侵入、暴動——たった一夜のことが与えた打撃を、毛蘭一人で埋めようとしていた。“亡霊”の搜索、それこそが至上命題。

阿宮の報告——電子ドラッグの流出先。江南、果ては台湾からの闇の道が存在する。電灰が停止した数時間、国境近くで警察軍と過激派の衝突が、数度に渡って起こったということ。

孔飛連の報告——李聖鬼を追う。未だ、成果は得られず。市内五百二十カ所の防犯カメラのデータを、北京の名の下に監視するも、望み薄。ただし、港付近で小型船をチャーターしている者がいたという。目的は不明。

老犬の判断——裏切り者には死を。国家の安全を脅かすものは排除する——“亡霊”も、李聖鬼も。

漢電子の重役——早く何とかしろ。

「あー、もう。面倒だわ」

できれば全て投げ出してやりたい、とも思った。李聖鬼のことも、”亡霊”のことも。そうしないのは、北京への忠義などではなく、意地のようなものだ。

「もうひとつ、わかったことがあります」

「何よ」

コーヒーカップに口を付けかけて、相当ぬるくなっているのに気づいた。カップを脇に押しやる。

「李聖鬼が連れ去ったガイノイドについて、わかりました」

途端、心臓が跳ね上がるのを感じた。センサの心拍数だけが、急速に上昇する——身体の内側がざわめきだす。

「それで、どうなったの？」

なるべく外に出さないようにと努める。阿宮に悟られまいとした

——動揺を。

「あの……玲花とか言いましたっけ、その細胞を回収。遺伝情報を照合した結果、”亡霊”のコードと一致しました。これで、”亡霊”の細胞の出所が判明しましたね」

やはりというべきなのか、毛蘭は深くため息をついた。

「これではつきりしましたね。李聖鬼が、”亡霊”に関わっているということ。李聖鬼自身が作り出したものではないにせよ、彼がおそらく細胞を運んでいたのでしょう。ガイノイドに心奪われるなんておかしいと思ったら」

阿宮はやや興奮気味の口調で言った。

「心なしか、嬉しそうね。あんた」

「ようやく尻尾をつかんだわけですから。李聖鬼が組織を裏切ったのも、きつとそういう理由なわけでしょう」

「まだ裏切ったってわけじゃ……」

「完璧に、そうじゃないでか。仲間を殺してまで」

阿宮はここ数日で、李聖鬼、と呼ぶようになった。敬意を示す必要はない、という明確な意志。

「あいつは仲間とか思っ てないよ、最初から。温道龍だけでなく、あたしや孔飛連もそう。あんたもね」

「そうですか？ 僕はそれでも」

「軽々しく口にするなってこと。お人好しには、甘くないよ。ここは」

平和ボケは日本人の習性か——もともと、阿宮はこの国で生まれ育った。非情になるべきところはどこか、わかっている。その証として、今まで「仲間」であつた李聖鬼を、追求しようとしている。甘いの、毛蘭自身ではないか——躊躇しているのは、己の心だ。

「まあ、問題なのは何故、朝鮮の細胞が北宋に流れてきたのか、です。十年前に死んだ少女のものが、ガイノイドの生体部品に使われているというのも疑問ですし」

「別に不思議なことじゃないよ。不正流出生体は、だいたいが外から入ってくるもんだ。特に朝鮮とか、あと満州あたりはね。多いよ」

「でも、十年前ですよ？」

「十年前、朝鮮で何があつたか。あんたも知っているでしょう」

「紛争ですか？ 最後は国連の介入を招いて、今も国連保護下でしたよね」

「そのとき、一部の中国兵が民間人に手を出したわけ。国際的に承認されている”中国”は北宋中華だけだから、北宋人って言うてもいいけど」

「手を出したというと」

「略奪や無差別な爆撃、虐殺。女は犯され、子供だろうと容赦はなかった。そして死体から細胞を掠め取って、高値で売りつける輩がいたそうよ。おそらく、そのうちの一つ」

「十年間も保存できるものですか？ そんなもの」

「保存ならば可能よ。あの型のガイノイドはかなり前に造られたもの。だから、朴水晶の塩基が一致したからと言って、玲花が”亡霊”の基となつたとは言えないでしょう」

「いや、でも」

阿宮はあからさまに不満な態度であつた。折角捕まえた手がかりを、むざむざあきらめる真似はしたくないらしい。

「李聖鬼が、”亡霊”に関わっているとは言えない。少なくとも、このデータだけでは」

「でも、裏切りは裏切りじゃないですか」

「もちろん、そっちはちゃんとやるけどさ」

”亡霊”に関わつていようといまいと、組織を裏切つたものは死の制裁を――北京政府の国策。漢人たちの社会は、常に華夷秩序――自らを中華に高めるべき。そのために、不穏分子は即刻排除するという秩序、掟。純然たる血筋の維持を第一とする、近親姦にも似た内向きの繁栄。

「それに、李聖鬼は命令違反を犯して、ガイノイドを連れ出して逃亡したのですから。これはもう、確定じゃないですか？」

「”亡霊”現象は、なにも青島ばかりで見られたことじゃない。李聖鬼が連れ出したのは、別の理由かもしれないでしょう？」

「何故それほど、李聖鬼を庇うのですか？」

「何故それほど、李聖鬼を下手人に仕立てたいの？」

逆に質問を返した。言葉に詰まつたように、阿宮は黙つた。

「李聖鬼が下手人であるという可能性も、あるかもしれない。けれど、その思いこみばかり先行しては、本来の黒幕を見落とすことになる」

阿宮は憮然――深い憤りをかみ殺したような渋面。

「では、李聖鬼が犯人ではないと、あなたは言い切れるのですか？」

「あんたよりは付き合ひ、長いからね。わからないでもない、あいつの考えていること」

「分かる？ 裏切つた理由も？」

「少なくとも、李聖鬼は組織や北京に忠誠を誓つたりはしていない。ただ、武人として造り替えられたものにとって、他に受け皿がなかっただけで。あいつにとって、ここは忠義を尽くす場所じゃなかった」

「だからといって、見過ごされるわけじゃないでしょう。いいですよ、毛さんが嫌でもどのみちあの人はとらえられ、殺される」

至極当然という口振り。それが真理であるかのように。

「任務でしょう、仕事でしょう。だったら、私情を差し挟むべきでは」

「黙りなよ、阿宮」

ついに、吐き出した。阿宮を叱るというよりも、苛立ちやわだかまりが暴発したようだった。

「僕は孔大人の報告を待ちます」

阿宮は姿勢を正していった。部屋を出る。

毛蘭はヘッドセットをとった。手段ならば、いくらでもとれる。

電灰と接続して、李聖鬼を、”亡霊”を検索する。その後、どうするか。

一つの解——”亡霊”を追い、李聖鬼を始末する。

一つの解——”亡霊”との関わりを疑い、李聖鬼を追跡する。

あるいは全く別の結末が、存在するのかもしれない。

「李聖鬼」

つぶやいた。口にした瞬間から、虚空に溶けてゆく印象だった。

イ・ソンギ
「李聖鬼」

再び呼ぶ。朝鮮読み。同じ文字、違う名前。毛蘭の知らない李聖

鬼が、確かにある。

目を閉じた。

潮風が、香ってくる。故郷にはなかったにおい、海が近いことを知る。

港湾部に程近い朝鮮街。ハングルの看板と屋台、建築中のビルは解剖された遺体を思わせる。孔飛連が生まれた瀋陽にも、朝鮮街があった。朝鮮族が多く、漢語よりもハングルの方が多く溢れていた。故郷に比べれば、随分と寂れているようにも写る。人通りは、まばらだ。

城砦の向こう側——黒く聳えるビル群は、街と街を隔てる巨大な城郭の役目を成している。ここで生まれ育ったものが、港湾のビルに行く事はない。石の牙城で生まれ、コンクリの中で死んでゆく。まるでそれが自然の摂理であるかのような、法則めいたものですらある。瀋陽、青島——日本。

その法則を打ち破ることを、目的としていた。否定し、抗い、決して覆せないもの——圧力を跳ねのけることが出来る力を求める。孔飛連にとつての力は、傾きかけたストリートや、荒廃した朝鮮人たちの街に存在していた。筈だった。

路地裏——建築途中のビル。工事中の立て札を無視して中に入る。目的の人物——紺色の背広。痩せぎすの、卑屈そうな小男がいた。「こんな所に呼び出すなんて、どういう神経してんだ孔飛連？ 支那人どもの手抜き工事に巻き込まれたら、一生恨むぜ」

下卑た声。こちらの出方次第でいくらでも変わるといふ意図が滲む。相手が強ければへりくだり、弱ければつけあがるといふ種類の、卑近な人間。

「確認したいことがあります。細胞の出所がどこなのか、そしてそれは意図したものなのか、ということですよ」

「答える義務はねえな、お前さんにや、関わりがない。末端の兵士が知っていていい情報と、よくない情報がある。まして、雇われの武人に教えることなど」

「必要な情報は共有し、反映する。そうでないと、現場は混乱しますよ、日王の使いの方」

日王、と発言するに、男の眉間が険しくなった。

「細胞の出所は朝鮮動乱——そのとき持ち去られたもの。市北の色町には、そのときの細胞が転がっている。それも知つての事ですか」「生きた人間から取つてはいねえよ。そんなこと、ためえが気にしてどうすんだ？」

ひどく崩れた北京語——聞き取りづらい。この男にはふさわしいともいえる。黄ばんだ歯を見せて、男が醜悪にほくそ笑んだ。

「どつかでくたばった女の、動乱で死んだ女の細胞。どこぞで、抜けた髪の毛使うようなもんだ」

「ではもう一つ。選んだ細胞が、李聖鬼と同郷のものであったということは意図していたものですか？」

「ノーコメントだ。必要のない情報」

「朝鮮動乱の時の細胞は、大陸には流れていったもの。しかし、あの型のセクスロイドはあなたの国で造られたものでしょう。あなたの国の企業は、不正流出生体を用いているということになる。五年前、伊豆半島の政府実験施設が明るみになってから、生体の売買には制限が課せられたと聞きますが」

「それもノーコメントだ。我らには関係ない」

言い訳。自らは決して汚れないという驕りが、透けて見える。

「国境近くでの、武装警察との衝突。さらに江南政府の動き。中華の火種を突く真似をして、あなた方は後ろで高身の見物。良い御身分ですね」

「兵の分際でいちいち口答えをすんなよ、孔飛連。人のことよりもまず自分の足元を見な」

「だけど、これは明らかに国際法違反です」

「なら訴えてみるよ、国連にでも。もつとも、貴様は何も言えまいがな。故郷を失うのは、忍びなかるう？」

にんまりとほくそ笑む——弱みを掴んでいるという余裕。孔飛連は殴りかかりそうになるのを、堪えた。

「なかなか姑息な真似をしてくれる」

「体制を変えるには、多少の犠牲はつきものだ」

「変える？ 掻き乱すだけが、体制を打破することになるのですか。ただのテロだということを、解かっているでしょう」

「口が過ぎるぞ、支那人。あまり俺を怒らせんことだ、でないといきなり、白刃を抜いた。剣を、男の顎下につける。一瞬の事だった。」

「だから、この場所を選んだのですよ小日本人。^{シャオリーベン}ここであなたを刺

し貫いても、死体を隠す場所にはこと欠かない」

男の顔中から、脂汗が吹き出た。瞳の色が、怯えに変わる。

「それとわたしは満州人です。一緒にしないでもらいたいですね」

無言の圧力——動けば刺すという類の。声を押し殺した。

「……こんなことしてただで済むと、思っているのか」

男が呻いた。怯えは消えない、動くことも出来ない——孔飛連の剣はぴたりと喉につけられている。

「無論、最後の仕事が残っていますから」

孔飛連は剣を下ろした。男が安堵の溜息を洩らす。息を止めていたかのように、盛大に吐き出した。

「ともかく」

と取り繕って

「速やかに、細胞を処理しろよ。本当なら直ぐにでも処理されるはずだったのに、邪魔が入ったんだ。てめえらの上層のせいだな。あの朝鮮人に処理させず、お前が直接手を下せばこんな面倒なことにならなかったんだ」

「解かってますよ、責は負います」

「変な色気を出すんじゃないぞ」

恐怖を押し込めた声。孔飛連は剣先を下げた。

「故郷を思え、同胞を思え、孔飛連。貴様の故郷の未来、我らが握っていることを忘れるな」

男は舌打ちして闇に消えた。いつの間にか、夕闇が包んでいる。

雇い主は選べない、という好例——やりきれなさも覚える。だから考えないようにしていた。結果、李聖鬼と温道龍を失った。誰一人、殺さずに実行できれば——己の中の躊躇が、引き金となった。

ここまで来て、引き返すことは出来ない。

ビルを出て、端末を手にした。電話をかける。

受話口に出た人物——暫く無言。タイミングを計りかねているかのようだった。

漸次——

「例のこと、頼んだ」

重い口を開いたのは孔飛連のほうだった。受話口の相手は物も言わずに切った。

「さて、いよいよ、か」

視覚情報、ホログラム映像——虚の中に実が咲く。

端末を閉じた。その瞬間。網膜に映し出された光触媒が立ち消えた。城砦から洩れる光、電灯——その向こう、港湾のビル群。ネオンライト、ホログラムが、段階的に消えて行く。

気づけば闇に包まれた。群青の空に、舞い降る灰。空気汚染、有機ナノマシン——おそらくこの街で、最後に目にするようになるであろう灰。

拾陸：白藍天蓋

鮮烈なイメージが焼きついた。光触媒の海、網膜の裏が、情報の爆発を捉えた感覚。”亡霊”——幾つもの影、電灰の中に現れて、消えた。

何が起ったか、疑問を感じる暇もない。毛蘭の背筋に、電流が走った。刺激が一気に、脳天から脊髄を駆ける感覚。神経がささくれだつ。

暗転。次に、視界一杯に広がる行列式が突き刺さった。脳内に直接叩き込まれる印象。

血流値が異常を示していた。情報の多寡が、体内に負担をかけている。リンクを切ろうとするが、体が思うように動かない。そのうち、ヘッドセットの光触媒がぐにやりと歪み、変則な像を生み出した。

離れては繋がる、不定形のノイズが暗赤色に映える。彎曲する。異常に膨れ上がった電子波形が、神経組織を蝕む印象があった。

悲鳴が聞こえた。それが自分自身の声だと気づいた。蜚るような痛覚、網膜を刺激する視覚、不愉快な蟲が体中を駆け巡る。

電灰から逃れようとした。手が動かない。神経が機能していないのだと知る。電灰に吞まれ始めていた。

やめて——！

誰にでも無く、許しを乞うかのような叫び。およそ自分のものとは思えない、絞り出すような断末魔を思わせる。電灰に漂う全てが、毛蘭の体の中に飛び込んでくる錯覚に陥った。

視界が暗転。

ふと、苦痛から解放された。唐突に、体を縛るものから解き放たれた感じがしていた。

浮遊感。足下がおぼつかない。上下左右の別すらなく、体中が回っていた。体感覚すら狂ってしまったのか、と思っていると、ふい

に瞼に光が差し込んできた。暖かみがある、柔らかな光——陽の光すら差し込まない青島では、あり得ない光量。

目を開いた。

毛蘭は、野の中に立っていた。一面が緑、人工に塗られたものではない天然色。柔らかな草の感覚、もう長いこと触れていない澄んだ空気。

空が広がっていた。久しく見ない、抜けるような青。あまりに広大で自分の立ち位置すら失わせる。しばらく、見とれていた。

遠くには山脈が連なっている。雲の中に突き出た、険しい尖端。

岩山の頂は、陽光を反射して青く光っていた。

電灰の見せるバーチャル映像なのか——圧倒的な現実感を伴う虚像を見せることなど、電灰の特性上難しいことではない。頬をなぞる風や、噓せかえるような草いきれ。五感を刺激する仮想現実、その中にいる。

何故、ここにいるのか——見覚えのある風景に思えた。生まれた故郷に、似ている気がした。周りは何もない草原かと思いきや、民家らしき建物が点在している。茅葺きの粗末な家。古井戸と家畜納屋。人影はない。

歩くと、地面を掴む感覚がする。実際に歩行しているのか、それとも仮想のものなのか。土においては、本物以上の実感を伴っている。

鬱蒼と木の生い茂る、森が目の前に現れた。木陰に、誰かがいる。歩み寄った。

年の頃、七、八歳の男の子だ。白い衣が、所々汚れて黒ずんでいた。

近づいてみると、それは血の痕だと知れた。

血は、少年の拳や臍から、流れている。拳足を、木に打ちつけていた。様にならない武術の形。打ち据えることに、皮が剥がれ、血が飛ぶ。それが、道衣に付着しているのだ。小さな手は、血まみれだった。取り付かれたように突き、蹴り、まるでそうすることしか

自分には許されないかのように――殴ることしか知らないといった風に見えた。少年にとって、充足するということはなく、殴ること、蹴ることによって己の手足が壊れることを厭わない。

「あんだ、何やって――」

手を伸ばしかけたとき、目の前を白い影が横切った。ふわりと、甘い香りが漂う――白梅香だった。

少女がいた。黒い髪をなびかせて、近づいた。

「聖鬼、またこんなことして」

鈴の音めいた声――少年より一回りほど歳が多い、ように見える。少年を後ろから抱き止めた。

少年――聖鬼と呼んでいた。李聖鬼のことか。

「手、怪我しているよ？ これ以上うち続けたら、あなたの手は使えなくなる」

「強くなれない手だったら、要らない。この程度で僕の手が潰れるなら、この手はそれまでだったってことだ。強くなるに値しない、役立たずだったまでだ。そうだったら僕が弱いから、潰れるだけだよ」

自分の手足も、自分自身すらも他事であるかのような口振りだった。使えなければ切り捨てる、悲壮感にも似た思いが透けて見える。「あら、でも手足がだめになったら強くなれないじゃない？」

少女は微笑を浮かべて切り替えした。少年はちよっと手を止めて、しばらく考えたのち、やがて自分の論理の矛盾に気づいたようだ。

「だからその、強くなるために叩くんだよ」

「でも、使えない手は要らないんでしょ？ それなら、もう強くなれないじゃない」

「え、つと……」

少年も自分で言うておいて訳が分からなくなったようだ。しきりに首を傾げている。少女はくすりと笑った。

「男の子なんだもの、強くなりたいんだよね。でも、聖鬼は背伸びしなくても、まだ時間はあるよ。そんなに急いで、手足を失うより

も、もつと時間をかけて強くなればいいじゃない」

「時間かけちゃダメなんだ、早く強くなりたい。そのために、ゆっくりなんかしてられない」

「どうしてそんなに急ぐの？」

「それは」

少女が訊くのへ、少年は言葉を濁した。理由を話したくないようだった。秘めた思い——何となく毛蘭は、少年の動機が分かる気がした。

「聖鬼、それなら強くなるためにいい方法があるわよ」

少女が言うのに、少年が見上げた。唇が何かを発する、前に。少女は少年と向き直った。

正面から、抱きすくめた。親鳥が羽毛で、雛を包むように、優しく。少年を胸に引き寄せた。

「な、なにを」

「まず、自分を大事にすること。そして、相手を思いやること。強くなりたいたなら、それが一番の近道よ」

「そんなん、弱い奴のやることじゃないか！」

少年がもがきながら言った。手足をばたつかせていたが本気で逃れようとは思っていないようだった。

「弱いからじゃない、強いってことはそれだけ何かを背負うってこと。いくら腕っ節が強くなっても、何も背負うことが出来ない人は、ただの乱暴者。あなたはそういう人に、ならないで」

「で、でもそんなことじゃ、水晶を」

「わたしのこと、心配してくれているのね。あなたは優しい、だからこそ、自分を大事にね」

柔らかな口調、静かに語りかける。語ることで自分の考えを押しつけようというものではなかった。語ることで、少年の中に何かを芽生えさせようとしていた。

少女の左目。翡翠色の、慈愛に満ちた光。

これは”亡霊”の——朴水晶の記憶なのだろうかという気がして

いた。記憶を基にした仮想現実——酷く現実的で、虚偽のものとの境が曖昧な——

あり得ないことだった。”亡霊”の基は細胞の一片にすぎない。脳以外の体組織にも、ニューロンは存在する。しかし、ニューロンは個々ではなく連結して、初めて記憶するものだ。細胞単体で、記憶することなど——。

ならばこれは、何なのか。

場面が切り替わった。

拾漆：血紅天蓋（前書き）

性的、暴力的表現あり。

拾漆：血紅天蓋

空が、朱に染まっていた。

黒煙が立ち上る——民家と森林が炎に包まれて、空を焦がしている。毛蘭は、戦場の中にいた。

地響き。砲雷と舞い上がる土煙。思わずしゃがみ込んだ。

戦車——UNの刻印。歩兵たち、朝鮮語の怒号。多脚砲台が火を噴く——迫撃砲。羽を広げた空艦艇の爆撃。轟音、兵たちが吹き飛んだ。国連の機甲化部隊——為す術もない。

目線の先。子供が二人走っていた。先ほどの少女が、李聖鬼の手を引いている。戦火をくぐり抜けて。励ましながら、声をかけながら、走っていた。

砲弾が飛来した。子供たちの前方に着弾、爆風に煽られて子供たちが飛ばされた。

朴水晶が斜面を転がってゆくのが見えた。毛蘭が駆け寄る。朴水晶——足に破片が刺さっていた。おびたらしい血。毛蘭は手を差し伸べた。

手が、朴水晶の体をすり抜けた。何度やっても、触れることはできない。声をかけても、朴水晶には聞こえないようだった。

これは仮想のものなのだ——こちらからは、接触することは叶わない。一方的に情報を送り込まれて、ただ生体内の分子コンピュータが処理をする。

「水晶！」

男の子の声。李聖鬼だ。

銃声——李聖鬼が崩れた。息をのむ。肩を掠めた。

「聖鬼、逃げて」

朴水晶の声——消え入りそう。

背後に、影が立った。振り向く。

スカイブルーの迷彩服——左胸に国連軍の徽章があった。顔立ち

は東洋系。兵たちは水晶を指さして何かを言っている。薄ら笑いを浮かべて、中国語で何かを言っていた。

一人の兵が、朴水晶の体を押さえつけた。二人が、脇から固定する。

何をするつもりか——瞬時に理解した。

朴水晶が叫んだ。上に乗った兵が、水晶の口を押さえた。衣服をはぎ取る。少女の、小振りな乳房が露わになる。兵たちが笑っている。

「やめろ」

李聖鬼がにじりよった。撃たれた足を引きずって、兵の一人に飛びかかった。兵はうるさそうに手を払う。李聖鬼はなおも止めようとする。

タン。乾いた銃声。李聖鬼が倒れた。兵の手には拳銃——銃口から煙。李聖鬼の脚に、銃弾が穿つ。朱色の血潮が大地を染めた。

朴水晶は抵抗していた。細い肩と首が、兵士の屈強な手に押さえつけられて、身動きがとれない。上に乗った兵士——衣服をまくり上げ、朴水晶の足を広げ、華奢な腰にのしかかる。

「やめろ……やめ、ろ」

李聖鬼が呻いていた。細い声。這いずり、血の跡が曳く。痛みと闘いながら、朴水晶の元へ行こうとしていた。

兵たちの下卑た笑い。黒くうごめく指が、朴水晶の肢体をまさぐる。獣のような影が、腰を抱え、立ち割り、無理矢理に擦じ込む。苦痛と汚辱、恐怖が緋い交ぜとなった朴水晶の表情。代わる代わる蹴られて、交わり、欲の捌け口とされる——李聖鬼の目の前で。

「やめろっ……」

やがて男たちは、朴水晶の体から離れた。満足したというように。朴水晶の裸体が、横たわっていた。

破瓜の血が、内股を濡らしていた。引きつけを起こしたように、朴水晶の表情は恐怖に固まっていた。締め付けられた首は、青紫色の痣が刻みつけられている。目を逸らした。

李聖鬼が、朴水晶の体にすがって泣いていた。そこまでだった。再び目の前が暗くなる。

記憶は、ここまで——朴水晶の意識はこの後、途絶えたのだ。暗闇のなかに、ぼうつと白い光点が浮かんた。徐々に人の形をつくり、”亡霊”の——朴水晶の姿になった。最後に見た、少女のままの姿。

「こいつはあんたが見せたのか？」

自分の声が震えているのに気づいた。怒りからのものか、恐怖からくるものか、判然としない。

頬を、涙が濡らしていた。同情ではない、この震えは踏みにじられた朴水晶の感情と同調しているのだと、気づいた。ただひたすらに哀しくて、涙が溢れてくる。泣くことも許されなかった朴水晶の分まで、流れ出ているかのように。

「あんたの記憶を元に、構成したの？ 電灰の中で、記憶を巨視的な映像として見せる術を学習したの？ 自己組織化のプログラムで、自らを拡張して」

”亡霊”は答えなかった。虚ろな瞳、翡翠の眼が揺れた。

「あんたは、あたしにこれを見せることで、自分の悲しみを共有させたかったんだろう。あたしに罪の意識を、植え付けるために。そうなんだろう？」

朴水晶の記憶——李聖鬼の記憶。朝鮮紛争で失ったもの。北宋の兵に、時代に奪われたもの。

”亡霊”が手を伸ばした。毛蘭の頬に触れ、涙を拭う仕草をする。触れられた膚が、かっとな熱を帯びた。

「ダメです」

男の声。それとともに、急に目の前が明るくなった。

暗色の檻から、放り出された錯覚を覚えた。上下が逆さまになる、自由落下の感触。すさまじい痛みが、蘇った。指先、足の先——膚が切り刻まれ、雫られたようだった。体の中が血で満たされるイメージ。

「大丈夫ですか？　あまりに”亡霊”とリンクしている時間が長かったのです、しばらくは体が動かないかもしれません」

逆光の中、薄目を開ける。

阿宮の姿。

「立てますか？」

手を差し出すのにも、縋りつくことなく、毛蘭は自力で立ち上がった。壁に手をつく。頭が割れるようだった。

「あんたが、止めたの？」

コードごと引き抜かれたヘッドセットを見た。阿宮が手を引っ込めて、肩を竦めた。

「”亡霊”は、神経に干渉する。痛みも、苦しみも。最初は、電子ドラッグと併用していたのですが、いつの間にか相手の神経を侵略するようになった」

「併用、って」

阿宮は、毛蘭が向かい合っていたコンピュータに向き、キーを叩いた。

「最初はただのグラフィックだった。それが、電灰から情報を仕入れ、段階的に知能を獲得していった。遺伝的アルゴリズムを与えられた”亡霊”は、知識階層のレベルを引き上げ、判断や行動、全てにおいて自らを高次のものに進化させ——”亡霊”は、僕の手になれないものとなった」

毛蘭のことを他所に話が進んでいる。自分の知らないところでストーリーが組み立てられている、感じがした。阿宮が自動送りの人形であるような印象を抱く。

「何それ、どういう事？　”亡霊”のこと、随分詳しいじゃない」「詳しいというか」

苦笑しつつ、阿宮は万年筆を取り出した。キャップを引き抜く。細い硝子管が、納まっていた。鞘に納まる剣と同じく——プラスチックのペン本体に収納されている。管の中に、透明な液が満たしていた。

「最後の細胞ですよ。これを基に、高次の知性体を造り出すには、この街ではここの施設を使うより他無かった。だから、この演算機を使わせていただきました」

「最後の、って」

喉が引つかかるような心地。言葉がうまく、出て来ない。

「あなたが悪いわけじゃありません。ここは、外に攻め入るには良いけど内に対しては甘いですからね。でも、あなたを騙していたことになる、そのことはお詫びします」

そう言っておきながら、全く悪びれる様子もない。万年筆を仕舞いこんだ。

「遺伝的アルゴリズム、ニューラルネット……人工知能を司る生体パーツが、独自に学習し、自らを教育するプログラム。生命が自己を設計するように、”亡霊”もまた自らを形成していった——電灰網の中で情報を拾い集め、自己進化の途を辿る。それは加速度的に増殖し、今では自分の意思で動くまでになった。もともと、人という所の知性まで獲得したのか定かではないですが」

阿宮の意図することを、計りかねていた。理解を超えたところで置き去りに、疎外感にも似た気分。

「あなたの神経に介入したのも、”亡霊”が見せた幻覚でしょう。あるいは、細胞の主が見せた記憶なのか、わかりませんが」

唯一つ言える事。北京が定めた敵は、仰々しいまでの仕掛けもなく、単体で潜み、人知れず攻撃を加えていた——組織の目を欺いて、組織の内部から。

「あんたが、”亡霊”を……」

「迷惑をかけるつもりじゃなかったんですがね。あなたが”亡霊”と直接繋がるなんて言い出すもので。止めても良かったのですがね。思いがけない告白。慄然とする。

「何者よ、あんた。どうやって組織に潜りこんだというんだよ」

「北京、青島、この国の内部に我々の仲間が存在します。三年前、本国からこの話が来た時にはすぐに飛びつきました。この仕事は僕

にしか出来ない、ってね。祖国を失って二等市民として生きるしかなかった僕に、あの人達は機会を与えてくれた。ここを出て、まだ見ぬ故郷の土を踏む。こんなコンクリと灰ばかりの街にいつまでもしがみついている気は、ありません」

「それで”亡霊”を作って電灰のシステムを落とし、暴動を誘発させて。姑息な手ばかり使う」

「直接手を下しているわけじゃありませんから、江南のテロよりよっぽど人道的ですよ」

「何が人道的よ。そうやって自分を一段高いところに置いて、汚れないつもりでいる。そんな奴が、道を説いたって説得力はないよ」
かすれた声。喉の奥に不快な膜が張っているように、それでいて

乾きが支配する。

「否定はしませんよ、僕はあなたのような正義を貫くつもりはありませんからね」

不意に阿宮の瞳の色が変わる。憂い、もしくは哀れみ——同情を含んだ目。まるで阿宮自身が、手の触れようがない、分厚い壁に阻まれた存在であるかのような錯覚を、抱かせる。

「あなたを利用して、申し訳ないと思っています。北京にも、僕のこととは伝わるでしょう。これ以上は迷惑、かけられませんから」
「待て、阿宮」

手を伸ばした瞬間、崩れ落ちた。阿宮の手が伸びて、毛蘭の体を支える。端末を叩いている割には、太く逞しい腕。

「しばらく動けないかもしれません。無理はなさらぬよう」
手を、離れた。

「阿宮！」

叫んだ瞬間、阿宮が立ち止まった——振り向くことはない。

「立場が違えば、手段も違う。けれど、少なくともあなたのことは、人間として尊敬していましたよ」

その一言——すべてが崩れる気配がした。不可逆な響き、もう以前には戻れないという予感。

扉が閉まる音。全てが拒絶される——立ち入ることが出来ない、と知る。

拾捌：白晶会鬼

地上へ——李聖鬼は玲花を引つ張りあげた。

海が近い。地元ヤクザから買い上げたＡＩボートが、港に停めてある。

玲花の手を握った。温もり、脈、柔い真綿のような力で握り返す幼い掌——壊れそうな骨格をやんわりと包む。

「どうしたの？ 手を握って」

玲花が不思議そうに見上げてくる。理解が及ばない表情。

「理由が要るか」

「要らない。あなたがそうしたい、というならば」

疑問を抱かない、無垢な瞳の色。純粹というよりも、無知でさえある。知能の拡張には、限界があるのだろうか、とも思った。あるいは、全て理解しての行動なのか。

降り積もる灰を踏みしめた。ナノマシンの残骸。墓標めいた建造物群が、快々として倦んだ都市の性格を現しているように感じられた。辺獄のような閉塞。褪せた都市の空間。電灰に上書きされなければ、色のあるものは少ない。その中であって、玲花の幽玄な佇まい——青い布地が膚に映える。

人ならざるは、いつまで経っても人となり得ない——

突き刺さる不文律。絶対の掟。李聖鬼と玲花を隔てるものは、物質以上に深い溝——人か、それ以外か。その違い。人で無いものに對して、ここまでの執着を抱くことは愚かなのか——

玲花のくるりとした瞳と向き合った。李聖鬼の意図を汲み取るうと考えている、ようにも見えた。若しくは、唐突に見つめられたことに対する疑念を抱いているのか。どちらにしても、玲花は一人で解を導き、新たに生み出すことができる。そのように出来ている。

網膜スクリーン——17:00。動き出す。玲花の手を引く。

目の前が、ぱっと明るくなった。光の粒子が、砂の集合体の如き

に遊動する。灰の中、人の形が浮かび上がった。白い膚、黒い髪——純白の韓服を纏う。翡翠色の眼球に写り込む、己が姿。

「お出ましか、”亡霊”」

少女の姿——朴水晶を象った。以前、邂逅した時よりもリアル——現実感を伴ったつくり。生身の肉体に接するかのような、危うさ。輪郭——鋭く、精緻。硝子細工のような線を描く。体温——息吹を得た、血色の通った膚。再現された生。

指先も、腰も、脚も、翡翠の眼も全て——朴水晶、だった。

刀。雁翅刀の煌き。右手に提げた刃。

「あんたは俺を赦さないだろうな、水晶」

”亡霊”——応えない。李聖鬼は続けた。

「俺はあんたの言うようには生きられなかった。あのときあんたを見棄てて、それ以来俺は耳を塞いで生きてきた。そうして目を逸らせば、楽だった。あんたの死に際が離れなければ、薬で誤魔化すことができた」

届いているのか、否か——可能性ではなく、願望に近い。”亡霊”が水晶であり、水晶に向かって話している——そうであって欲しいという、一人よがりな思い。

「俺は、あんたに顔向けは出来ない。あんたに殺されるのも、仕方ない。けど、それはもう少し待ってくれないか」

水晶の唇が動いた。”亡霊”が、何かを発する事などない。おそらくは目の錯覚。だが、李聖鬼には、”亡霊”が何かを訴えようとしているようにも写った。

「最後にやり残したことが、ある。そいつを片付けてから、報いは受ける。それまで」

雁翅刀が突きつけられた。神経が切り刻まれる感覚が蘇る。

玲花が手を握り返してきた。玲花にも見えているのか、不安げな面持ち。

”亡霊”が刀を下げた。す、っと唇が微笑を象った、ように見えた。”亡霊”——水晶が、笑いかけた。憂いや哀しみもない笑み——

―故郷で、最後に見たのはいつだっただろうか。そして。

刀が、剣先からさらさらと砂が崩れるように消えてゆくのを認めた。”亡霊”を構成するグラフィックが、融解する砂糖のように、粒子が溶けゆく。

「水晶！」

下半身から徐々に消えていった。笑みのまま。柔和な輪郭が、最後に残る。透明な線――霞みのように棚引いた。

手を伸ばしかける。輪郭が消える。

手を下ろした。求めてはならないと、悟る。これは決別であるのだと。自分の中に在り続けた、朴水晶の像をここで断ち切らなければならぬ――それが報いであると、解かっていた。

完全に、掻き消えた。灰色の背景が戻ってきた。

「聖鬼、電灰が……」

玲花が言うのに、気がついた。”亡霊”だけではない――網膜スクリーンに投影される、視覚情報の全てが、消えていた。港湾に目を向ける――企業のビルは黒く沈黙している。ネオンライト、ホログラム、LED。光を失った世界。

バグの存在――”亡霊”の侵入？　だが、今しがた”亡霊”は消えた。

「電灰は、機能を停止しました。もう、動くことはないでしょう」

背後から。細かい灰の中、人影が動いた。歩み寄り、男の姿を象り、やがて孔飛連となった。

「お久しぶりです、李大人」

孔飛連の慇懃な物腰――思わず身構えた。

「俺を追ってきたのか、貴様」

懐の銃を意識――孔飛連の、腰に佩いた剣を警戒する。

「組織は追わないですよ。”亡霊”の発信源は、北京によって直に封鎖されるでしょう」

「発信源？」

孔飛連が剣を抜いた。胸の前で水平に構えた。

「亡霊」の始末をつける、それがわたしに課せられた使命です。

”亡霊”を形作る細胞を処理——北京に知れる前に”

何を……”

いきなり、孔飛連が跳んだ。一足で間合いを詰める。

刺突。

切っ先が玲花の喉に伸びた。咄嗟に玲花を突き飛ばす——遠ざける、庇う。剣が、髪を散らした。

「何の真似だ」

「解かりませんか」

孔飛連、振り向いた。剣を払う、空間に銀色の三日月を描く、刃先。

「そのガイノイドを処理するのですよ。あなたも御存知の通り、朴水晶の細胞を用いた”亡霊”——その細胞の供給源を断つ”

低い体勢。沈みこみ、剣身に左手を沿わせる。

「”亡霊”を操っていたのは、貴様なのか」

「正確には、わたしは補佐に過ぎない。この街で最も進んだ分子演算機を使い、”亡霊”を狩ると見せかけて”亡霊”を操る者を守護する。それが、わたしに与えられた任務であり、動機であり続けた。毛大人や、あなたの目も欺いて”

補佐、ということとは。

「阿宮か」

肯定——深く頷く。

「どうして、玲花の細胞を」

「阿宮の背後にある組織——日王の軍隊。彼等が手に入れたものは、その少女と同型のガイノイドでした。朝鮮動乱で掠め取られた細胞は、この国だけで無く、アジア全域に広がっていた”

「それで、”亡霊”を造ったというのか。日王に手を貸したというのか、貴様」

「元々、この国に帰属意識などないですからね。わたしは漢人では

ないので」

さらに沈む。飛び込む体勢を取る。

李聖鬼は銃を抜いた。右手に牙狗、左手にブローニング拳銃。撃鉄起こす——シングルアクション。鋼刃弾を装填した。

「電灰を潰し、暴動を誘発する——火種を突けば、勝手に暴発します。民族問題、不当な扱いの市民。電灰によって管理され、ユビキタスに縛られた不穏分子を解き放つことで北宋の内部抗争に発展させる。日王の軍隊が、描いたシナリオです」

「お前はそれに乗ったのか。倭奴^{ウェノム}に利用されることを、自ら選んで

「仕方ないことですよ。異民族に、この国は救いの手を差し伸べてはくれない。それをしたのは、皮肉にも一番敵対していた日王だったのです」

「救いだ」と

「温道龍のような漢人は保護されますが、異民族は保証されない」

やおら、孔飛連の目が見開かれた。

細い瞼。その奥には、昏い双眸があった。眼球がそっくり無くなっているかのような、闇。あるいは眼窩そのもの。本当に眼球が無いのかとも思った。そうではなく、眼球の替わりに黒い球が埋め込まれている——視覚センサーだった。

「汚染物質。わたしは運よく、眼球を失うだけで済みました。しかし、今もわたしの故郷では、環境負荷に苦しむものがある。国は、ただ漢民族の純血性を保ちたいがために、異民族を見棄てた」

混沌として濁った両眼は、感情の奥底も見透かせない。黒曜石めいたセンサーは、果たして李聖鬼を見据え、視界に捉えるべく忙しく動いている。時折、黒球の端に灯る赤い点——唯一つの光。

「お前の故郷を救うと、日王が保証したのか？」

「いえ。ただ、この国を壊すと。そうすれば、何かが変わると思っていました。それも、わたしの思い込み、幻想でしたよ」

自嘲気味に笑う。人工の眼が揺れたように見えた。

「それでも、最後にその少女を始末しなければならぬ」

剣尖は玲花に向いていた。

「どいている」

そう言って李聖鬼は、玲花を背中側に隠した。

「李聖鬼、あなたまで巻き込むことはない。もともとあなたは被害者だ。この舞台から、降りることも選択できる」

「そうかい」

両の銃を向ける——引鉄に指をかける。照準の先に見据えた。

「降りない選択もある」

「そうですか……」

唐突に、光が爆ぜた。銃声より先に、剣閃が二重瞼の奥に突き刺さり、揺るがない切っ先が正確に貫いた。身を捻り、刺突を避ける——紙一重。

「でも、邪魔はさせません」

銃口を差し向けた。二連射。孔飛連、火線を掻い潜り、剣を水平に振り抜いた。眉間の蚯蚓腫れをなぞるように刻まれる、切創。飛び退き、腕を差し出す。そして銃撃。

「自ら、闘いに身を置くか——」

孔飛連が呟く声を、銃声が掻き消した。

拾玖：銀影閃刃

影、交わる。戟尺げきしゃくの間に入った。

銃口と剣先が触れ、甲高い金属音を奏でた。弾と剣先が耳掠め、膚を削り、髪を焦がす。互いに互いの攻撃を、危うい距離で見切り、かわし、流した。閃光がほとばしり、銃弾と剣が触れる度に鉄が火を噴き、瞬いては消える。発射炎と火花、緑と橙が鮮やかに咲き、金属音と銃声が耳元で哭く。

加速する刃、銃弾——交叉する火線、刃の白銀が照り映えた。

「あなたは死ななくても良い存在だ」

孔飛連——柔らかく、手首を切り返す。剣と腕が一体となったように、撓い、螺旋に廻転し決る。銃よりもより深く潜り、懐から貫く剣。李聖鬼は後退し、間合いの外に捌きつつ、銃撃を浴びせた。

「なのに、ガイノイドに命をかけるというのですか」

弾く、避ける——流れる舞踏を思わせた。孔飛連の眼球、紅の点ドットが明滅する。

「何も応えず、何も与えない、機械に」

「黙れ！」

咆哮——氣勢をかける。銃口を差し向け、三連、撃った。孔飛連、上体を逸らして銃弾を避ける。弾は残影に突き刺さり、背後の壁に着弾した。

孔飛連、続けざまに刺突を繰り出した。早い連撃——剣先が三叉に分かれたと錯覚する。銃身で剣を叩き落とし、体を転換させる。半身となり、背後に回った。

照準合わせる、二秒。両銃を同時に撃った。孔飛連は姿勢を低くし、倒れ込んで射線を避けた。また発砲。

ふいに、孔飛連の姿が消えた。

孔飛連の姿は頭上にあつた。高く舞う——鞘の、天馬の装飾が目に見える。李聖鬼の背後に降り立ち、刺突。身を振り、避ける。皮一

枚、斬られた。勢いをつけて、左足を軸に廻し蹴りを放つ。爪先が孔飛連の顎を掠め、蹴りが流れた。蹴り足を戻さずに、踵落としに変化させる。肩に当たり、孔飛連の体が、傾ぐ。

銃を差し向ける。同時に、孔飛連が剣をつけた。

切っ先は、李聖鬼の喉元にあつた。膚と剣は、わずかに一ミリ。銃と剣が交わつた状態で、止まつた。

両者を隔てるもの——空間にある、殺気。空気が質量を持つているかのような重圧が、互いを刺激した。次の瞬間には動くという、無言の警告。引鉄にかけた指先の、神経伝達を意識する。

息詰まる瞬間——どちらが先に仕掛け、また見切るのか。その鬨ぎ合い。膠着——水平にした剣の腹に灰が薄く積もるほどに。

ぴくりと、孔飛連の手が動いた。好機、反射的に牙狗の引鉄を引いた。

銃口の先、視界から孔飛連が消えた。孔飛連は低く構え、膝を屈曲し、深く沈み込んだ。

誘い——李聖鬼に手を出させ、心の動揺を誘うためのもの。ぞくりと背筋が凍つた。

孔飛連、突き上げるように、剣を差し出した。李聖鬼の水月に伸びる。右に倒れこんでやり過ぐす——脇腹を掠めた。

そこへ刺突。

首を捻り、剣を避けた。首の膚、頸動脈の上。刃が通過——人工^{レスビ}血球が噴き出る。瞬時に、血漿が凝固する。

間合いを取った。銃の間合い。三連の発射炎——左の銃から、金色の薬莢。降りしきる灰が、火花と触れるたびに爆ぜ、散つた。

踏み込む。突き。ブローニングの射撃。

遊底が引き戻る——弾切れ。旧型のカートリッジ弾が、尽きる。

孔飛連の微笑み。斜めから突き下ろした。

仰け反り、かわす——頬を削る。腰を捻り、廻し蹴りを打った。

つま先が、孔飛連の髪に触れた。さらに身を回転させる。膝を曲げ、低空の擦り蹴り。孔飛連の足を払う。地面に積もつた灰が、わつと

舞い上がった。

立ち上がる、同時に前蹴り。孔飛連、左腕で受ける。骨軋む衝動。飛び下がった。

距離が開いた。素早く、再装填。ブローニングの、熱せられた弾倉が灰の中に埋もれた。

孔飛連は射程の外にいた。剣も当然、届かない。届かない距離で、睨みあった。

「二挺拳銃は、腕と銃との一体で成る」

孔飛連の独言。

「旧式の銃と、有配線ワイヤードの腕では、不十分でしょう。そうまでして、護るべきものですか？」

問いかけ。

黙殺。

踏み込んだ。銃撃。孔飛連の頭部、脚部、胴——鋼刃弾が放物線を描く。孔飛連は頭を低くして飛び出した。肩と腰、鋼刃弾が突き刺さる。黒い血。

剣を突き出す。銃をつける。炎が散り、影がすれ違った。

ブローニングが弾かれた。李聖鬼の左腕、鋼鉄の義手——親指と人差し指を残し、金属の指がばらばらと地面に落ちた。斬り落とされた指を見て、舌打ちする。

向き直る。

剣が伸びた。眉間。体を開く、わずかに逸れる。回転し、後ろ蹴りを放った。

孔飛連の左腕が空間を薙いだ。李聖鬼の蹴り足を絡め取り、引き倒した。灰の上を転がる。すぐさま飛び起き、飛び退きながら射撃。銃弾が孔飛連の頬を掠めた。

「何故、そこまで」

不可解な表情。理解に苦しむといった風情。

接近する。李聖鬼の蹴り——二廻転。同心円状の軌道。牙狗の五連射——鳳凰の刻印。

孔飛連の刺突。銀の軌跡。四つに分岐する閃光。

黒血、有機ナノマシンの灰——粉雪めいて飛び散る。互いに離れ、追突する。銃撃——孔飛連の脇腹の肉を削り取った。苦悶の表情。

銃火散る、中。ビジョンが蘇った。明らかな像。水晶の細胞。グラフィックの幽霊。

確かな存在。玲花——物質ではない、価値。

剣と銃が交差した。互いの肩と、腕を挟む。影が交わる。背中合わせ。

振り向いた。

動き出しは、孔飛連。剣が、李聖鬼の右腕に突き立った。

銃口から差し込まれた剣先——銃身を二つに割り、前腕を刺し貫き、肘に抜ける。微細振動の剣身——人工筋肉、チタン骨を挟み、前腕部が弾けた。

膝を落とした。裂けた腕——砕けた牙狗の銃身に、ゲル状の微細機械が滴り落ちる。砕け折れ、尖った骨——異質な物体。

剣が、突きつけられた。

「あなたを殺すことは、忍びない」

孔飛連は、脇腹を押さえていた。脂汗に濡れた顔。昏い眼が見つめる。意図の読み取れない、洞穴めいた漆黒。

「これ以上、抵抗を続けなければ、あなたを見逃すことも可能です。何でしたら、あなたを組織から逃がす手立てを考えてもいい。どちらが好条件か……」

否定——黙し、何かの意思も示さない。

孔飛連は溜息をついた。

「無駄なようですね」

諦め。合理的判断を手放した、無知な者に何を言っても徒労ではない、というように。

背を向けて、玲花の方に歩み寄る——孔飛連、剣を振り被った。「やめろ」

呻く——届かない。立ち上がる。脚が震える。孔飛連の剣の先――

―玲花が、呆けたように切っ先を見つめていた。

孔飛連が突き出す。猛然と。

赤い血潮。息を飲んだ。

剣を突き刺す瞬間、玲花は身を捻って避けた。防衛――死の概念の無いガイノイドの、退避行動。ただ剣先は、玲花の左眼を抉っていた。翡翠色が、紅に染まり、硝子体の透明液と共に流れ出した。

脚に、力が戻った。地を蹴り、駆ける。孔飛連が振り向いた。飛びつき、空中で廻し蹴りを打った。

顎を捉えた。孔飛連の頭が、弾かれる。割り込み、玲花の盾となった。

「つくづく、愚かな人だ。あなたは」

「そうかもしれない」

構えを取る。孔飛連の剣に対して、左半身に。

「だが、愚かにもなり切れなかった。愚直に、生き様を貫くことも出来ない」

だから目を逸らしていたのだ、と思う。

玲花に水晶を重ねあわせていたのも、ただ罪悪から逃れたいがためだった。強く在れという水晶の言葉、それを護る事が出来なかった。玲花に水晶を見出すほどに、弱い存在。そのことから目を逸らし続けた。水晶を救えなかったこと、故郷を取り戻せなかったこと。武人となったとき、自分が奪うものは明らかなる生であること。見なければ済んだ。意識しなければ、事足りた――水晶が犯され殺されるのを見過ごしたように。

そういう、十年だった。

「愚かですよ、あなたは。確かにある生を手放して、破滅を選ぶなんて」

「ならば、笑え。俺はどうせ、そういう人間だ。そういう人間のままでいいんだ」

「笑いませんよ」

じり、と歩を詰めた。両者とも。李聖鬼は壊れた右腕を庇うよう

に、斜に構え——孔飛連は剣を下ろした。

「わたしは、笑えない」

無構え。仕掛けるといふ意図は感じられない。ただ自然に、そこに立っている。予測できない分、攻めにくい。

再びの沈黙があつた。彫像のように動かない孔飛連と対峙して、李聖鬼もまた動かない。動かぬまま、互いに探り合う。無機物——この街にいて、生を手放して、機械仕掛けのように殺すこと。無気力に、何も考えないように、自らを彫像の如くに追いやる民工達と同じように、息を潜めて生きていた。

今は違う。攻勢をかけるため、動かず、水面下で攻め——息を潜める。

無言で圧する、互いに牽制する。何も語らず、何も主張しない。風鳴りの音だけが、響いていた。

一步飛び出す——二人、同時だった。李聖鬼の左脚が空間を刈り、孔飛連の剣が伸びやかに突き込まれた。

交差。

大きく、傾いだ。李聖鬼の胴に剣が突き立つ。刃を引き抜く、血飛沫舞う——黒い狼煙。

膝を折る。

剣先が伸びる。李聖鬼、体を丸めて前に踏み込む。刃をやり過ごす。地面を転がり、銃に——ブローニングに手を伸ばした。

左の人工操作手——人差し指をトリガーガードに引っかけ、拾い上げる。銃把に親指を掛けた。不十分。碎けた腕で、銃身を支える。孔飛連が振り向く。剣が伸びた。

発砲——孔飛連の脚を狙う。射撃とともに銃身が暴れ、それを右肘で押さえつけた。遊底が上下して、薬莢が舞い、銃火が顔の横で瞬く。灼熱を帯びる。さらに射撃、銃身が暴れた。

鋼刃弾の一つが、孔飛連の膝を碎いた。孔飛連——驚愕。想定外のオペレーション。孔飛連の体が崩れた。

間髪入れず、前蹴りを放つ。孔飛連の胴を捉えた。足裏で、肋骨

がたわむ感触を得る。孔飛連が前のめりに、倒れ込んだ。

孔飛連の刺突。左腕を差し出す——剣は、機械義手を貫いた。李聖鬼、すかさず右腕を振り上げ、突き出した。

砕けた腕の、チタン骨の先端を、胴体に突き刺した。

膚を突き破る——右胸の、肺に到達した。肺胞——硬い風船を破る感触。空気が爆ぜ、瞬間、孔飛連の体が電撃を帯びたように痙攣——貫く衝動。

腕を引き抜くと共に、頽れる。孔飛連——前のめり。膝をかいこみ、左脚で蹴った。

叩きつける。孔飛連の体。頭蓋を打った。斃れこみ、地に伏す孔飛連の体。灰の中に倒れ、黒い血溜まりが、広がった。

「強いですね、あなたは」

孔飛連が呟く。空気が洩れるような音。李聖鬼は首を振った。

「十年経って、答えもなく、もがいている。それが強いわけではないだろう」

「少なくとも、わたしにはとても、真似できません。足掻いている分、あなたの方が強い」

孔飛連が微かに笑った。

「自分の弱さを自覚出来る人が、弱いことはない。この街のものは皆、弱さを隠して生きている。わたしも、おそらくあなたも」

自分の行く末を全て手放した、それでいて敗者の惨めさを感じさせない。寧ろ清々とした、笑み。

「それでも、わたしを殺そうと向かってきたあなたは、なかなか良い表情でしたよ。迷いが消えたというような」

最後に洩らす——吐血した。孔飛連は眼を閉じ、微笑みを象ったまま、力尽きる。亡骸を、灰が包みこんでゆく。

背を向けた。

玲花がいた。左眼から流れる血——涙のように写る。白い膚に、真紅。拭ってやろうにも、両腕は既に、無い。

「銃すら、握れなくなっただか」

李聖鬼、崩れ落ちた。膝をつく。

「聖鬼」

玲花がしゃがみ、覗き込んでくる。指を失った義手で、玲花を抱き寄せた。衝動的に。

「痛いのか？」

玲花が訊く。細腕を、李聖鬼の背中に回して。

「痛みなどない」

「でも、腕が」

首を振る。玲花を抱き寄せた。

「たとえ銃が撃てなくとも、お前を抱くことが出来れば良い。痛みなど、どれほど在ったとしても」

金属の腕に、体温は感じられない。より強く、引き寄せ、身体ごと少女の温もりを感じ取る。二度とは得られない、刹那を掴まえるために。

灰が、降り止んでいた。

式拾：明黃曉光

城砦の狭間、夕闇が包み始める。阿宮は街を振り向いた。

端末は沈黙していた。電灰が停止してから既に三時間は経過している。港湾部の停電は未だ復旧しない。

数時間もすれば国境近くで火の手が上がる——阿宮が作り上げた”亡霊”は、しばらくネットを蝕む存在となりうる。

北宋中華——この国で生まれ育った阿宮は、他の二等以下の国民と同等の存在だった。日本人ということで、いくらか優遇されていたが、それも変わらない。環境負荷物質を分解する、生体素子が供給されるかされないかの差。

ここを出れば全てが終わる——にわかにはくそ笑んだ。ようやく、この街と決別するのだ。城砦と、灰。不愉快なもの全てと。

まだ見ぬ祖国、そこで研究を続けることは約束されていた。組織に使われる毎日から、抜け出すことが出来る。

郊外に足を踏み入れた。朽ちた建物、ショッピングモールの跡。

錆びた看板に、漢語に混ざって仮名文字が記されている。彼らとの待ち合わせ——阿宮を、祖国へと導くものたちとの約束の場所。ケースを提げる——最後の生体素子。

ふいに、銃声が響いた。甲高く。

胸元が、ぐっしりと濡れているのに気づく。生温い、赤が照り映える。生臭さが鼻をついた。

膝から下が消失したような心地——落下——地面が近くなる。倒れる瞬間、ケースの中身が路上にばら撒かれた。

手を伸ばす——かすかな希望が手の中から零れ落ちてゆく気分。それと同時に、果てない虚無を抱くような心地がした。

黒服の男が近づいて来た。まだ硝煙が棚引く銃が、右手に握られている。男が生体素子を拾い上げた。阿宮の方には目を向ける事はない。

阿宮、ゆつくりと頭をもたげた。

男の姿、その先で、白い影が浮かんだ。少女の姿——翡翠色の瞳が見据えた。

”亡霊”。サイバー化を施さない、生身の体には決して見えるはずのない虚像。そもそも、電灰は既に消えている。ならば幻。

「楽しいかい、そこで見ていて」

精一杯の強がり——血の唾を吐いた。

立ち上がる。

「平坦な道はないものだな、夢を見させてもらったよ」

懐に手を伸ばす。護身用の短針銃、頼りがいのない唯一の武装。

「畜生が」

立ち上がる。銃を向ける、引鉄を引く。

男が振り向いた。銃火が瞬く——薬莢が落ちる音。銃撃と共に迎える意識の終焉。

朝靄が掛かる——城砦の輪郭が滲んでいた。灰色にうねる空、手を翳す。繋ぎ合わせた機械指。握る——動きがぎこちない。

ポケットから端末を取り出す——相当苦労してボタンを押した。

『着いたか』

受話口から、黄昌日の声。しばらく、沈黙。次に何を言うべきか、迷っていた。何かを伝えることに、臆病になっているかのように、言葉が出て来ない。

『電灰は、消えているか』

発したのは、黄昌日だった。

「ああ」

網膜から消えた、視覚情報——電灰網は未だ、沈黙を保ったままだった。

『今回は相当なものだ。だが、だからといってお前への追撃の手は緩められたわけではない』

「そつだろつな。だが、もうそれも良い」

『そうか』

噛み合わない会話。それでも、黄昌日は奥底では分かっていると確信した。語る事なく、知ることもある。

『港へ行けば、ボートがある。既に行き先は入力してある。朝鮮半島の平安北道に、な』

「そうか」

多くは語らない。それでも構わない気がした。語る事など、誰も望んでいないのだと。だから、ここで終いにする。それこそが相応しい。

「じゃあな、黄昌日よ」

『ああ』

最後の声——いつも通り。何の変化も無い。

電話を切った。

潮風が香る——港湾の入り口。背後に、企業のビル群があった。

黒々とした環境建築。この街に来て、最初に足を踏み入れた場所。二度と戻らない。

端末を仕舞った。

「それで」

李聖鬼は振り向いた。

「いつまでそこにいる」

霞の中に、人影があった。その人物が歩み寄る。輪郭がはっきりして、やがて毛蘭の姿になった。

杖を、ついていた。左半身を引きずり、不自由そうに歩いている。

毛蘭の顔面——蚯蚓腫れが斜めに走っていた。

「“亡霊”にやられたか」

「情け無いことにね。接触したら、あたしの方が取りこまれちゃった。神経ごとリンクして、痛みを共有してね」

毛蘭、やおら白衣の内ポケットから銃を取り出した。回転式——相当に古いタイプ。

「過去もね。朴水晶と、あんたのことも」

「覗き見とは、趣味が悪い」

「しょうがないでしょ、あの子が見せたんだから」

銃を、突きつけた。銃口の先に、李聖鬼の心臓がある。

「漢電子は」

と、撃鉄を起こした。

「ユビキタス事業から完全に手を引くことになった。電灰は完全に潰え、今は北京が代替システムを開発中。それまで、組織は一時的に活動休止となる。武装警察も国境警備に乗り出して、あんた一人に人を割けないんだって」

「それで、お前が派遣されたってのか」

「気が進まないけどね。銃なんて、何十年振りかわからないし」

狙いを定められた。李聖鬼は動かない。銃口と、正面から向きあう。

「いつ、知ったの」

毛蘭が訊くのへ、李聖鬼はつと、視線を上向けた。

「五年前に。ある筋からの情報でな」

遠い記憶の糸——忘れ去るただけに存在する過去を思った。

「国を失った流れものに残された道など、ただ身体を切り売りされるか、あるいは武人にされるかのどちらかしかない。俺は後者だったが、水晶は前者だった。故郷で果てた後、水晶の細胞のみが仲買人を介して取り引きされた——セクサロイドに使われていた、ということを知った。ヒト由来の遺伝情報を基に構成された、有機ガインイドシリーズ。その最後の一体が玲花だと」

黄昌日の情報——朝鮮に関する噂は、嫌でも耳に入ってきた。全てにおいて、盲目であり続けることなど出来ないように、水晶の情報もまた無条件で受け容れていた。

「なるほどね。玲花とかいうあのガインイドを抱く事で、あんたは朴水晶を重ね合わせていたわけね」

嘆息して言った。

「どうかしている。ガインイド一体に、必死になって。馬鹿じゃな

いの」

毛蘭の手——銃口が微かに震えている。躊躇いの色が、瞳に浮かんでいた。

「俺は、水晶の言うように生きようと決めたただだ。今まで、そうすることが出来なかった。出来ない自分から、目を逸らしてきた」

「だからって、何でガイノイドに。あんなの、ただの機械じゃない」
「あいつは、俺の故郷を見たいと言った」

李聖鬼、体を傾ける。包帯を巻いた右腕をさすった。

「そいつを叶えるというの？ 数式が出した気まぐれの願望のために、あんたはここを出るのか。命をかけるに、値するものなのかよ」
「価値などない」

告げる——厳然たる事実かのように。

「俺には、最初から賭けるようなものは存在しない。あるならば、それはあのと潰えた。燃え滓のような状態で生きて、空の器を満たすものなどなく、朽ちることもない無機に近づけていた。自分を」
毛蘭——弱々しく、首を振る。否定を表すものか、あるいは自分が抱いた迷いを振り払うためのものか。唇を噛んで、痛みに堪えているかのような印象。

「ただ、まだ価値があるというならば……あいつの望みを叶えることで、少しの間でも水晶の言うように、生きることが出来れば、それが俺自身に残された唯一のものだろう。だから」

「動くなよ」

毛蘭——顔を上げる。警告を発した。

「水銀弾だ、こんな銃でもあんたを殺すことはできるよ」

銃口の振れが大きくなる。戸惑いの表情。李聖鬼は銃を見据えた。「ここを出て、自分の価値を確かめたいというの。誰かに褒めてもらえらるでも思っているのかよ。願望を叶えようが、そんなのあんたの一人よがりだよ。結局あんた、朴水晶と細胞を共有するあのガイノイドを自分のものにしたただだろう。朴水晶を独占できなかったから」

そして沈黙——李聖鬼は街を仰ぎ見た。環境建築とパネル群、灰色と群青の空間を背景に。電灰の消えた都市は、何ごとにも上書きされない、褪せた色を以って在り続ける。

「お前はここまでいい」

毛蘭の表情を見る——苦痛をはらんだ色。

「あいつが俺のものだと思ったことはない。だが、重ねていないかと言われれば嘘になる。だから、完全に決別する必要がある。それを今から成しに行く。弱さゆえに、目を塞いできたその代償を払いに。だがお前は違う。それを撃てば、今までどおりだ。報いを受けるのは、俺一人でいいんだよ」

歩き出した。

「行くなよ、李聖鬼」

毛蘭の声。

「行かないでよ……あんたを、殺させないでくれ」

悲痛な響きを伴う、毛蘭の声。止まらない。二度と、振り向かなかった。

乾いた銃声。

波の音が、した。コンクリの埠頭に、濃緑のAIボートが停まっている。軍用の揚陸艇——苦笑する。

船上に、玲花がいた。

青い漢服。潰れた左眼に、包帯を巻いていた。硝子の輪郭、金糸を編みこんだ髪がなびく。そこに在るだけで、崩れ去りそうな線を以って。

「玲花」

呼びかける。玲花が笑いかけた。

「待たせたな。少し、手間取ってしまった」

乗り込み、エンジンをかける——炎が灯る、感触。

行き先——黄海を経由し、朝鮮半島に至る。平安北道。遠い昔に棄てた故郷。朴水晶が眠る場所へ。

傷が疼いた。銃創を中心に強張る感覚。毒が、体を駆け巡る。歯を食いしばった。生温い血が、背中を濡らした。船が離れ、青島の環境建築群が遠ざかる。機首は東へと進路を取った。

山東半島の南を通る。湾を離れた。

やがて黄海に至り、その先の西朝鮮湾に進路を取った。ここからは、直線距離。あと一時間ほどで着く——安堵から、力が抜けた。李聖鬼は座りこんだ。

足の感覚が無くなってきた。身体は、限界を訴えていた。神経を麻痺する毒。

「ねえ、聖鬼の故郷ってどんなところなの？」

玲花が訊いてくる——子供のような無邪気さ。好奇心に、眼を輝かせる。辛うじて動く人工操作手で、玲花の頭を撫でた。

「別にどうってことはない。何にもないところだ」

神経が痺れた。手を下ろす。

「特に見るべきものも、珍しいものもない。貧しい山村、そんなところでも、人にはいつかそこに帰るべきところがある。唯一、与えられた安らげる場所……」

視界がぼやけてくる。ひどく眠い。それでも、苦痛は襲っては来なかった。

ふと見ると、東の空から金色の光が差してきた。朝日——青島にいたときには、目にすることがなかった、陽の光だった。

あれが本来の、世界の色なのだ、と思った。黒と灰色の城砦、電灰やホログラムのどぎつい原色。ナノマシンの灰や汚染物質とは無縁の世界——古来、人は太陽と共にあったという、あの街では伝説にすらなっていた話も本当のことだと思える。

人は、そうやって生きて、死んでいくのだという実感があつた。晴れ渡る空が、頬を撫でる微風が心地よい。

「玲花、いつか歌ってくれたよな。あれを、もう一度歌ってくれな

いか」

ふと、口にした。

「え、でも電灰はもう……」

「電灰じゃない。お前の歌だ、お前に歌って欲しい」

永遠に届かなくなる、その前に。

玲花はちよつと戸惑っているようだった。視線を宙に漂わせ、思案顔になって言った。

「この間と、同じでいいなら……」

息継ぎ。少女の喉が震えた。

静かな歌だった。感情を揺さぶるのではない。訴えかけることなく、聴き手が安らかなるために在る歌。無数の音が一つに紡がれ、精緻な旋律を生み出す。身体を蝕む毒を忘れさせるほど、快く響く。織りこまれる詞——声こゑが溶ける、染み入ってくる。

ここではないどこかへ行く、という意味だった。寒く暗い世界を抜け出して、いつか同じ所へ——

曖昧な意識の中、水晶の声が蘇っていた。誰かに優しく、という言葉。

俺はそこに近づけたのだろうか——繰り返される問い。答えは得られない。

それでも——価値を見出したもの。それを信じる事は、決して消える事はないという——予感めいたものがあつた。確かに在る、空白を埋めるもの——それが全てだという思いを抱く。

揺れる、波間にいた。眼を閉じると、瞼の裏に淡い光があつた。

金色の曙光。

消失する感覚。手を伸ばす、空を掴む——地面に落ちる。

遠ざかる声。李聖鬼は眠りについた。

式拾：明黄晓光（後書き）

参考文献

『ポスト・ヒューマン誕生』 レイ・カーツワイル NHK出版

『サイボーグ・フィロソフィー』 高橋透 NTT出版

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9709h/>

黄海に消ゆ

2010年10月8日12時31分発行